

# 研 究 集 録

昭 和 3 2 年 度

大阪学芸大学附属高等学校天王寺校舎  
大阪学芸大学附属天王寺中学校

## ま え が き

私どもの附属中学校では開校以来研究紀要第一集「ガイダンス」に始まる一連の研究を続行してきた。しかしこれは学校として一定の方向をめざす研究であるが、それ以外に教官個々の興味、欲求にもとづいて行われるものがあったとしてもよいわけで、本集はそのような趣旨から研究成果をまとめてみたものである。各教官はやや自由な立場に立っているから、本集の内容はいろいろで、そのテーマは終結したものもあろうし、未完成のものもあるであろう。

どうかそのような眼で本集をみていただき、本校のために、或は教官個々人のために鞭撻、叱正を願うことができたなら、大変有難いしだいである。

昭和三十三年一月

大阪学芸大学附属高等学校天王寺校舎主任  
大阪学芸大学附属天王寺中学校長

馬 場 菊 太 郎

拜啓 時下早春の候 貴校益々御発展の事と存じます。

さて、本校におきましては、創立以来ガイダンスその他について年々  
ささやかな研究をいたしその発表を続けて参りましたが、一昨等高等  
学校が附設されましたのにもない中、高六ヶ年一貫教育を当面の課  
題といたしております。しかし未だ学年も完成せず研究もその途上に  
ありますのでいずれ後日発表させて頂くことに致し本年は、教育の個  
人研究の一端を集録いたしました。早速一部お届け申し上げます。  
何かの御参考になれば幸いと存じます。

何卒御一覽頂きまして御批正下さいますようお願い致します。

昭和三十三年三月三日

敬 具

大阪学芸大学附屬高等学校天王寺校舎主任

大阪学芸大学附屬天王寺中学校長

馬 場 菊 太 郎

## 目 次

中・高一貫六ヶ年教育について .....	沢 田 義 一	1
志賀直哉の作品に就いて.....	田 中 義 真	11
—子供を描いた作品を中心として—		
山 村 の 生 活 .....	山 崎 俊 郎	18
—古野川上流の集落—		
近郊農業に於ける蔬菜栽培の変遷について.....	安 井 司	29
—大阪府部を中心とした—		
数学科学習指導上の問題に関する実験的考察.....	川 野 太 喜 男	37
本校における理科施設の拡充について.....	佐 崎 良 雄	44
変声期の中学生の音楽教育の一端.....	久 米 てる 子	54
～ 指導記録より ～		
家庭科教育における男女共学の成果.....	上 村 佐 智 子	60
中学生の写生に於ける線描について.....	木 村 茂	63
★ 本校生徒の悩みに対する一考察 .....	新 堂 庄 二 重 松 卓 未	72
★ 中学生の古典指導について .....	中 邑 元 子	84
★ 高校生の読書実態の調査にあたって .....	高 岡 輝 夫 久 島 惟 行	89
★ ParadoxとPuzzle .....	福 原 公 雄	90
★ 中学生と睡眠についての調査 .....	辻 江 正 夫	91
★ 走力と練習効果 .....	保 田 喬	92
★ 日本語「が」「は」について .....	野 村 英 太 郎	94
★ ミス・スペリングとその指導 .....	田 村 啓	95

★印は、中間報告または計画

## 中・高一貫六ヶ年教育について

沢 田 義 一

### 〔1〕新学制について

新制中学が発足してから今年で満十年になる。昭和二十二年四月、六三三制の新学制が施行されたのであるが、敗戦直後の日本の国情からすれば、半ば強制的なこの九ヶ年の義務教育の実施が如何に大きな負担であったことか。その後十年間というものは、殆んど苦難の道の連続であった。否現在に於いても未だその新学制の体裁を整えるのに幾多の隘路が横たわって、その行手をはばんでいるのである。

このような大きな犠牲を支払って施行されているこの新学制は果してそれに値する教育効果をもたらしているであろうか。しかし、その問題について考える前に、われわれは、いま一度今日迄の経過とその成立のいきさつなどについて眼を通すことが必要である。元来この新教育制度は周知の如く、日本が占領下にあるとき連合国、主として米国のアドバイスに基づいて成立したものである。ところがその米国内に於いても、この学制を採用しているところは、極く少数の州で、しかもその実施効果については未だ十分に検討されないままのものである。いわば日本に於いて新しく試みられたものである。このような事情の下に成立した制度であるから、特に国情が異なり経済力の乏しい日本に於いて、この新学制の実施はまずその必要とする膨大な予算の負担力に最初につまづき、その運営に困難を生じたのである。このような結果を招いたことは全く当然のことという外はない。

さればこそ、昭和二十六年日本が独立国として立ち、自主的な立場でものを考える段階に立ち至ったとき、果せるかなこの新学制について、厳しい批判と反省が加えられるようになったのである。即ち日本の国民育成の教育体制として、そもそも新学制が、日本の国情に照し考えるとき、真実適切なものであるかどうか。符叉、その運営が適当に行われているかどうか。われわれ自身の問題として、日本の将来を決定する問題として、真剣に検討が加えられるに至ったのである。誠に当然と言わざるを得ないのである。以来十周年を迎える今日に於いて、引続き日本国の教育の在り方について、種々の論議がかわされているのであるが必らずこの新学制の問題がとあげられているのである。

例えば本年に入ってから、かの文部省の審問機関であり、広く学識経験者を招き日本教育界の最高の叡智を集めて審議される中央教育審議会の答申案の中に、わが国の科学教育を振興すためには、現行の学制の運営のままではよろしいかどうかについて審議された結果は、現行の六三三制のやり方では不十分であり、就中、中学三年、高校三年を統合した六ヶ年一貫体制を整えることが急務であるという結論に達したことが報告されているのである。又最近開催された全国の高等学校長の会議に於いて非常に大きな問題としてとり上げられたのは、現行の六三三制の問題であり、結論として中学三年高校三年を統合した六ヶ年制の高校を以って教育の理想としているのである。当時新聞紙上にもこの問題は大きく取り上げられていたから、未だ記憶に新たなことと思う。以上挙げた例はその顕著なも

のであるが、この他、最近のあらゆる教育の問題に関する会議には、大なり小なりこの現行の学制にふれる討議がなされているのが実情である。もっとも、現行の新学制は絶対に変更すべきではない、という強い意見もあるのであるが、それとて、その運営について現在のままで十分であるというものではない。されば文部省に於いても、日本の発展のための教育を指向して、鋭意この問題について研究中であると仄聞しているのである。

いずれにしても、いまやこの学制の問題は、独立国日本の教育ということに関連して、大いに検討され反省がなされていることは事実である。そして特にその問題の焦点となっているのは、中学校三ヶ年高等学校三ヶ年の運営にあるのである。先に挙げた例によってみられる如く中高六ヶ年の一貫体制が殊に関心の的になりつつあるように思われる。

## 〔2〕 本校の教育体制

### (1) 附属高等学校の誕生

当大阪学芸大学に於いては、昭和三十年四月より附属高等学校が創設されたのである。ここに於いて、附属校は、附小、附中、附高といゆる新学制の六、三、三の教育体制が整い、研究校としての面目を一新するに至ったのである。このことは、本学が教員養成の大学であるとともに、附属校がその研究の実証、教育実習の場であることに鑑み、誠に大きな意義を持つものといわねばならない。況や現今この学制について、種々の論議がなされているとき、如何なる運営をしてその実績を挙げるかは、関係各方面の期待と共に、学校本来の使命に鑑みて特に重大な任務を持つものというべきであろう。さてこの学制の整った附属校の教育の在り方について述べるに先だて、わが附属高等学校が設立された趣旨を参考までに次に掲げてみよう。「本校は学校教育法第四条の趣旨に則り、高等普通教育を施すのを目的とするとともに、学芸大学の使命に鑑み、教育の実証的研究と教育実習の場としての特色を発揮し、六三三制度の一貫した学校教育を行うものである。」というのである。さてここで問題は、前掲の六三三制度の一貫した学校教育ということである。この一貫教育とは、果してどのような教育をいうのであろうか。

### (2) 学校教育とは

われわれは、一貫した学校教育ということを考えるに当って、まず学校教育というものが、如何なる構成要素を持って成立しているものであるか、この問題は余りにも既定の事実として誰も疑うものはないのであるが、この辺に一貫教育を理解する糸口があるように思われるので、極めて簡単に、その根本的な諸条件を分析して、学校教育の一貫体制というものの理解の手掛りとしたいと思うのである。そこでまず、学校教育の成立する基本的な条件について、岩波講座「教育」所載の勝田守一氏の御意見を借用させていただくこととする。「ひとしく学校といわれるのには、そこには教師という教育の専門家と学習する生徒があり、一定の教育の目的と教育内容の組織をもち、それにふさわしい方法を用い、その活動の場としての建物を所有していることである。」と。この場合学校というのは当然学校教育の行われる場という意味とそのものを含んでいることはいうまでもない。即ちこれによると、学校教育が行われる基本的要素を抽出してみると、①教師、②生徒、③教育目的、④教育内容、⑤教育方法、⑥その建物の以上六要素に分けて考えることが出来るのである。したがって、この構成要素の内容、即ち質如何が、教育活動そのものを左右すると考えてよい。そこで一貫した学校教育ということを理解するには、これらの要素につ

いて考察し、その運用の仕方について検討すれば理解が早いのではあるまいか。そして更に教育効果の面から吟味すれば一そう堅実だと思う。

#### (イ) 教育の効果を挙げるには

(a) 学校教育の効果を挙げるためには、さきに述べた学校教育成立の基本的な六つの要件について考えるのが便利である。即ち最も抽象的にいうならば、これら六つの要件をそれぞれ満足すべき状態におくことが教育活動の効果を挙げることだともいえるのである。例えば、①教育基本法などにうたわれている教育の目的をかんがえた教育目的を指向し、②もっともかしこく考え、よく洗練された教育内容をもって、③それらの目的と内容に相応しい適切な方法がとられ、④熟達した専門の教師が、⑤よりよく教育的に配慮された環境の下で、熱意と善意にみちた教育活動がなされたならば、その教育効果は期して待つべきものがあるであろう。殊にここで強調しておかねばならぬことは、教育の効果を挙げるためには、それらのことがらが特に計画的で、合理的にしかも継続して、繰返し行なわれることが必要であるということである。

(b) 更に今一つ考察しておかねばならぬことは、教育するということが即ち教育活動の本質的な意味を確かめておくことである。一体、教育するとは如何なることか。これを一言にしていえば、人間の形成に参画することであろう。本来人間が人間として育成してゆき完成されてゆくためには、それ自体、内から伸長してゆく力があって、それを誘掖補導しながら助長してゆく協力者との相乗積によって、その仕事は達成されるものである。それは、比較的成熟したものが未熟未完成のものの内なる力を開発し大事にそれを育て上げる仕事である。そしてそれは全人格的な接触と、相互の交流とによって醸成されるものである。学校はこの作用が達成されるために最も都合よく整備された(aに述べた条件を満足さす)環境に於いて、より合理的に十分計画されたプランによって継続して行われるところである。

(c) しかしながら現実の変は仲々きびしく、以上とり上げた幾つかの条件を十分満足させることは容易の業ではない。けれどもわれわれ教育にたずさわるものとしては、でき得る限りこれらの諸要件を満足さすべく不断の工夫と努力を重ねて、一步でもその理想に近づくことが望ましい。そして又、これらの基本的な要件を一つ一つ具体的に積み重ねていくことが、それだけ教育の効果を一つ一つ積み上げることに外ならないのである。

したがって本校の教育の在り方を考える場合も、以上種々述べて来たことがらを根底として考えられた十分の体制を検討として進められねばならない。この見地から理論づけられ体系づけられた教育体制が即ち、中高六ヶ年の教育一貫体制であるのである。これについて、次に具体的にその特色とするところを述べてみよう。

### (3) 六ヶ年一貫教育の特色

#### (イ) 教育目的の一貫性

わが国教育の目的については、教育基本法に明示され又学校教育施行規則にはその細目が示されていることは周知のことである。即ちこれはいわば普遍的一般的な国民教育の目的である。したがってわが国の教育がこれに則って行われることは当然のことであるが、しかしそれに達するには、各学校に於いて決して一様ではない。例えば「自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成」を期しても、その学校が田舎にあるか、都会にあるか

又、小学校であるか、中学校であるか等種々の条件によりその学校を構成する生徒の実態は多種多様である。多種多様な生徒の実態に即して自主的精神は養われねばならずまた学校の実態に相応しい健康教育がなされなければならぬとすれば、そこに学校のカラーが自ら生まれるのであるが、このように学校教育の在り方は一様ではない。即ち国民教育の目的は一つでもそれに達するためには、学校独自の教育目的が設定されなくてはならない。そして教育活動が計画性をもつためには、まず第一にこの学校の教育目的が確立していることが大切である。更に教育が効果を挙げるためには、一定の目的の下に、長く継続的に実施されることが必要である。殊に教育そのものである人間形成とか、その中核である円満なる人格の育成ということは、人間一生を通じて行われる大問題であるが、学校教育に於いては、望ましい人間像を指向して、教育活動がなされる場合、三ケ年の方が効果はあがり易いか、又は六ケ年間継続して行われる方が望ましいか、やはり教育効果は六ケ年一貫した継続教育の方が、より効果が大であることは、教育的影響という本質的な面からして言い得るのではなからうか。

#### ④ 教育内容の組織化と合理性

教育活動を為す場合、なにを与えるかということは重要なことである。指導要領というのは、これらについてその基本線を示したものである。これもさきの教育目的と同様、いやそれ以上に生徒の実態に即して考究されるとすれば、多様で複雑な性質をもつものである。一般には、教育内容となる文化財のスコープ、生徒の発達段階を考察するシーケンスこの組合せによってカリキュラムは編成され、そこから教材選択の基準が生まれるのであるから、この組織化は教育活動の適否と効果を大半決定づける。さて、このカリキュラムの編成、教育内容の組織化は、当面する生徒、教師の考え方などその他の条件によって決定されるものであるが、教育期間の短いということは、大変困難の度を深める。そのため中学校三年は一応義務教育の完成でもあり、高校進学への道を開くものであるから、カリキュラムの編成の実際は中途半端なものになる恐れがある。例えば後一年もすれば容易に理解出来ると思ひながらも、完成教育なるがために、むりにもやっておかなければならぬことが出来たりする。又受け入れる高等学校の場合も、新入生の学力が学校差が大きくてまちまちであることは、進度の上ではなほだ迷惑をする。特に大学進学を考え、高校で学習することが要求されていることが極めて多い現状ではこの新入生の学力不揃のため半年も足踏しなければならぬことは、時間の浪費以上に重大な問題である。

そこで中・高六ケ年を通してカリキュラムが編成されるならば、継ぎ目の無駄な時間の浪費と無理が省けて、生徒の発達に相応しい無理なく、また重複や空白のない即ち合理的なカリキュラムの編成が出来る上に、計画性のある教育活動がなされるというものである。十分考慮された教育内容を以て合理的な教育の運営がなされたならば、教育はそれだけ効果を挙げることは論をまたないところである。

#### ⑤ 継続性による教育効果

如何なる合理的な方法をもってしても、それが花火線香のような一時的なものであるならば、その効果が期待出来ない。それが仮に単純な方法であっても永続的に行われたならば、ときに意外な効果を挙げることは、教育心理学の示すところである。例えば知育体育に於いて練習効果が如何に大きいかは実証済みであるが、継続した影響を与えることが学力体力を増す上に如何に重要な要因であるかもこれまた周知の事実である。殊に、人格の



陶冶に於いて、日常の行為の習性化が一般にはその人の性格を造り上げることを考えると、きこころに貫した教育目的の下で合理的に計画された教育内容によって六ヶ年間継続して教育活動が行われた場合その効果は即ち期して待つべきものがあるといっても過言ではない。

## (二) 個人を生かす教育

### (a) 個人を知ること

実際教育の第一頁は、如何にして生徒を知るかということであろう。教育の対象である生徒の実態を知らずして、教育することは、あたかも、診断しないで施業する暴挙と異ならない。生徒を観察し、生徒の実態を調査し診断してこそ、その実情に即した教育内容が組織され、教育の方法が考えられる。これが教育の常道というものである。

殊に教育基本法にうたわれている教育の目的にも「個人の尊厳を重んじ……。」とか或は「個人の価値をたつとび……」などと個人を尊重することが明記してある。更にさかのぼって憲法をみると「教育の使命は、この理想を実現しうる個人の完成充實をはかることである」と明示してあるが、これによってみれば、わが国の教育のめざすところは、個人を尊び真理と平和を希求する人間の育成にあるのである。即ち民主国家の基礎をなすものは、個人の尊重であり引いては平和な世界の招来である。特にその中基本をなすものは、個人の尊重である。教育はまず個人の価値を認め、これを尊重し、そして個人を知ることから始められ真理と平和を愛する個人を育成することに終るのである。

### (b) 個人をみつめること

さて、中学校、高等学校で学ぶ生徒は、どんな生態をもっているであろうか。この時期の生徒は、一言にしていえば、心身ともに激変期であるといえよう。非常な成長発育期にあるため、絶えず不安動揺して僅かな事象が敏感にひびき影響するときである。したがってもっとも注意して指導がなされねばならないのである。この意味に於いても特に生徒をよくみつめて、如何なることを欲求しているか、生徒の心情はどうであるか、十分観察してその実情に即して適宜の処置が講ぜられることが極めて肝要である。殊に生活指導に当っては、教師の臨機の処置が適切であることが深く望まれる。

### (c) 個人差に応ずること

この時期の生徒はまた発達状況が個人によって著しく違ふ時期でもある。いつ迄も子供のようなところがあるかと思えば、大人も及ぶような成育の早いものもいるわけで、特に油断すると直ぐ学力の差が大きくなる時期でもある。体力に於いて学力に於いて、また人柄においてこの著しい相違は一体どうしたことであろう。即ち個人差の著しい原因を追求しておかねばならない。知能や性格、健康状況、興味や欲求それぞれの個人差の生ずる個人の素質や生長過程に於ける環境、過去の経歴などはいち早く調査し、日常の生活の状態をよく観察して十分な資料に基づいてその原因を探求し、個人差に応ずる適当な教育的処置がとられるとき、個性は生かされ、個人は円満な発育を遂げることが出来るのである。

### (d) 個人を愛護することと師弟愛

以上 (a) 個人を知ること、(b) 個人をみつめること、(c) 個人差に応ずることの教育は、既におわかりのように一朝一夕で出来る仕事ではない。長い年月と強い信条と根気と全員の協力なしでは到底望めないことがらである。即ち個々の観察記録にしても、教育調査にしても、綿密な計画の下に根気強く継続して行われねばならないし、その判断も多くの資

料をともにして、衆知を集めて為されることが望ましい。したがってこのようなことを実施するには、余程有能な教師でも短日時に仕上げることは難しく、よし為し得たとしてもその資料を基にして、生徒の指導が行われ、又補導がなされるには、時日を要するのである。即ち本当に個人を知り、これが発育の状態をよくみつめ、個々の事態に即して、適切な処置をなすためにも、三ヶ年間の教育よりも六ヶ年継続の教育の方が極めて好都合であることは論を俟つまでもないことであろう。中・高一貫した指導体制の下六ヶ年継続した教育が進められるとき、より個人は適確に把握され、個人を知ることによって、益々生徒に愛情は深まり、生徒の個人個人の幸福をめざして、これを養護し愛育する心情が、翻って、生徒の教師に対する信頼感を増し、「己を知るもの」として相互に愛情は交流して、教育の本質的な作用である全人格の相互作用により教育効果は高められるのである。

師弟愛が自然の形に於いて芽ばえ、それがすべての教育活動に発揮されるとき、教育は完全な姿に於いて為されるものである。このような状況においてこそ、個人はその個性を十分伸長しえて、いわゆる個性豊かな個人を生かす教育も可能になるのではあるまいか。わが中・高一貫の教育体制もかくてこそ、その特色を発揮し得たものといえるのである。

#### 【4】 中・高一貫体制に基づく実施案

以上述べて来た中・高六ヶ年の一貫教育の体制を実現する為、既に今まで実施されたもの及び今後特に継続して考究し急ぎ実践されなければならぬものを下に掲げてみよう。

- (a) 一貫体制としてのカリキュラムの改訂
- (b) 生徒の生活指導計画の検討
  - (例) ① 望ましい人間像の確立
  - ② 生活指導の実施細目の作成
  - ③ 中・高の年間行事予定の検討
  - ④ 中・高の連絡会議並びに補導会議の実施
- (c) 連絡進学の実施と合理化
- (d) 附中・附高・大学の教官陣の協力体制の確立
- (e) 教材校具校舎等の経済的な共同利用

#### 【5】 諸外国の学制

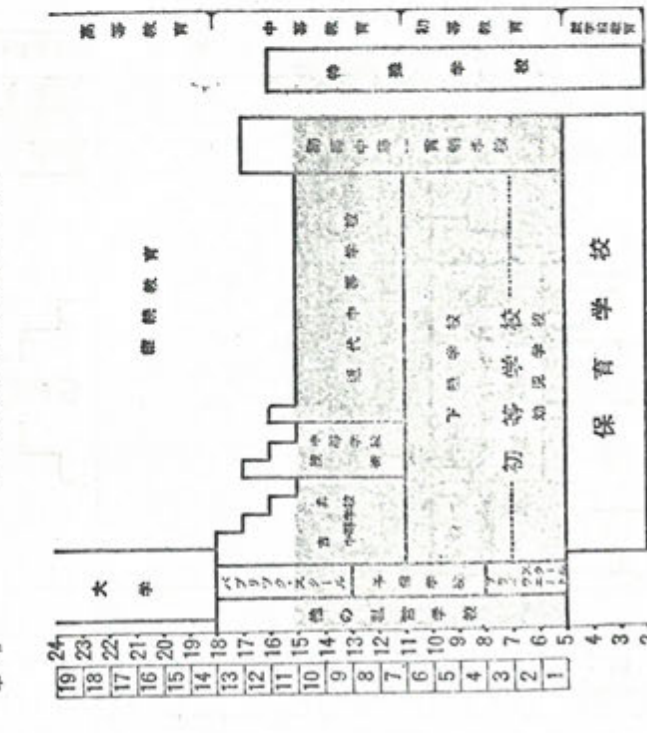
諸外国の学制を図式化したものを次頁に掲げ参考に供したいと思う。



# イギリス (イングランドおよびウェールズ)

(1950年現在)

学年

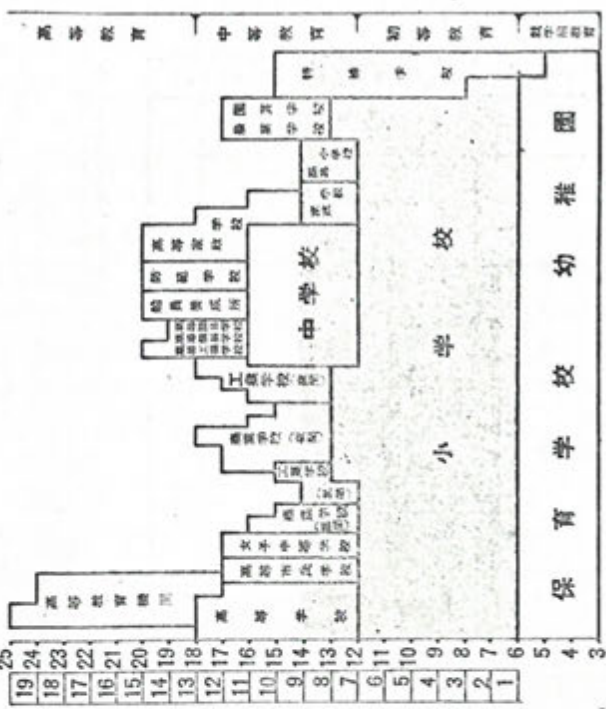


- 保育学校 (Nursery schools)
- 初等学校 (Primary schools)
- 中等学校 (Secondary schools)
- 高等学校 (Higher education)
- 私立学校 (Private schools)
- 预备学校 (Preparatory schools)
- 公立学校 (Public schools)
- 其他独立学校 (Other independent schools)
- 大学 (Universities, university colleges and other colleges)
- 继续教育 (Further education)
- 特殊教育 (Special schools for handicapped children)

(1) 数字は英人の子供のみにあつて、イギリス、ウェールズ、スコットランド、北アイルランド、および海外に在住するイギリス人の子供も含まれる。(2) University & University College は大学と同等と見做す。数字は、その種類による。数字は、その種類による。数字は、その種類による。

# オランダ

(1950年現在)



- 保育学校 (Nursery schools)
- 小学校 (Elementary schools)
- 中学校 (Middle schools)
- 高等学校 (Higher education)
- 農業学校 (Agricultural schools)
- 商業学校 (Commercial schools)
- 工業学校 (Technical schools)
- 航海学校 (Maritime schools)
- 音楽学校 (Music schools)
- 美術学校 (Art schools)
- 体育学校 (Physical education schools)
- 職業学校 (Vocational schools)
- 私立学校 (Private schools)
- 中等学校 (Secondary schools)
- 女子中等学校 (Girls' secondary schools)
- 男子中等学校 (Boys' secondary schools)
- 高等学校 (Higher schools)
- 大学 (Universities)

(1) 数字はオランダの子供のみにあつて、オランダの海外に在住するオランダ人の子供も含まれる。(2) 数字は、その種類による。数字は、その種類による。数字は、その種類による。





# 志賀直哉の作品に就いて

—子供を描いた作品を中心として—

田 中 義 真

## 1

わたくしは 前回刊行された「研究紀要七」（昭和30年10月本校研究部刊）において、近代文学作品が 現在使用されている中学校国語教科書三十数種類の中に いかにか採りあげられているかということをもとめてみた。そして 一資料として これらの作品の一覧表（同書151～156 P）を作った。その結果 幾つかの特色が見出されたが、志賀直哉の作品が 数多く採り上げられていることも 注目されたことの一つである。煩をいとわずそれを数字的にあげると、彼の作品が十四種類もとりあげられて 芥川竜之介（十種）などを断然ひき放してトップにたっており、また同一作品二度以上も含めて、これらの教科書に二十回以上登場してくる作家は、夏目漱石・芥川竜之介・島崎藤村と志賀直哉の四人にすぎない。どういふわけで志賀直哉の作品が こんなにも多くとりあげられているのであろうか「志賀直哉ほど生きた影響を、深く現代文学に与えている人はいません。鷗外、漱石といえども、この点ではとうてい彼に及ばないのです。」（中村光夫著「志賀直哉論」）といった文学評価の立場からであろうか。教科書という限られた紙面では、芥川竜之介とか、志賀直哉とかの、いわゆる短篇作家の作品でないと とりあげにくいということによるのであろうか。とまれ、多くの作品が 中学生に親しまれているということは、われわれ国語教室を担当するものにとって、見逃してはならぬことである。そこで 今回は教材研究の一端として 志賀直哉文学の特質といったものを考えてみることにする。

## 2

志賀直哉の採択作品十七篇をみると「菜の花と小娘」「子供四題」「清兵衛と瓢箪」「小僧の神様」などの子供を中心とした作品が多いことに まず注目される。そこで 彼の作品年表をみると、子供を扱った作品の非常に多いことが、今更のごとく気付かれる。上記四作品をはじめとして「速夫の妹」「孤児」「児を盗む話」等があり、さらに標題には その文字は見えないが「真鶴」は子供を主題にした作品であるし、「或る朝」「網走まで」の中に描かれている子供も なかなか印象的である。

もちろん これらの作品に 登場してくる子供の年齢は まちまちであるし、描かれている子供の性格も、それぞれ特色を有してはいるが、これらの作品を通して 彼はいかに子供を眺め 子供を遇しているかを考えて行くと、そこにおのずから志賀直哉の輪郭が、浮かびあがって来るかもしれない。そこで これらの作品を通して 抽象されて行く彼の世界観をさぐってみる前に、何よりまず目立った特徴は 彼の子供を描いた時期のほとんどが、彼の作家活動としての初期であるということである。彼の処女作は 普通明治四十一

年に書かれた「或る朝」ということになっているが、〔註一〕しかし、これより四年前に「菜の花と小娘」が書かれているので、これをはじめとして、前記の作品を制作年代順にならべてみると、次の如くなる。〔註二〕

作品名	執筆年月日	発表年月日及発表誌
菜の花と小娘	明治37年5月5日	大正9年1月号「金の船」
或る朝	明治41年1月14日	大正7年3月号「中央文学」
網走まで	明治41年8月	明治43年4月号「白樺」創刊
速夫の妹	明治41年9月	明治43年10月号「白樺」
孤児	明治41年	明治43年7月号「白樺」
子供四題	明治42年1月	大正13年4月号「改造」
清兵衛と瓢箪	大正元年12月	大正2年1月1日「読売新聞」
児を盗む話	大正3年1月	大正3年4月号「白樺」
小僧の神様	大正8年12月	大正9年1月号「白樺」
真鶴	大正9年8月	大正9年9月号「中央公論」

〔註一〕「現代日本文学全集—志賀直哉論」（改造社版）の「創作余談」に「『或る朝』は二十七才の正月十三日亡祖父三回忌の午後、その朝の出来事を書いたもので、これを私の処女作といつていいかも知れない。」とある。

〔註二〕岩波書店発行「志賀直哉全集」（昭和30年刊行）の「発表年月日表」による。

これをみると、「小僧の神様」「真鶴」を除いては、いずれも彼の作家活動としての初期に作られていることになる。このことについては「創作余談」（昭和3年）に次の語があって説明されているようである。すなわち「前には子供を書く事が好きだったが、自分に子供が出来ると却つて書かなくなつた。見ているだけで十分になつたのかも知れない」と。ところで彼の年譜を見ると、結婚したのは大正三年の暮であり、長女慧子が生まれたのは大正五年の事であるから、先にあげた作品の大部分が大正三年までになっていたことと符節があつてくる。（大正九年に発表された「真鶴」も「創作余談」によると「後に発表した『真鶴』なども、子供のない時代に得た材料である」と記している。）

しかしここでは、彼に子供がなかったというただそれだけの理由で片づけてしまいたくない。ここに描かれた子供の生態から何かほかに彼の意図するところをさぐってみねばなるまい。そこで当時の彼の生活をのぞいてみることにする。彼の生活については、後年ものした「青臭帖」（昭和12年）を借りてここに記すと、

あの頃の自分の生活といふものは、午頃起きる。不愉快な元気の無い顔をしている。そして二時か三時になると自家を出る。友達の家に行く、誘ひ出して街に出る、何処かで飯を食ふ、そして遊び歩く、夜十二時頃帰つて来る、そして帰るとすぐ机に向ふ、何か書く、朝の五時頃まで仕事をす、戸外が明るくなり、小さい妹たちが学校へ出かける騒ぎを聞きながら眠る、ぐつすり疲れて眠る。それから午近く、或は午過ぎて眼を覚すそして前日のやうな一日を又繰返すのだ。大学を中途で退学し、毎日かういふ生活をしている。

相馬藩の家老の出である父をもち、学習院を初等科・中等科・高等科と進み、明治43年最高学府である東京帝国大学に入学しながら、学半ばにして退いて、こつこつ一見ふしだら



な生活に対して祖母や父が、しかも保守的な家系である彼等が、彼の将来をどんなに心配したかは、想像するにたかたくない。そしてそれが、はげしい立腹に至らしめたのも、当然であるかもしれないが、当時の彼は

自分の今までの生涯で、此時代程に仕事に熱中し、又実際に努力した時代はなかつたのだ。それは不断の努力をしてゐた時代だ。（「青臭帖」）

と自負しているのだからたまらない。両者の間の妥協などは考えることができない。「清兵衛と瓢箪」は大正二年「読売」の元日の新聞に頼まれて送った作品であるが、この作品の中に

馬琴の瓢と云ふのは其時の評判な物ではあつたが、彼は一寸見ると直ぐ下らない物だと思つてその場を去つて了つた。

という一文がある。これも「創作余談」によると、この作品を「書く動機は、自分が小説を書く事に甚だ不満であつた父への私の不服で」馬琴の瓢といったのは、小説家志望の彼を侮蔑した父が「小説などを書いてみて、全体どういう人間になるつもりだ」といった時「馬琴でも小説家です。然しあんなのは極く下らない小説家です」と言い返したと書いている。彼の父が、馬琴好きでよく「八大伝」を読んでいたのを知っていて、こういっただけであろうが、両者の間の激突が、この作品を書かせたわけである。このことは、余程印象的であつたと見えて、「或る男、其姉の死」（大正9年2月）という作品にも

「全体、貴様は小説なぞを書いて居て将来どうする心算だ。」

兄はむつとして黙つて了ひました。

「第一小説家なんてどんな者になるんだ。」

と父は軽蔑を示した調子で続けました。

「馬琴でも小説家です。然しあんなのは極く下らない小説家です。もつと木統の小説家になるのです。」

兄は亢奮から早口に云ひました。此場合突然馬琴が出てきたのは父が馬琴好きで、よく八大伝その他を読んでゐる事を知つていたからです。

と書いている。「兄は……」というところを「私」にかえれば、そのまま「創作余談」のこととなる。この青年らしい一徹さが、初期の作品のなかの子供の姿となって表現されていると考えることができはしないか。

### 3

この一徹さを作品の中に求めると、前述の「清兵衛」がその例であり、「子供四題」の中に出てくる「次郎君」がそれであり、「或る朝」に出てくる「信太郎」がそれである。「次郎君」はK氏の親類の兄でなかなかのきかん坊、角火鉢の上ののって得意がる次郎に母がごごとを言うと、「エ、！ ああ婆ア早く死ねばいいなあ」と反発する。また風呂からよくも拭かずにあがる次郎に、父が「風邪をひくぞ」と注意しても、平気で二の腕に息を吹きかけて行ってしまう。さらには、灰のなかに落した飴玉を妹に「食え食え」と強要する。父が「そんな事を云ふなら、貴様食つて見ろ」と叱りつけると、いきさか閉口するが、すぐ懐から紙を取り出して飴玉をふき、口の中へほうりこんで、悠々と出て行く。この次郎君に、作者は「却々面白い坊主である」と、喝采を送っているのである。

彼自身処女作と認め 初めて小説が書けたというような気がしたといっている「或る朝」の信太郎についても同じことが言える。祖父の三回忌の法事の朝、文度に忙がしい祖母が信太郎を何度も起しに来る。昨夜祖母に注意されながらも 遅くまで小説をよんで来た信太郎は、なかなか起き上ろうとしない。73才の祖母は隣の寢床をたたみ出せば、起きるだろうと心待ちしながら息をはずませていても 知らぬ顔をしているので、とうとうたまりかねて「不孝者！」と怒りを爆発させる。「年寄の言ひなり放題になるのが孝行なら そんな孝行は真つ平だ。」と信太郎も負けずに放言する。「亡祖父の三回忌の朝のできごとを書いた」というから、信太郎は彼自身の体験化であると考えられることができるので、この反瀆がどこから来たものであるか、およそ想像するに難くない。こう考えてくると、自分に子供がなかったために、心を惹かれて子供の姿を描いたという彼の心のうちに、ひそかに蔵こまれた精神の内面を推察することができはしまいか。天真爛漫の「次郎君」の振舞い、十二才の清兵衛の沈黙のレジスタンス、青年信太郎の果敢な反瀆——こうした一連の作品の底に流れる大人の世界に挑む抵抗を見出さずにはいられない。更にいえば大人の世界の保守性に対して、新しい世代の進歩性を子供の素直さ、おちかさを借りて抵抗していると解すべきではなからうか。正しいと信ずることに対しては、だれが何といっても、一步も後へひかないという青年らしい一徹さ。この若さに溢れた深遠な道義感覚が、俗社会への抵抗となって、叙上の幾つかの子供の姿を描かせたと解することができるであろう。

#### 4

ところで 子供をよく描く作家は 普通大の子供好きであると言える。その意味で志賀直哉も子供好きであったろうと想像される。ところが彼の場合は、その趣が多少異なるところに興味を誘われる。というのは前に述べた「創作余談」の中のことばを想起してみたい。彼は「前には子供を書くことが好きだったが……」と書いてはいるが「子供が好きだ」とは書いていない。彼の作品は一つ一つ、名匠の作った庭園のようなものだ、と言った人があるが、いやしくも ことばをゆるがせにつかたはずはないから「子供が好きだ」と書かなかったところに意味がありそうだ。だから彼の描いた子供の姿は「次郎君」のような 素朴愛すべき像とのみ限っていなかった。

「網走まで」には、二十六七の色の白い、髪の毛の少ない女の人が、一人の子をおぶい一人の子の手を曳いて、汽車にのりこんでくる。この一行にあわれみの感情をよせ、できるだけのことをしてやろうとし、自分の席のそばへ招き寄せる。だが

男の子は厭な眼で自分を見た。顔色の悪い、頭の鉢の開いた、妙な子だと思つた。自分はいやな気持がした。

と嫌悪の感情を率直に示している。また「子供四題」の中の「軽便鉄道」には、小田原で電車をおりて、熱海行の発車までの一時間、時間つぶしに町をぶらぶら歩いて小学校の広い運動場で遊び廻っている子供達を、彼はじっとたたずんで眺めている場面が描かれている。

私は低い垣根の側に立つてそれを見た。淡たらしのきたない子供達で、中には性の悪さうな奴もあるが、長閑な気持でかうして見てみると、どれもこれも同様に親しい気持で

見られ面白かつた。

と述べながら

私は時間の許すかぎりそれを見て、又ぶらぶらとも来た道を引返して来た。途々、一体自分は子供好きなのか、それとも子供のやうな遊び事が未だに好きなのかなどと考へて来た。

と反問している。だから子供を書くことが好きであったけれども、子供好きであったとは言うことができない。だからといって彼は 全然子供が嫌いであったとは言い切れない。「いやな気持」がする子供にも、じっと眼を離さずにみつめているということは、とにかく子供に対する大きい関心、子供を見さえすれば立ち止って、眺めずにはおれない心があったからである。たとえ「性の悪さうな奴」であると見ていたにしても、そこには何かしら微笑ましい暖かい心が 流れているやうな気がするのである。

「或る朝」では、信太郎の弟の信三が、炬燵檯の上に突立って「銅像だ」と力んでみせる。みんなから本当の西郷さんのやうだなどとはやし立てられて うでを張り ひげをひねる真似をしては「西郷隆盛にひげはないよ」と冷やかされて でんぐり返しをしておどけた顔をみせる。この無邪気な操舞のくだりなどは 自分も子供達といっしょに遊び戯れているのでなければ描写できるものではないと思われるし、また「児を盗む話」は薄汚い按摩の五つばかりの女の子に 妖しきまで心に惹かれて 誓文払いの町の人ごみの中で母親が買物に心を奪われているすきを見はからって 我が家へ連れて帰ることをした作品であるが、こういった作品も子供嫌いな作家からは生まれはしないだろう。また秤屋の小僧仙吉に、たらふくすしを食わせてやる情愛も、結局子供を愛する気持とつながっているのではないか、そしてこれこそ白樺派的な、ヒューマニテイの所産であろうと思うのである。ところがこのヒューマニテイが、主義とか思想とかの洗礼を受けたものでないからその限界が「小僧の神様」にも現われているのである。

## 5

「小僧の神様」では、徒弟制度の厳格な絆のもとに、給料はおろか小遣い銭さえもろくろく貰わずに働く小僧仙吉の鮎屋のできごとを たまたま居合わせた貴族院議員——実は作者の変身——が、これを見て小僧のささやかな欲望を完たせてやる。彼にとってみればかねての念願が果たされたことの喜びに肩の荷が下りたことであろう。「創作余談」に「この短篇には愛着をもっている。」とあっても不思議ではない。しかし ここで深く考えて見なければならぬことは、この作はただこのような単純なテーマを打ち出しているのではないことである。仙吉に鮎を食べさせて 彼は逃げるようにしてすし屋を出て来て、変に淋しい感情におそわれる。

Aは変に淋しい気がした。自分は先の日小僧の気の毒な様子を見て、心から同情した。而して、出来る事から、かうもしてやりたいと考えていた事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。小僧も満足していゝ筈だ。人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然或る喜びを感じていゝわけだ。所がどうだろう、此変に淋しいいやな気持は。何故だろう。何から来るのだろう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通つて居る。

Aの淋しきはどこから来たのか A自身それを知らない、くりかえし「何故だろう。」  
「何から来るのだろうか」と言いながら、結局のところ「俺のような気の小さい人間は、全く軽々しくそんな事をするもんぢやあないよ。」と引込んでいくところで作者も又問題を打ち切っている。このことについて小田切秀雄氏は「人間が他のすべての人間を素直に愛し切れぬということ、他人の喜び悲しみに、ちかにひとすじに共感的であり得ぬこと、純粹に同情することはできても、さて何らのへだてなしに心から相抱くということは不可能なさま——個人と個人とが、その実際生活において、ばらばらな存在を余儀なくされる近代社会の『近代』としての矛盾、個人を相互に孤立化させてしまうところから生ずる寂寥、こうしたものにわずかながらAの『変に淋しい気持』は触れているものであつた」（註）と「近代」という範疇で割り切っているけれども、社会的上位にある貴族的地位の優越性と、惨めな小僧との対比に彼の作家的良心が ゆずぶられたのかもしれない。とにも角にも この哀れな小僧に瞬間の欲望を叶えてやっただけで逃げていった。小僧を救うこともしなかったし 小僧の背後にある多くの同じ階級の人々への救いも もちろん考えることもなかったのである。限りない同情の涙はそいでも どうにも仕方のない現実に対する傍観性を指摘しなければならない。ここに彼のヒューマニティの限界が毅然として存在するのである。

〔註〕 大正文学研究会編「志賀直哉研究」中の作品論「小僧の神像」296ページ

## 6

わたくしは 今まで比較的 彼の初期の作品をのみ取り上げてきたが、彼の傍観性を今少し追求するためには 彼の終戦後の作品をとりあげるのも無意味なことではなからう。前述の「志賀直哉全集」の第五巻は、昭和20年11月執筆の「灰色の月」から昭和31年1月の「白い線」までの二十五篇を収録している。太宰治が「如是我聞」を書いて この作者への超克を試みたが、かえって太宰をして破滅に至らしめた志賀直哉であつてさえも この十年間これといった大した仕事はしていないようであるが、この最初の「灰色の月」の一文は 時代がいかに大きく動いたにしても 作者のもつ本質を容易に動かすことのできないことを実によく示している。

薄雲りのした空から灰色の月が 日本橋側の旋跡を照らしている終戦直後の十月十六日の夜の事である。彼は少年工と思われる十七・八才の子供と電車に乗り合わせた。地の悪い工員服の肩は破れ 裏から手拭でつぎが当ててある。後ろ前に被った戦闘帽のひさしの下のよごれた細い首筋をしたその少年工が、「眼はつぶり、口はだらしなく開けたまま」上体を前後にゆすられながら 飢餓一步手前の肉体を電車の空席にもたせかけていた。目的地と反対方向の電車に乗ったその浮浪児が「身体を起し、窓外を見ようとした時重心を失ひ」いきなり作者によりかかって来る。同情の眼でじっとその少年をみつめていた作者が、その瞬間「殆んど反射的に倚りかかつて来た少年工の身体を肩で突返し」てしまう。どうしてそんな事をしたか。「これは私の気持を全く裏切つた動作で、自分も驚いた」と述懐しているのであるが、この哀れな少年に彼も 他の乗客達と同様にどうすることもできない現実には手をこまねくよりほかなかった。

私もその一人で、どうする事も出来ない気持だつた。弁当でも持つてゐれば自身の気休

めにやる事も出来るが、金をやつたところで、昼間でも駄目かも知れず、まして夜九時には食物など得るあてはなかつた。暗澹たる気持のまま渋谷駅で電車を降りた。

というところでこの一篇は終るわけであるが、ここに見られる「暗澹たる気持」は「小僧の神様」における貴族院議員の「淋しき」である。愛とか憐憫とかは人間性になくはならぬものであるし、善意とか良識とかは、社会生活上の欠くべからざる道徳である。そしてこれらを、この作者は多分に持ち合わせていたが、どうすることもできなかったところに、暗澹たる気持を誘い、淋しい思いをせざるを得なかったのであろう。「小僧の神様」の書かれたのは1919年、「灰色の月」の書かれたのは1945年、その間30年近くの歳月を関してはいても、作者のうちにひそむこの本質的な傍観性の不変さに一驚させられるものがある。

## 7

初期の子供を描いた作品を中心として志賀直哉文学の特質の一面をさぐって来たが、彼の幾つかの作品が子供の純真な姿を借りて、保守的な大人の世界に抵抗するものであるとはいっても、彼のレジスタンスは「山形」（大正15年12月作）に描かれているような主義とか、思想とか、いったものではなかつた。彼の代表的傑作で唯一の長篇である「暗夜行路」（昭和12年完結）後篇に、主人公時任謙作が「好悪がすぐさま此方では善悪の判断になる。それが事実大概当るのだ」という述懐があるが、彼の場合の善悪の判断基準は主義でも思想でもないことを具体的に示している。こうした彼であつたればこそ、あれほど頑固であつた父との関係も後年「和解」という段階に落ち着き得たわけであるが、その彼には岩上順一氏がその著「志賀直哉」の中で「彼のもつヒューマンイズムの無力さ」と、なじつてもそれはこの場合、方向違いであるのかも知れない。彼の身上は、この自信に溢れた鋭い感覚にあるのである。彼の作家的業績を唐木順三氏は「原始的感情的所産である。」（「現代日本文学序説」）と言ひ、中村光夫氏に「彼自身の行動と直接につながる点で気分は思想より上位にあつた。」と評させているのである。この彼に何が彼に子供を描かせたか、彼の世界観はなどと拾い出そうとしても、畢竟木によって魚を求めようとする愚にすぎぬのかもしれない。

# 地域調査

## 山村の生活

— 吉野川上流の集落 —

山崎俊郎

### 1 はしがき

この調査は、昭和29年度に行われた総合調査である伊勢備田川流域に関連して、同じく昭和30年度文部省科学研究費による総合調査として京都大学藤岡謙二郎教授を中心とした紀ノ川流域総合調査のうち、紀ノ川上流班、即ち吉野川流域調査の一部をなすものでありまた、その成果については、それぞれ31年春の人文地理学会で口頭発表が行われ、「河谷の歴史地理」として、出版される運びである。したがってこの稿の一部についても含まれるので、この場合、私の調査した範囲から、特に山地特有の生活について、その特質を把握し、理解し得る面を、山村の生活としてまとめてみたものであって、簡単な報告として概括的な地域調査の一例たるに止まる。

### 2 調査地域

今回の調査地域は、下市町より上流の地域、即ち吉野川本流谷に沿った川上村、支流の四郷川沿いの四郷村、高見川流域の高見村、小川村、ならびに吉野川、高見川の合流点附近の旧国くず村、旧中荘村、旧上市町（これらの町村は、中竜門村、竜門村、吉野町と共に昭和31年5月3日、新しく吉野町として発足している）であるが、極めて広範囲であり交通不便のため充分の成果を挙げ得ず、一応通り過ぎた程度の地域もあって、詳細な調査は今後に残されている。

### 3 目的及び方法

この地域の集落については、高見村、四郷村等、吉野川支流の一部を除く全地域に亘り先に、堀井甚一郎、千田正美の詳細な既調査があるので、問題を小さくしぼり、民家の構造のうち、特にこのような山林業務の卓越した地域の大きい特徴と考えられる屋根の材質即ち木皮葺について調査し、その他若干の点について、多少とも時代の推移による増減の状態をみようとした。資料としては、各村役場の家屋台帳、家屋賃貸価格調査表、家屋課税台帳等をもとにしたもので、同一資料が完備されて居らず、地域によっては、ききとり等によったものもある。

### 4 集落の立地

下市町、吉野町を除く上流の集落を立地上、大別した場合、山腹の緩斜面を開拓して作

られた隠田集落的な古い起源を有するとみられる①林隙村落と、時代の推移にともない、経済・交通の発達によって、川沿いの街道筋に営まれた集落（例えば②土場集落）、更に川の氾濫原、又は川に面した滑走斜面③に位置した集落等に分けられる。林隙村落の場合第1図の川上村高原、及び第2図、川上村大道に見られる如く、山林にとり囲まれ、林地を開拓した斜面に階層的な分布（写真1・2）がみられ、街道筋の集落については、例えば川上村、高原土場（写真3）の如く、V字谷に沿った街道に極めて無理な立地をなしており、吉野式家屋の多くは、これら街道筋の集落に見出される。更に川上村入之波（第3図）は、川上村の中では最上流に位置しながら、同村でも数少ない広い氾濫原に立地しており（最大巾約100m、平坦部は約1mの差をもって2段になる）、小川村小、その他の滑走斜面上の集落と一面の類似性をもっている。第4図、第5図、第6図はそれぞれ四郷村の地籍図であり、大豆生、大又の一部に林隙村落的な開拓状況が、或は狭戸、大豆生の一部に滑走斜面上の集落としての特徴がみられる。



写真1 川上村高原

第1図

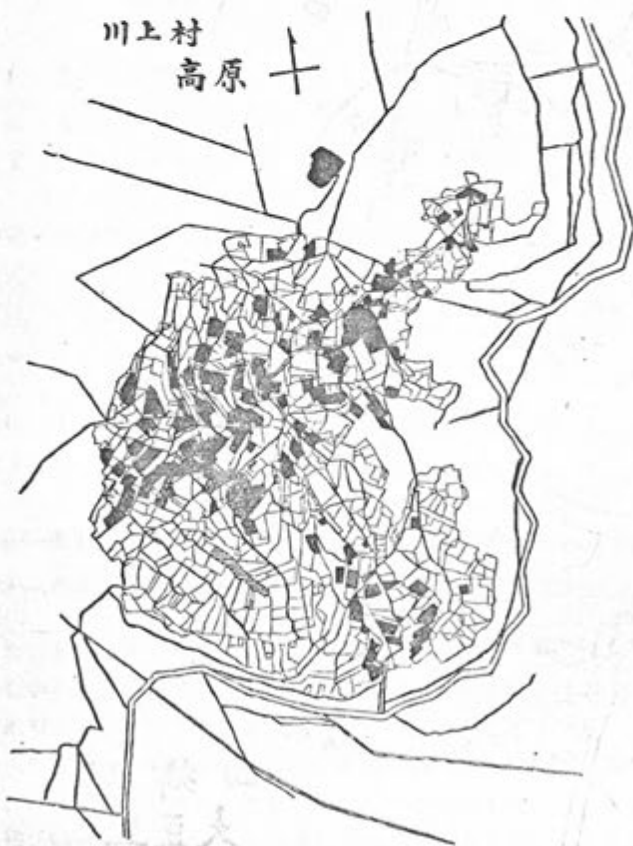


写真2 川上村大道

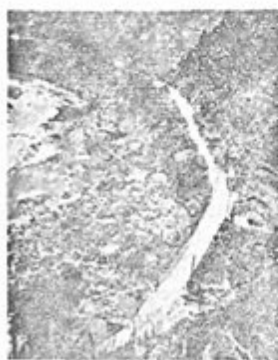


写真3 高原土場

第3圖



川上村  
入之波

第2圖



川上村  
大迫

第4圖



四郷村  
狭戸

第5圖



四郷村  
大豆生



## 四郷村

第6図



### 4 民家の構造

#### a. 木皮葺について

家屋の構造、特に使用する屋根葺の材料によって地域の特性は、かなり大きくあらわれる。例えば中欧に於ては、④北部では柿板・泥炭・草を、中央及東部では木材・柿板を、南部・西南地方では各種の煉瓦を用い、残部の中央で麦桿を使用している。今和次郎⑤も生活の範囲より手近に入手しうる材料そのものが重要な意味をもつと述べているが、我が国に於けるこうした林間の民家が、多く木皮（この地域に於ては、杉の多い丹波の山奥にみる⑥杉皮葺と同じく、杉を用いている）をもって屋根を葺くことは、最も地域に適合した方法であり、その理由として、入手が容易であること、費用が低廉であること（瓦葺の約 $\frac{1}{4}$ 、トタン・スレート約 $\frac{1}{2}$ ）⑦、比較的長年月の使用に耐えうることなどがあげられよう。第1表は民家構造を、地域毎に類別したもので、第7図は現在のそれを地図に示したものである。これによれば、各村とも総戸数の大部分（川上村78%……昭28。四郷村83%……昭30。高見村87%……昭30。小川村62%……昭30。）を占め、この地域の民家の構造上、大きな特徴をなしている。（この場合、京都の⑧山村の杉皮葺が瓦やトタンを副次的に小部分使用しているのに対し、本屋が瓦やトタンの場合にも他の部分を杉皮にしているのが多い。）

しかし注意を要するのは、殆ど全地域に亘って、戦前（昭和初期～15年頃）より戦後現在に至るまでに平均約9%の減少を示していることである。（川上村9.3%。四郷村9.7%。小川村13.2%。高見村4.1%。）この大きな原因は、交通の発達、特に自動車の発達によって、木材搬出の方法を、筏からトラックに切替えたことにあると考えられる。即ちトラック輸送の場合には、いわゆる黒木（皮つき）のまま積出すこと。更に伐採輸送を、より



便ならしめた結果、良質の木皮が得られる大木を、より多く市場へ伐出す結果となって、これら山間の地域に於ても、杉皮の入手が愈々困難になりつつあることを示している。

(小田内通敏によれば、⑨東京西部、恩方村案下部落の場合でも、交通の発達によって、東京まで2時間のトラック輸送が可能になり、従来、現地で板・角材に製材していたものを、丸太のまま出荷するようになったとしている。) これは高見村杉谷、木津。小川村木津川。川上村入之波、大迫、高原、柏木、迫。四郷村大豆生、麦谷、狭戸、三尾等に於けるききとりでも、異口同音に木皮の入手困難を訴えていることでも知られ、例えば小川村木津川では、昭和12~3年頃までは筏による搬出が行われていたが、その後次第にトラックに切換えられたこと、更に戦後24~5年頃からは道路の整備と相俟って、より一層発達したことなどからみて、経済的好転による生活向上の結果、トタン或は瓦葺に移行したとみるよりも、むしろ前述の如き理由が木皮葺の一般的な減少となってあらわれているとみるべきであろう。

これを地域的にみれば、多少の年代的差異はあつても、戦前、戦後の総戸数に対する木皮葺の減少率は、第2表に示すごとく、一般に小川村地区が可なり高く川上村でも街道に面した集落に減少率の増大をみる。例えば、川上村柏木の23%は全地域中最大であり、この場合、観光、登山等によって家屋が密集し、旅館、商店が火災予防から多くトタンにしたと考えられる。

(写真10、11)

(例えば甲州街道宿駅の上野原町が昭和7年の火災以後、⑩トタン葺に代った例があり、辻村太郎は、⑪集落生態美観の中で、トタン屋根の利用が、いわゆるブリキ文化として窮乏の時代よりも、悪い状態になったと述べている。) 小川村小20%、鷲家口21%



写真7 四郷村麦谷



写真4 川上村高原



写真8 高見村杉谷



写真5 川上村入之波



写真9 小川村木津川



写真6 川上村大迫のトタン葺

の減少も、この場合、人家の密集と、特に鷺家口では都市的性格(木材の集散市場がある)によるものと思われる(写真12)。これに対し全く減少率のみないのは高見村杉谷、萩原、川上村瀬戸で吉野川上流地域の中でも特に僻地であるこれらの集落を特色づけている。

川上村井戸の場合は、全地域中にただひとり2%の増加を示しているが、家屋台帳中にみる数戸の木瓦葺の滅失と、木皮葺の数戸の増加が全戸数に比例して、この増加となつたもので、特異な原因は考えられない。トタン、スレートについては、特に高見村の場合、全く戦後の現象であり、これも木皮の入手困難が第一の原因となっている。

#### b. 吉野式家屋

前述の如く吉野式家屋の分布については、川沿いの街道筋に面し、極めて無理な立地をしている場合にみられる。多摩川上流水川村の場合にも、いわゆる㊦舞台式で片側町をなして崖側に立地しており、配列も不規則であるが、川上村柏木、上多古、白川渡、白屋、迫。四郷村麦谷、三尾。高見村杉谷、木津の場合も同様であつて、その殆んどは商家である。(写真13、14、15) また上流の小川地域に全くみられないのは、小川村の各集



写真 10 川上村柏木



写真 11 川上村柏木



写真 13

川上村柏木の吉野式家屋

落が、比較的広い滑走斜面上に位置していることが多いためである。河岸段丘上に位置した旧上市町(写真16、17)には、山側に階層的な家屋が、また川に面しては、少数の吉野式家屋もみられる。



写真 14 四郷村三尾の吉野式家屋



写真 15 高見村杉谷の吉野式家屋



写真 12 小川村鷺家口

#### c. 間取り

この地域の間取りについては、調査の範囲では、特別な型は見当たらない。一般に平入四ツ目型のもので、ただ便所と浴室が別棟になっているものが大部分である。(高見村、四郷村)。屋根の型も傾斜25°前後の切妻平入のものが多く高見村に数戸、入母屋造を見か

けた。ただ第1表にもある如く、二階建が比較的多いことで、⑩東京西多摩郡松原村の山村が養蚕等に好都合なことから、この木皮二階建を新型としているのに比すれば、同様な山村ながら地域差がみられて興味深い。

第2表 木皮葺の減少率

	川上村	四郷村	高見村	小川村
0%	瀬戸		杉谷、萩原	
1~5	東川、人知、北和田、入之波	三尾	平野、谷尻、伊豆尾	
6~10	西河、迫、井光、つぎ尾、上多古、神之谷、大迫	麦谷	木津、日裏	中黒
11~15	白屋、高原、下多古、中央、上谷	狭戸	滝野	鷺家
16~20	白川渡			小
21~25	柏木			鷺家口



写真16 上市町



写真17 上市町

## 5. 山村の生活

### a. 経 済

耕す土地とても殆どない、これら山間集落の生活が、多く山林に依存しているのは当然であって、川上村入之波の場合、職業は第3表の如く、日給800~1000円を得て山林業務に従事するが、天候に左右されるから常時稼働とは限らず(月平均17~18日)生活は一般に苦しいようだ。又川上村大迫の場合も、17戸中、16戸が山労で生活をして居り(他の1戸は農協事務員)耕地も、2反…1戸。1反…6戸。0.6反…3戸。0.2~0.4反…5戸。なし…2戸となっている。高原では92戸中、1反以上所有者は、僅かに16戸で5反を最高として多く1~2反であり、又他は殆ど2~5畝の所有にすぎず山労に依存している。(四郷村大豆生、麦谷、大又によるききとりでも90戸以上が山労であり、耕地も0.5反以下が圧倒的である。)

各戸は長男を残して2~3男は主として大阪、奈良県下に転出する。日用品の購入については、川上村高原、大迫、入之波の場合、各部落で足せないものは柏木で、或は早朝から上市・大阪に出る。(四郷村の場合は早朝のバスで大又から、大宇陀、桜井方面に出る)

### b. 通 婚

かかる隔絶した山村であるから、大字内に於ける通婚が圧倒的に多く、ききとりによる現戸主の妻の地域別を示せば第4表~第8表の如くであつて、殊に川上村高原に、その傾向が強くあらわれているのは⑩同部落が隠田の発生をみているのと対比して興味がある。

第3表 川上村入之波

職 業	数
山林労働	50
山林看手	3
菓子商	2
貨物運送	1
米穀配給	1
飲食店	1
鮮魚野菜	2
理髪業	1
たばこ	1

c. 飲料水

調査地域では全般に地形上の制約から井戸は少く、飲料水として谷水を鉛管或は竹のカゲヒで引いているところが多い。川上村入之波では井戸1。谷水の水源は3ヶ所であって、写真第18、19のように山から共有でなく、各所に引いており、家屋の山側に立てば、鉛管、竹をとりまぜたカゲヒの放射は壮観である。

大迫では写真第20の如く、コンクリートの貯水槽を1ヶ所作り、各戸が共同使用している。

同じく高原ではコンクリート貯水池8ヶ所。一つは15尺×6尺×3尺で井戸はない。四郷村麦谷には井戸1。他は谷水を使用している。高見村では、全村の3割が井戸を有するが、他は、写真第21のようなコンクリート貯水槽に頼っている。



写真 18 川上村入之波



写真 19 川上村入之波

d. 気候と家屋——特に風に対して

その他、気候からの制約も特別家屋の構造上にはみられない。川上村入之波に於ては、⑩常時30mm程度の雨量があり、又冬期積雪20~25cm程度であるが、間取り、その他に大きい特徴はない。ただ2月の平均気温2°Cに備えて各戸に切りコタツがある。大迫⑭では冬期積雪30cm、高原で⑮10~15cm等であるが、同様に変化は、みられない。ただ山地からの吹き下しが強く、矢沢大二も⑯東京近郊に於

第6表 川上村入之波

地域名	数
上谷	1
下多古	2
中奥	3
上多古	2
大滝	1
人知	1
白屋	1
東川	1
伯母谷	1
柏木	1
白川渡	2
北和田	1
武木	1
奈良市	2
京都市	1
大阪市	2
天川村	3
中荘村	1
高知県	1
三重県	1
上田市	1

第7表 四郷村大豆生

地域名	数
大豆生	20
三尾	4
大又	1
小川村	3
大字陀町	1
狭戸	1
奈良市	1
川上村	2
三重県	1
朝鮮	2

第4表 川上村高原

地域名	数
白屋	5
瀬戸	2
神之谷	1
迫	2
上北山村	2
高原	45
人知	1
六滝	1
西河	1
上市町	2
白川渡	2
下多古	1
井光	1
北和田	1
その他	7

第5表 川上村大迫

地域名	数
下多古	1
神之谷	1
東川	1
武木	1
新子	1
貝塚市	2
大迫	2
井戸	1
下多古	1
柏木	1
高原	1
黒滝村	1

第8表 四郷村麦谷

地域名	数
麦谷	11
三尾	2
上北山村	1
兵庫県	2
大豆生	5
川上村	1
黒滝村	1
宇陀郡	2

ける防風林について述べている如く、暴風に対する防止と常風に対する防止のうち、この場合後者に属する処置であると考えられる。特に密集度の小さいこれら山間部落では、斜面を切崩して平坦にし、その上に建てられた家屋を風から防ぐ

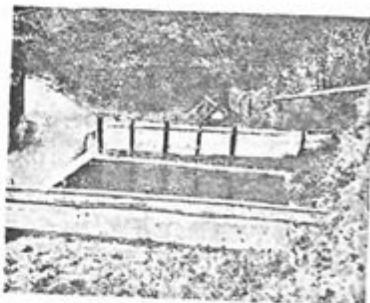


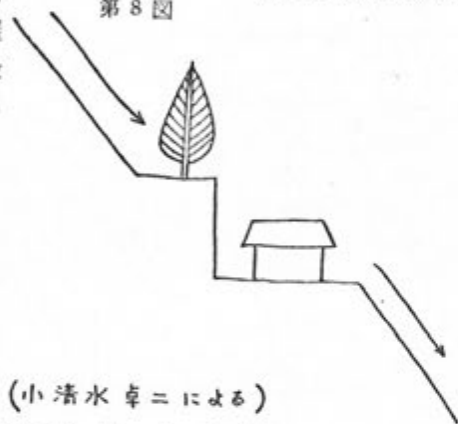
写真 21 高見村木津



写真 20 川上村大迫

ために、家屋の背後の斜面上に杉を植えて山頂から下降する冷寒気流の屋内浸入溜滞を防除するに役立たせている。いわゆる㊸和佐羅式(第8図)が多く、四郷村麦谷の場合、最近、㊹坂べいを用うることがあるようである。

第8図



## 6. むすび

以上、広範囲な地域を浅薄に通過した結果のみとなったが、之を要するに、かかる山村の生活が、主として山林に依存し、その生活様式にも平野の農村と異った種々の特質がみられること、また民家の屋根の材質という、(小清水卓二による)

きわめて一小部分をみても、これら地域の特性があらわれ、しかも木皮葺が、経済的要因よりも、交通の発達にともなう開発のためにむしろ、地元にて入手困難の現象をもたらし、それが木皮の構造減少となっていること等を概観した。また川上村高原の如き古い開拓の歴史を持ち、今なお特異な風習(例えば朝拝)を有する集落、或は、林業発達にともない川筋に出来た土場集落、また鷲家口、上市、下市など都市的性格をもつ集落等、歴史的、社会経済史的な観察を要するものであるが、この稿は問題を限定したために、集落の立地を概観したに止まった。

なお、調査にあたって特に種々御配慮をいただいた川上村高原の増田佐助氏。入之波小学校、竹村正数氏。大迫、土井庄司氏。四郷村麦谷、福井氏。高見村役場、西定信氏等、また同行援助下さった麻生武志、増田博行、山田正夫、保田守の諸君に附記して謝意を表す。

## 註及び参考文献

- ① 堀井甚一郎・千田正美、奈良県総合文化調査報告書、奈良県教育委員会、昭和29年。
- ② 船橋書及び、堀井甚一郎、奈良県地誌、大和史蹟研究会、昭和10年。
- ③ 小寺康吉、越中五箇山の生活、地理教育集落地理学論文集(三)、昭和10年。  
集落の殆どすべてが、庄川及其支流の河岸段丘上か、或は山崩れ、若くは地這りで出来た山腹の平坦面や、緩傾斜面に立地する。
- ④ 小川敬、中欧に於ける家屋と屋敷の形態、地理学評論、12巻8号。

- ⑤ 今 和次郎、日本の民家、相模書房、昭和29年。
- ⑥ 藤田元春、日本民家史、刀江書院、昭和12年。
- ⑦ 高見村役場、西定信氏による。
- ⑧ 鎌岡謙二郎、集落と交通路の変遷、都市域における山村の変遷に関する地理学的研究、柳原書店、昭和30年。
- ⑨ 小田内通敏、部落共同体の地理的研究、地理教育、聚落地理学論文集(一)、昭和10年。
- ⑩ 松尾俊郎、相模川中流沿岸に於ける甲州街道旧宿駅について、地理教育、聚落地理学論文集(二)昭和10年。
- ⑪ 辻村太郎、聚落生態美観、地理教育、聚落地理学論文集(三)、昭和10年。
- ⑫ 内田寛一、多摩川上流流域の聚落、特に水川村の聚落について、地理教育前掲書(四)
- ⑬ 小川 徹、東京府及び山梨県下に於ける屋根の形式を中心とした民家の調査、地理学評論14巻2号。
- ⑭ 堀井基一郎、前掲調査報告。及び川上村史。
- ⑮ いずれも、入之波小学校観測資料による。
- ⑯ 大迫区長、土井庄司氏による。
- ⑰ 川上村高原、増田佐助氏による。
- ⑱ 矢沢大二、東京近郊に於ける防風林の分布に関する研究、地理学評論12巻1号。
- ⑲ 小清水卓二、前掲調査報告書。
- ⑳ 四郎村妻谷、福井正之氏による。



# 近郊農業に於ける蔬菜栽培の変遷について

—大阪南部を中心とした—

安 井 司

## 1. 序

どこの国においても、資本主義ははじめ工業を中心として発展したが、農業も漸次その渦中に巻込まれるに従い、商品生産を行わざるを得なくなった。即ち、農産物が商品化するにつれて、農業自体の内部にも分化がおり、果実や蔬菜等のような商品性の強いものを専門的に生産する農家があらわれてきた。

わが国の農村において本格的な商品経済化と商業的農業が始まるのは、地域によっては江戸時代にもあらわれているが、大体幕末の開港(1858年)以後、特に明治維新以後である。

商業的農業の中でも、日常必需品で、然も鮮度を要求される蔬菜類の栽培は、大都市周辺の郊村において、中心都市の大きな消費に応じて行われている。H. Von. Thünenの孤立国では、a. 自由式農業、b. 林業、c. 輪式農業、d. 穀草式農業、e. 三圃式農業、f. 畜産といったような、同心円的農業圏が考えられている。ところで、この都市の消費を目的とした近郊地域は、交通運輸機関の発展や、出荷方法などの改善により、時代によって著しく変化するものである。例えば青鹿<sup>①</sup>四郎氏の研究によれば、東京西郊武蔵野台地においては、昭和2～3年頃までの野菜運搬可能な範囲は、農民が午前1時か2時に野菜を積み込み、都心の市場に大八車または馬車・牛車で運送し、午前4時から5時に到着し、農産物の販売を依頼し、農民はその足で民家を訪ね廻り、人糞を集め、市場に立寄って野菜の売上金を受け取り、昼頃自宅に帰る範囲であった。青鹿氏はその限界を、都心を中心に都市域の半径の2～3倍の半径をもつ円周を考え、これより遠い場所では野菜類の栽培は行われなかったとしているが、昭和2～3年以降トラック輸送の発展に伴い、時間的にも積載量の上にも輸送力の増大が起り、近郊農業の範囲も著しく拡大されていった。

一方、明治以降の都市の人口集中によって、都市域が拡張され、住宅地の範囲拡大が進み、都市周辺部の耕地を蚕食したために、近郊農家は経営を改めるか、または転業を余儀なくされてくるかして、蔬菜栽培地域は著しい変化をとげた。

そこで、大阪の南部及びその隣接地域における蔬菜栽培地域の変遷をとりあげ、時代によって異なる土地利用について、幾つかの調査を基礎に明らかにしたいと考える。

## 2. 都市発展に伴う耕地の変化

大阪市は、明治22年(1889)の市制実施当時から最近の合併を除いて、過去に明治30年(1897)に第一次、大正14年(1925)に第二次と二度の市域拡張を実施しているが、旧市域南部に隣接する旧東成郡及び西成郡の明治9年1月1日を100として大正9年10月1日までの45年間にわたる人口増加指数は、次のようになる。

1000以上 …………… 津守村・鶴橋町  
500～1000 …………… 今宮町・生野町・粉浜村

- 400～500 …………… 玉出町・住吉村
- 300～400 …………… 敷津村・天王寺村
- 200～300 …………… 墨江村・田辺町・平野郷町
- 100～200 …………… 長居村・依羅村・南百済村・北百済村・喜連村

以上のうち旧市域に直接隣接しているのは、鶴橋町・生野村・天王寺村・今宮町・津守村の5カ町村で、天王寺村を除けばいずれも5倍以上の増加を示している。これは「市内乗入の定期乗車券を通じてみた大阪の郊外電車と人口分散との関係」からみた数字が、大正13年においては、北部郊外（京阪・新京阪沿線）14%、南部郊外（南海・大鉄沿線）46%、西部郊外（阪急・阪神沿線）30%、東部郊外（大軌沿線）10%となっていることにもあらわれており南部、郊外への発展の著しいことがうかがわれる。

さて、以上のような人口増加は必然的に住宅地の範囲拡大を伴い、耕地の減少という形をとってあらわれてくる。耕地の減少は大正年代に特に著しい。住宅地の範囲拡大を、現住戸数の推移によってあらわしてみると、大正2年から大正13年までに次のような増加を示している。

	大正2年	大正13年	増加指数（大正2年を100とした）
今宮町	4715戸	18467戸	392
天王寺村	3637	13407	369
玉出町	2032	6326	311

今宮町における宅地の異常な増加は、単なる交通路線の発達のみでなく、耕地整理の名のもとに行われた明治43年から明治44年までと、明治44年から大正9年までの2回にわたる宅地整理の影響で（南海線以西の整然とした道路はこの宅地整理によってできたものである）ある。このような結果、今宮町における畑地の減少は大正7年の198町歩余りが、大正13年には108町歩弱となり、約半数に減少している。

ところで、中河内郡、泉北郡の耕地移動を調べてみると、次のようになる。

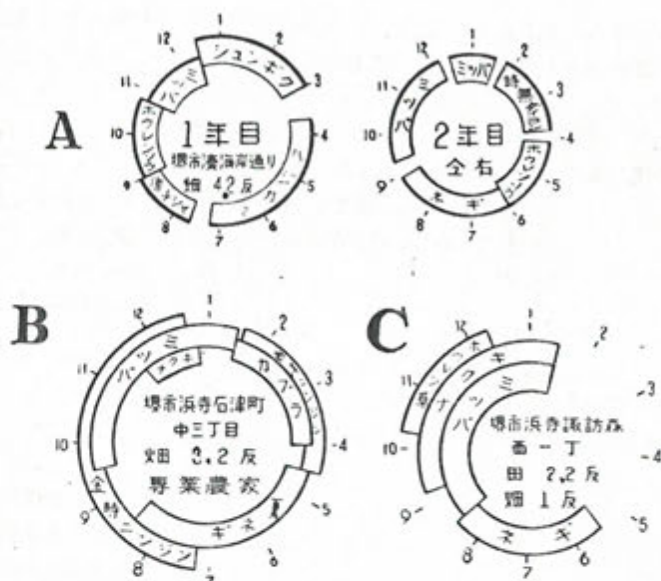
	明治20年	明治30年	大正元年	大正10年	昭和元年	昭和10年
泉北郡	<ul style="list-style-type: none"> <li>大島郡 5016町</li> <li>泉郡 2935</li> </ul>	8190町	8414町	8238町	7797町	7354町
中河内郡	<ul style="list-style-type: none"> <li>丹北郡 2030</li> <li>河内郡 1469</li> <li>高安郡 484</li> <li>若江郡 3144</li> <li>大泉郡 458</li> <li>澁川郡 1443</li> </ul>	8558	9272	9509	9087	8128

大正時代は、商工業都市として発展した大阪市が、自己自体の発展にそなえて、後背地の生産強化に刺戟を与えるとともに、農村にあっても、商品生産の有利さから土地の開墾が行われたのであろうか、わずかではあるが増加の傾向を示しているが、それでも昭和年代にはいと、いずれも減少をはじめている。即ち都心からの距離の近い所よりは遅いが、大阪市発展に伴う変化をあらわしているものと考えられる。

### 3. 蔬菜栽培の変遷



第三図 堺市の畑地利用方式



以上の変遷に見られるように、大阪周辺における蔬菜栽培の様相は、時代とともに著しい変貌をとげ、現在大消費地向け蔬菜主産地として、昭和25年5月農林省農政局特産課調べにあげられている次の地域以外は、都市の週辺に特有な、都市市場の需給に応じて、その都度作付を大きく転換している。

	産地	栽培面積		産地	栽培面積
ダイコン	大阪市住吉区	66町	タマネギ	泉南郡	619町
カブラ	大阪市住吉区	19		岸和田市	230
ニンジン	大阪市住吉区兼津	60		泉佐野市	136
サトイモ	貝塚市	50	キウリ	大阪市東住吉区	31
	泉佐野市	60		富田林市	15
ハクサイ	大阪市住吉区	54		岸和田市	30
	岸和田市	20		三島郡	31
カンラン	岸和田市	40	トマト	堺市保井	6
	泉佐野市	45		岸和田市	22.5
ハウレンソウ	大阪市住吉区	7	ミツバ	大阪市住吉区加賀屋	
ネギ	大阪市住吉区	19		堺市湊・石津	
ナス	富田林市	25町	タケノコ	三島郡島本・山田・新田	125
	岸和田市・泉大津市	55		岸和田市	65
ソラマメ	富田林市貴志	25	レンコン	北河内郡大和田・南郷・二島	68
エンドウ	富田林市石川	45	イチゴ	岸和田市	15

近郊農村の景観 (筆者撮影)



肥料の運搬 (東住吉区我孫子付近)



青田師による蔬菜の出荷 (東住吉区山之内町付近)



蔬菜に対する灌水 (堺市石津付近)

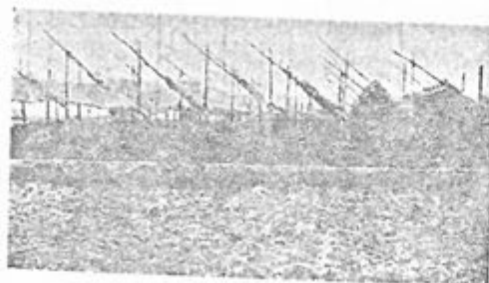


手入れのよく行届いた畑地 (東住吉区我孫子町)



住宅街を背景にした甘藷畑 (東住吉区我孫子町)

花卉栽培の保護施設 (東住吉区長居町)



花卉栽培の保護施設 (東住吉区長居町)

#### 4. 農家調査にあらわれた蔬菜栽培の変遷

時代的にみた周辺地域の三期にわたる蔬菜栽培の変遷は、個々の農家においてどのような形であらわれているかを知るため、都心よりの距離に応じて周辺部農家の経営状態を調査した。その中から10世帯についてその結果を示すと、次のようになる。

都心よりの 距離 (商品化率)	家族構成	耕作反別及び 所有権		現在栽培している蔬菜及び その始めた時期			過去に栽培していた蔬菜及 びその終りの時期				
		田(反)	畑(反)	蔬菜名	時 期			蔬菜名	時 期		
					M	T	S		M	T	S
(A) 6km 東住吉区 (70~90%)	●世帯主 ●妻 ●長男 ○次男 ○三男	S 3	S 1 O 1 (2)	ダイコン	10						
				ホウレン草				戦後			
				カンラン				?			
				ハクサイ				?			
				ナス				10			
				トマト				10			
				キウリ				10			
(B) 7km 住吉区 (60~70%)	●父 母 ●世帯主 ●妻 長女 次女	S 5.3	S 5.5 (1.2)	カブラ		?		コシウリ			26
				ダイコン		?					
				カンラン				?			
				キウリ				24			
				トマト				18			
				ナス				25			
				シヤクシナ				?			
(C) 8km 住吉区 (90~99%)	●世帯主 祖母 ○長男 全妻	S 4	S 2.5 (2.5)	大豆	5			サツマイモ			21
				エンドウ							
				ソラマメ							
				ダイコン	20						
				キウリ		6					
(D) 8km 矢田 (90~95%)	●世帯主 妻 ●長女 ●次男 ○次女	S 8	S 4 (4)	ダイコン							
				カブラ				初			
				シヤクシナ							
				シヤガイモ							
				ハクサイ				10			
(E) 10km 浅香山 (80~90%)	●世帯主 妻 ●長男 全妻 ○次男	S 6 O 2	S 2 (2)	トマト							
				ナス				?			
				キウリ				22			
				ダイコン							

(F) 13km 松原 (90~99%)	●父 ●世帯主 妻 ○弟 妹 長男 長女	S 10	S 1 (1)	ジャガイモ エンドウ 一寸豆 ダイコン キウリ ナス カンラン	9 12 14 6 8 14 15		ニンジン		15
(G) 14km 石津 (95~99%)	●世帯主 ●妻 ●長男 ●次男 ●長女 次女		S 3.2 (3.2)	ミツバナ クレン草 ホウレンネギ ウレシキ カニシ	4		棉花 サツマイモ ムギ	30~40 4 4	
(H) 15km 堺取訪の森 (80~90%)	●世帯主 母 ●長女 ●長男	S 2.2	S 1 (1)	ホウレン草 ミツバ ネギ ク	6		ダイコン		27
(I) 18km 南河内郡古市 (50~100%)	●世帯主 ●妻 ○長男 長女 次女	S 4 O 1.3	S 1.7 (1.7)	ダイコン ジャガイモ サツマイモ ウレシキ ホウレン草 ハクサイ カンラン ソラマメ イチゴ トマト	明治以前 10 初 10 15		棉花 シヨウガ カンピヨウ クワイ サトウキビ	?    25~26	初 10 15
(J) 22.5km 泉北郡北池田 (50%)	●祖父 ○世帯主 ○長男	S 1.7	S 1	サツマイモ ダイコン 大豆 ジャガイモ ハクサイ	以前 初 10		棉花 サトウキビ	25 30	

- (註) ①都心よりの距離を示した欄の( )内は、それぞれの野菜が商品作物としてどの程度市場に販売されるかを示した商品化率を示し、最高と最低とであらわしてある。
- ②家族構成欄の●は農業に従事している事を示し、○は会社員又はその他の農業以外の仕事に従事していることを示す。印のないものは無職である。ただし農業従事者とは、専業に従事しているものを示してある。
- ③耕作区別及所有権欄のSは自作地、Oは小作地、( )内は畑地面積の中の野菜栽培面積を示してある。
- ④栽培時期のM=明治、T=大正、S=昭和をあらわし、それぞれの数字は年代を示している。?は年数の明確でないものを示してある。

以上の調査結果は、聞き込み調査にもとづくもので、やや当を得ない面も多く、これをもって全体の傾向を推測することは危険であるが、一応の傾向として、蔬菜などはすでに大正初期にあらわれ、それまでのムギ・サツマイモにかわって全面的に蔬菜畑に転換している。これは大正時代は、第一次世界大戦の好況も手伝って、貿易面からみても大阪市が

飛躍的に発展をとげた時期であり、加えて、砂土及び砂質壤土のこの地が、蔬菜栽培の適地であり、風車利用による揚水法（写真参照）が考えだされたことに基因しているとみられる。即ち堺市南部では、大正前期にはダイコン・サツマイモの根菜類が中心であったものが、後期にはキウリ・ナス・ハクサイなどの果菜・葉菜が中心になったのである。また、Aでは昭和10年頃にナス・トマト・キウリなどがあらわれているが、もともとこの地方ではナンキン・ナス・ダイコンを三毛作で栽培する形式を明治末年以来つづけていたがその後作付内容において、ダイコンよりも反当り収量が4～5倍もあると思われるキウリなどに变化したと考えられ、これは市場景気に左右された一つのあらわれであろう。Bでは戦後にキウリ・ナスがあらわれてきたが、これは昭和15～16年頃から試験的に行われ、成績がよいので漸次広まったトンネル栽培の影響をうけたためであろう。トンネル栽培によれば霜害が少ない上に、今までより以上に3回も多く摘果でき、然もそれが消費市場で促成物として高価に取引される利点があるためである。

なおこの調査より、純粋の蔬菜専業農家として経営されているのはGの1世帯のみであり、他はすべて米作との結合において蔬菜栽培が行われているといえる。これは家族構成の面からも見られることで、農業収入のみの農家は、B・G・Hの3世帯のみで、他は何かの形で農業以外から収入をあげている。このあたりに、都市に接近している農家の性格があらわれていると考えられる。また商品化率についてみれば、Gが最も高いのは別として、畑地の大部分又は全部を蔬菜畑として経営している農家に高く、また都心からの距離の最も遠隔な地域の農家に最も低いのも当然なことながら、興味をひく点である。ここら当りに近郊農業地域の限界線を考える問題点もひそんでいるように考えられる。

## 5. 結 び

以上、大都市の周辺をとりまき、大都市の市民の消費を目的に栽培されている蔬菜をとりあげ、時代の移り変わりにつれて、近郊農業の内容が、いかに変化してきたかを眺めてみた。即ち、都市との結びつきが、社会の進展に応じて、密接度を増すにつれ、近郊農村の性格は次第に都市的・資本主義的様相を帯びてくるのである。さらにこれが発展すると、都市域に昇華し、かつての郊村景観はすっかり姿をかえてしまうであろう。戦後、都市の機能上から、職場と住宅地とが次第に分離され、地価の関係から都心をはなれた地域に住宅地が移動しつつある。特に最近、集团的住宅としてのアパート建築が、蔬菜畑を壊滅して貸えたつ度合をましつつある時（写真参照）近郊農村の変貌は一層その速度を速めていくであろうと考えられる。その時、過去の郊村がたどった運命を再びたどるか、或はまた違った形であらわれてくるかは、大きな興味をひく問題である。

以上の研究は、立命館文学掲載（1955年、123号）の研究に加えて、生徒とともに実施した聞き取りによる農家調査の結果をもとにまとめたものである。今後は蔬菜栽培以外に、種苗・観賞植物・酪農等へも問題を普及し、さらに発展させることを念じている。

註 ①青鹿四郎・東京市近郊に於ける農業経営の研究

②大阪府全誌掲載資料により算出

③明治・大正大阪市史概説篇

④⑤大阪市統計資料による

⑥今宮町誌

⑦大阪府統計書資料による

⑧堺市勢要覧掲載資料による



## 数学科学習指導上の問題に関する 実験的考察

川野太喜男

数学の学習では、他の教科に比べて、生徒に能力差と個人差が大きく、しかも論理の体系や数理の体系があって、一足とびに先へ進むことができない。したがって、一人の生徒には一人の指導者がついて指導することが望ましい。この学習形態が個別学習である。しかしながら、我々現場の現状は、多数の生徒を有し殆んど毎日が一斉学習の形態を余儀なくされている。ここで、漫然と学習指導を行う場合には、優秀児はおさえられ、遅進児はますますその差を大きくしていくことであろう。個人差の現状に直面したとき、我々は何でも彼でも能力別というような考えはすて、生徒の個人差を発揮できる機会をとらえ、その能力を伸ばす方法に、あらゆる研究や努力がなされねばならない。

数学科学習指導の実際において当面する各種の問題、たとえば

1. 問題の難易判定について
2. 計算能力と計算速度の相関について
3. 答案の返却方法について
4. 個人指導の方法について
5. 予習と復習の効果について
6. 計算能力の診断について
7. 図形の論証指導について
8. ParadoxとPuzzleの導入について
9. 短時間多数drillと長時間少数drillについて
10. 学級人員と学習効果について

などの諸問題は、指導者が注意して研究しなければならない重要な問題であるが、往々にしてこれらの問題が単なる教師の経験や、直視的考察によって診断されることが多い。しかし、このような具体的な問題の性格からみて、合理的な診断の手続きや考察を経ないで軽率な判断や取扱いをすることは、きわめて危険なことであるといわなければならないけれども平素多忙な現場の教師にとって、これらの問題を一つ一つ分析し、解明していくことはなかなか面倒なことである。

本校ではその一つの解決の方法として、次のように実験的に、統計的に考察を行ってみたのでその結果を発表しご批判を得たいと思う。

- 研究1. (研究紀要第5集、第3分冊 P.7~P.9)    研究2. (研究紀要第5集第3分冊 P.9~P.10)    研究3. (研究紀要第5集第3分冊 P.10~P.12)
- 研究4. (研究紀要6 個人を育てる教育 P.115~P.127)
- 研究5. (研究紀要7 指導のための調査 P.120~P.126)
- 研究6. 計算能力診断の一方法

計算能力は数学の学習の基礎であるばかりでなく、理科、職業科など他教科にも関係する。第一に計算は正確でなければならない。また、正しい答がでるなら時間がかかってもよいとはいえない。したがって第二には計算は迅速になされなければならない。

このように、計算が全く生徒の血となり肉となって同化するまで、即ち無意識のうちに正確である、きれいに書く、できるだけ速くする、計算の結果を確かめることを行えるまで反復練習するよう指導しなければならないのだが、ただ単なる反復練習の強要だけでは、計算能力は向上しないと考える。即ち、testを行った時、生徒の誤謬を分析して毎回診断書(第2表)を作り、生徒自身による治療並びに個別指導に使用しているが、誤謬を分析したとき、その誤謬が無理解によるものか、理解不十分によるものか、または不注意によるものか判定に苦しむ場合がある。無理解、理解不十分な生徒に反復練習のみを要求しても効少く、不注意、練習量の少ない生徒に説明のみを続けても労多いだけである。これを解決する一方法として、計算速度を要求した場合、正確さを要求した場合の実験を行ってみた。

#### ◆ 実験方法

I 実験材料として次の6題を作り、各問題の後に書かれた事項を診断する。

- |   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| ① $\begin{cases} 3x=12-2y \\ 3x=3+y \end{cases}$  | (イ)等置法の理解<br>(ロ)移項                          | ④ $\begin{cases} 3x+2y=8 \\ 2x+y=6 \end{cases}$     | (ハ)代数式の加減<br>(ニ)等式の両辺に同じ数を掛ける           |
| ② $\begin{cases} y=3x-10 \\ 4x-y=15 \end{cases}$  | (イ)係数が1なる未知項の処理<br>(ロ)代入法の理解<br>(ハ) ( )をはずす | ⑤ $\begin{cases} 8x-3y=-13 \\ 6x-17y=5 \end{cases}$ | (ク)正負数の乗除<br>(ケ)最小公倍数の利用<br>(コ)正負数の加減乗除 |
| ③ $\begin{cases} 5x+6y=21 \\ 3x-6y=3 \end{cases}$ | (ロ)移項<br>(ハ)加減法の理解                          | ⑥ $\begin{cases} 5x=4y-15 \\ 3y-2x=6 \end{cases}$   | (ロ)0の理解<br>(ケ)全般的                       |

II 二年生144名について、連立方程式の学習3時間の後に実施する。

III 第1回テストは速さを要求し、提出した生徒は別室にて時間を充分与えて第2回テストを受けさせる。ただし、第1回テストは25分と制限したが、最後まで残った生徒は10名であった。又、同一問題でテストすることを生徒は第2回目のテスト用紙を受取るまで知らなかった。

IV 誤謬調査の必要のために、消ゴムは使用を禁止し、計算は必ずテスト用紙に記入するよう指示する。

V 整理に当たっては、各生徒の最後の解答を分析し、おかしな誤謬のすべてを集計した。したがって誤謬の合計は、誤謬をおかした生徒数よりも多くなる。又、誤謬ではないが、最小公倍数の利用、等置法、加減法の理解不足等の、改めた方がより良い点についても誤謬として考える。

#### ◆ 実験結果

I 第1回(速度を要求した場合) testにおける誤謬は、第2回(正確さを要求した場合) testにおける誤謬の2倍近くになっている。

II 第2回 testにおける誤謬は、殆んど全部第1回において誤謬をおかしている。第1回のみならず誤謬をおかしているものは、第2回目に他の解法によって、誤謬の原

因が消えているものが多い。

Ⅲ 計算技能面の誤謬は、理解面の誤謬よりも、第1回目と第2回目との差が大きくなっている。

Ⅳ 計算の間違いや思い違いや、原因不明の誤謬などは第2回目には目立って減少している。

(第1表)

問題番号 テストの種類 誤謬の原因	1		2		3		4		5		6		計	
	速	正	速	正	速	正	速	正	速	正	速	正	速	正
代数式、正負数の加減	9	4	5	1	10	4	15	3	43	16	8	3	90	31
代入の基礎的理解不足	3		44	25	3	1	2		3	1	3		58	27
(加減法にて)最小公倍数を利用せず					13	13	23	23	18	18	1	1	55	50
移項をあやまる	7	6	12	1	7		8	1	5	7	16	9	55	24
式の写し違い(計算中)	3		5	2	8	2	1	3	10	8	10	10	37	25
計算思い違い	8	3	3	1	9	3	1	2	10		6	4	37	13
不明	2		2		3		7		11	1	11	2	36	3
等置法の理解不足	23	17											23	17
正負数の乗除	1	1					3	5	15	2	4	2	23	10
加減法の理解不足			1	1	17	2	2	1					20	4
( )及び分母を外す方法を誤る	1	1							1		16	3	18	4
0についての理解不足											14	7	14	7
等式の性質を無視		1					4	2	1		8	4	13	7
解答なし							1		1	2	8	2	10	4
合 計	57	33	72	31	70	30	67	40	118	46	105	46	489	229

(註) 速:速度を要求した時の誤謬、正:正確さを要求した時の誤謬

時間を充分与えた test では、学習内容を理解さえしていると、何とかまがりなりにも解答を出す事ができる。しかしそれではどの程度に自分のものになっているか診断する事は甚だ困難である。特に計算技能の面では、それを使い得る程度が重要な問題であるが単なる test だけでは、その程度を判定する事ができない。また、速度を要求している test では、生徒の誤謬が学習内容の無理解によるものか、不注意即ち、計算途上の軽率な失敗によるものかを判定する事ができない。そこで、両者を併用する事によって、両方で誤謬をおかしていると、理解ができていないと診断し、時間をかけた時にできれば一応理解はしているが、完全に自分のものになっていないと診断し、前者には徹底的に再指導を、後者には、drill を実施すれば、治療が能率的に、また適切にできるのではないと思われる。特にここで考慮したいのは、診断して治療するという事は、既に病を犯しているもの

について行うことであるが、この病がおきないように措置、いいかえると予防的立場に基いた学習指導の資料を得たいものと考え。

また、いろいろな test を行った場合、生徒が自分の欠点はどこにあるかをはつきり知って、それに対する学習の方法を発見してゆくことは、数学のみならず各教科全般にとって創造的思考、自主的態度の涵養ということからして極めて望ましい性質のものである。しかし、問題が出されて解決する場合、その問題が自己診断のでき易い方法で提出されなければならないが、これは診断の裏の考え方であって、結局分析された問題が一番自己診断に役立つわけである。しかしながら、なかなか生徒にとって特に誤謬を犯す生徒にとっては、その誤謬の分析は困難なものがある。そこで本校では、第2表のような表を作って生徒の自己診断と自己治療の便に供している。

連立方程式解法診断表															
2年A組 番 K															
項目	等置法の理解不足	未知数の加減	移項	代入の理解不足	括弧をはずすこと	正負数の乗除	正負数の加減	代入法理解不足	加減法理解不足	最小公倍数の利用	等式の性質理解不足	0について理解不足	不法意(計算力不十分)	検算せず	○印と×印は、注意しないとよく間違えるところです  ⊗印はもう一度確実に練習しなければなりません。
該当	⊗	×					⊗		×				○		

### 研究7. 図形の論証指導について

数学の理解が進歩するためには、直観的経験から非直観的な思考、すなわち抽象的思考への機能転換がなくてはならない。しかるに、現行の数学科指導要領において、その指導内容の配列は、生徒の心理や生活経験を打ち出しすぎて、体系的な性格がうすれ、断片的な知識の集積に終り、数学の本質としての具体的な経験から一般化し、抽象化することによって生活をより豊かにしていくという面がうすかった。特に図形教材の指導については以前の、抽象的論理的なユークリッド幾何による訓練に重きがおかれて、具体的なものを経験を通して考察する立場が軽視されていた反動として、実験や経験でより真であることを個々の事実に基づいて示す実証のみに力が入られた。しかしながら、図形の性質を研究する為には、図形を具体物に即して考察するだけでは不完全である。直観によって把握した図形の性質に確証を与えたり、それらの性質を一つの体系として、まとまった知識を得たりする為にも、また知識体系を得る方法の一つの形式を学ぶためにも論証の方法は重要な意義を持っている。この立場から、中学校の図形の取扱いは、論証を入れるか入れないかの段階は過ぎて、現在どの程度の論証を入れるか、どのような指導法をとるかの問題になっている様である。どの程度の論証を入れるかについて、現行教科書の現状を概観し、本校の図形指導を反省してみたいと思う。

(中学一年)

○共通に取りあげられているもの

- 定義 …… 線、角、三角形、垂直、平行、多角形、立体の名称  
計量 …… 長さ(円)、面積(正方形、長方形、三角形、平行四辺形、台形、円、扇形)、体積(立方体、直方体、柱、錐、球)  
性質 …… 二等辺三角形、内角の和、三角形決定の条件、平行線、展開図

○その他

対称、回転体、見取図、投影図、空間の垂直・平行

(中学二年)

○共通に取りあげられているもの

- ① 証明という用語を使っているもの多く、大部分が論証に入っている。  
② 合同、相似については、半分以上が論証している。  
③ 二等辺三角形、直角三角形、平行線、相似と比、平行と比、面積の証明

○その他

角の大小、円、作図の証明

(中学三年)

○共通に取りあげられているもの

三平方の定理、円の弧、弦、直径に関する定理、円周角、接線、三点を通る円、投影、三角比

○その他

中点連結の定理、軌跡

本校の図形指導過程

一年

- ① 用語の理解      ② 図形の計量      ③ 作図(二等分線、垂線、三角形)

二年

- ④ 論証の導入(定義、公理、証明の形式)      ⑤ 三角形の合同(一段階の証明)  
⑥ 作図(表現力と証明の習熟)      ⑦ 平行線(帰謬線も含む)  
⑧ 多角形(二段階以上の証明)

三年

- ⑨ 平行四辺形(逆、必要条件、充分条件)      ⑩ 円      ⑪ 角と辺との関係  
⑫ 相似形、比

以上の内容で、論証幾何の取扱いを論理的に低め、直観幾何の取扱いを論理的に高めた体系を考えたいのであるが、なかなかスムーズな体系が作れず、この指導過程自体に数多くの問題が残されているのではないかと思います。幸い本校では、高等学校の併設に伴い、中高六カ年を一貫した教育課程を編成したいものと、目下研究中である。

不完全、かつ多くの問題を包含する体系ではあるが、これにより指導してみた結果、次のようなことも、今後の指導上留意すべきことではないかと思う。

#### 1. 表現力の不足

指導の順序として、図形の性質についてある判断をしたら、その判断が正しい理由を一

応考、論証らしいことを始める段階では、言葉や文章表現は不十分であってもよいが、次第に推論の順序を組み立て正しく表現させるようにし、更に数学らしい簡潔な言葉をもって表現するように指導するのが望ましいのではないかと思う。生徒は、教科書にある問題に対すると、問題そのものの意味がわからない場合が多い。これを分析してみると、条件と結論に分けるのが困難であり、結論を証明に使用したりする。したがって、中学校の論証指導では特に、論証形式を強いるという意味ではなく証明とはどのようなものであるかになれさせる為に、推論の基礎となる仮設、終結に分ける指導はゆるがせに出来ないのではないかと思う。高等学校の教科書においても、証明方法が粗雑であり、非常に簡単にすぎて省略が多く、また証明の付記されていない定理が羅列され、どちらかという文章による表現に偏重し、それを分析し、記号化する指導が非常に軽視されている向きもある。

また、特殊な図を書いて証明に困るものもあり、粗雑な図を書いて直観の働かないものもある。このような点から、論証の初歩の段階で充分時間をかけ、易しい問題を多く作図問題を慎重に取扱い、表現力を豊かにしていくべきではないかと思う。(第三表 ① ②)

## 2. 用語と記号の理解

思考には概念が必要であり、概念を言語で表現したものが用語である。したがって用語や記号に習熟することは、複雑な概念を簡単に表わすことが出来るわけであるから、推論に役立つわけである。折角思考力を持ちながら、定義についての理解不足から問題の解決に至り得ない場合が多い。

教科書によっては、中線を二等辺三角形で始めてとりあげるのが多く、その為に誤解する場合が多い。即ち、「中線によって、三角形の面積が二等分される」の証明で、その誤謬の原因を調べてみると、中線という用語の誤解にもとづくものが多かった。

したがって、簡潔に表現されている定義の内容を他と混同しないよう、即ち全体としての内容把握のみでなく、一字一句ゆるがせにしない態度で低学年より使用して馴れさせる配慮が必要ではないかと思う。(第三表 ① ②)

## 3. 補助線の引き方が困難

図形の性質を証明していく上に、例えば二等辺三角形の底角が等しいことは、実験や実測では発見が容易ではあるが、三角形の合同条件を知っているだけではなかなか証明の方法は発見できにくい。もし、頂角の二等分線が引いてあったとすれば、発見も容易になるであろう。第三表の③の如く、正答率の差は如何に図形の論証において、補助線の発見が難かしいかを物語っている。ここにも指導の大きな研究課題があるのではないかと思う。

(石谷茂氏著 図形と論証 P.59~P.68で、I 変換の考え方をを用いる。 II 決定条件を用いる。 III 連続的変形と極限の考え方をを用いる。 IV 枚举法と転換法を用いる。 V 代数的取扱いを多くする。と発表しておられる)

即ち、常に線分の等しいこと、角の等しいことを証明するためには、何をいえばよいかを認識させ、これを復習強調する。また、仮定に立った考え方、もしもこれが成立したとすればどうなるかということになれさせる必要があると思う。

## 4. 理解を技能へ

代数教材に比べて、幾何教材には類似題が少く、技能を固定化するだけの機会がなく生

徒は常に新しい問題にとまどっている形である。かつ、新しい問題なるが故に、他人の解をう呑みにしてただわかったというだけで、推理力、表現力ともにつかない傾向がある。

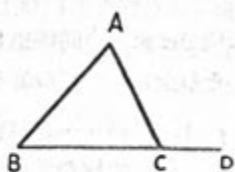
(第三表)

A、B二種のテストを同一条件で、生徒を二分して行った(④のみ共通)

① 角の等しいことを証明する問題

A.  
三角形の外角は、内対角の和に等しい。

B.

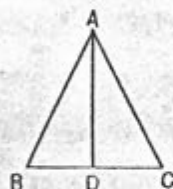


(仮設)  $\angle ACD$ は  
 $\triangle ABC$ の、 $\angle C$   
の外角

(終結)  $\angle A + \angle B = \angle ACD$

② 三角形の合同を使う問題

A.  
(仮設)  $AB = AC$   
 $BD = DC$



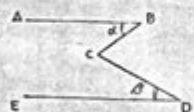
(終結)  $AD \perp BC$

B.

二等辺三角形の中線は、底辺に垂直である。

③ 補助線を使う問題

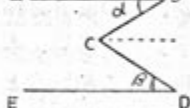
A.  
(仮設)  $AB \parallel ED$



(終結)  
 $\angle \alpha + \angle \beta = \angle BCD$

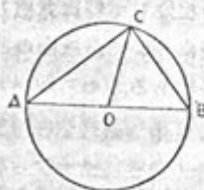
B.

(仮設)  $AB \parallel ED$



(終結)  
 $\angle \alpha + \angle \beta = \angle BCD$

④



(仮設)  $AB$ は円Oの直径

(終結)  $\angle ACB = \angle R$

正答率の表 (Aは被験者70名、Bは被験者70名)

テスト \ 番号	①	②	③	④
A	62	78	80	60
B	91	40	95	62

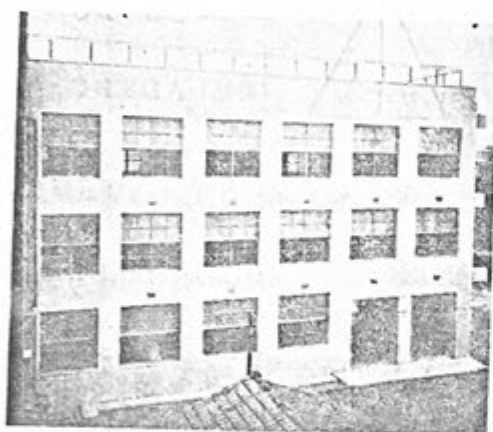
## 本校における理科施設の拡充について

佐 崎 良 雄

昭和32年4月。本校では永年の間待望してやまなかった理科教育施設が、関係者一同感激の中に竣工した。その全容はつぎの通りである。

- 鉄筋コンクリート  
三階建  
(総合建設計画)  
第3期工事
- (1) 一階……理科実験室(主として熱源・水源を必要とする化学実験やその他生徒集団実験用)約91m<sup>2</sup>
  - (2) 二階……① 理科教室(主として講義実験用、その他熱源・水源をあまり必要としない生徒実験用)約68.25m<sup>2</sup>  
② 附属理科準備室 約68.25m<sup>2</sup> ③ 標本・教具等展示用科学廊下
  - (3) 三階……普通教室二室 約68.25m<sup>2</sup>×2

右の写真は、東側本館校舎三階北側の窓から見た本校理科教室の完成後の全景である。この写真によってもわかるように、第4期工事としてさらに北側に延長され、大学図書館と接続されることが予定されている。思えば、理科教室建設の計画が立案されて以来数年にして、ついに理科施設拡充の夢が実現したのであるが、この間各方面ことに文部省並びに大阪学芸大学当局、本校PTA建設委員各位の絶大なる御好意と御援助を頂いたことに対し、厚く感謝する次第である。



第1図 本校理科教室全景

ここに、本校理科教室並びに理科教育施設の概要を紹介し、設計に際して特に考慮した問題点や実際の管理・運営に関する問題、さらに今後の拡充計画等について、紙面の許す限り述べてみたい。もし、なんらかの御参考に供して頂ければ幸甚である。

### 1. 本校における理科教室の必要性と設計上の諸問題

理科学習の効果を上げるために、附属理科準備室を含む理科教室の特設が必要であることはいうまでもない。ことに、本校では昭和32年度より新設された大阪学芸大学附属高等学校天王寺校舎の理科教育施設拡充計画と合わせて、つぎのような立場から新理科教室の必要性が重視されるに至ったのである。

- ① 高等学校の併置に伴って、理科学習の内容がやや高度な特別施設及び備品が必要とされるに至ったこと。



② 中学校及び高等学校の理科学習の形態が、必然的に特別な機能、特に電源・熱源・水源・光源を備えた特別教室が必要とされること。

③ 中学校及び高等学校における理科学習の指導は、専門の理科担任教師によって実施され、学習指導の準備や指導後の整理、施設・備品の管理と能率的な活用を期するためには、特別の理科教室及び附属準備室を必要とすること。

本校では、創設当初、大学木造寄宿舍の一部を改造した理科教室と理科準備室を使用していたが、老朽木造建築物でもあり、構造上の無理や施設の不備のため、幾多の不便を感じて来たのである。しかし、鉄筋校舎の建設計画や高等学校併置計画に伴って、総合建設計画第3期工事として理科教室建設の計画が漸く機運にのるに至ったのである。

さて、工事計画が具体化されるや、理科教育の振興を図り、その使命を達成するためには、如何にして合理的な新設計をすればよいかということで、種々の実際運営上の問題を想定して、つぎのような観点から検討を加えることにした。

① 中学校及び高等学校の何れにも適した理科教育施設であること。

中学校と高等学校とでは、その学習内容及び程度、またその学習指導の方法には相当な差異が考えられるが、本校のように両校が併置される場合には、いずれにも偏せず、しかも十分に学習の効果が上げられるような施設でなければならない。

② 能率的な理科学習施設であること。

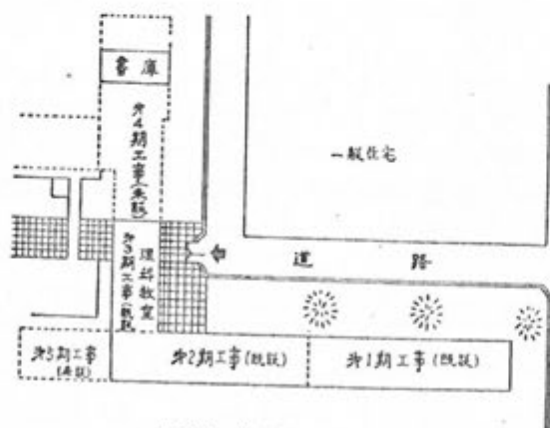
理科教室は、生徒の実験観察を主にした学習活動や講義式の学習指導のみならず、映画・幻燈による視聴覚を生かした学習、継続的な課外の自発的發展学習、さらに製作を伴う学習や研究発表による学習活動、その他いろいろな形態の学習活動が能率的に展開されなければならない。しかも、実際問題として、指導者の労力が軽減され、十分に活用できるようなむだのない合理的な施設でなければならない。

③ 運営・管理に便利であること。

理科学習活動が支障なく活発に展開できる環境であるために、多くの器具・器械類を能率的合理的に整備格納できるような施設であり、準備にも後始末にも手数がかからず、管理・運営に便利な施設でなければならない。ことに、教育系大学の附属学校として教育実習の成果が十分に上がるように、教材研究並びに予備実験に便利な研究施設と管理室が必要である。

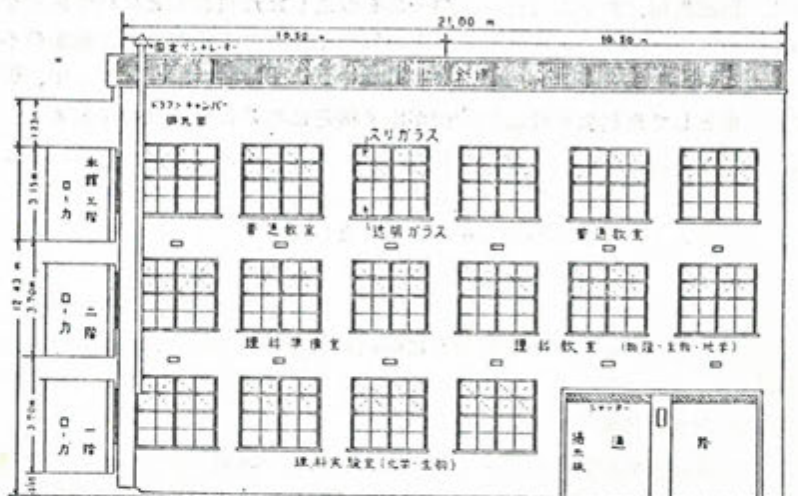
以上の条件を考慮して基本的な設計にかかったのであるが、それには校舎敷地の立地的な条件や既設校舎及び総合建設計画等の制約があって理想的な計画に幾多の困難な問題が起ってきた。その主要点をあげるとつぎのようなものである。

① 理科教室を含む第3期工事の建設敷地は既設本館校舎(第1・2期工事)に接続して南北の方向に約189m<sup>2</sup>である。(第2図参照)



第2図 総合建設計画

- ② 鉄筋コンクリート三階建の中、理科教室として一階約91m<sup>2</sup>、二階約136.5m<sup>2</sup>が予定され一・二階ともに廊下に固定的な施設をとりつけることは総合計画の立場から不可能である。(第4・5図参照)
- ③ 一階の北側約63m<sup>2</sup>は通路として予定され、さらに北側に接続して第4期工事(大学図書館・本校図書室)が予定されている。(第2図参照)



第3図 第3期工事東側立面図

このような問題について考えてみると、理科教室設置の場所として東西に伸びる三階建本館校舎に直結してその北側に南北方向一・二階という条件は、採光・通風・保温の点からいっても好条件ではない。また、一階は通路による削減で縦に細長い奇形であり、管理の点や音響効果の点で問題があるだろうし、二階も普通標準型教室2室で、しかも廊下に固定的な施設ができなるとすると、理科教室としてはいささか狭隘である。さらに、理科施設が一・二階に分かれる上に、一階には附属準備室が設けられないから備品の格納や実際の管理・運営が困難である。しかし、これらの問題はいずれも総合建設計画の立場からやむを得ないもので、むしろ設計上の考案工夫によって解決するの外なかったのである。

## 2. 本校理科教室の基本的設計

以上述べた種々の条件や制約に基づいて、第一段階の基本的な設計を行ったのであるがその概要はつぎの通りである。

- ① 一階理科実験室は、ガス配管・水圧・排水設備・面積等を考慮して、主として化学実験用教室とし、ガス・水道・電気を設備した固定式実験機12脚を配置し、ドラフトチャンパー・危険薬品庫を設ける。ことに、教室後部に大型の器具・薬品戸棚を設置し、実験機にも器具格納戸棚・抽出しをつけ、教卓にも前面及び背面に予備器具用戸棚と小物入れ抽出しを設ける。(第5図参照)
- ② 二階理科教室は、面積の点から実験機を固定することが不可能であり、熱源・電源・水源の設置が困難であるため、主として講義実験並びに物理・生物・地学用実験室とし、移動式実験機18脚を配置し、水道・排水設備は壁面及び教卓に4箇所固定、電

源・ガスは5個所に設置する。また、講義実験に備えて大型の器具格納戸棚及び抽出し付き教卓を置き、教卓前面の床に階段式踏台を特設することにした。なお、教室西側の廊下は、科学廊下として標本陳列戸棚、課外活動用の窓下実験機を設置し、科学的環境として利用する。(第12図参照)

- ③ 理科準備室は、二階理科教室に隣接し仕切扉にて相通ずるようにし、器具・器械類備品格納戸棚、薬品戸棚、図書戸棚、実験機、窓下実験観察台、重要備品用ロッカー暗室、熱源・電源・水源を設備し、施設及び備品の管理運用に便ならしめ、教官研究室としての機能を十分に発揮することができるように考慮した。ことに、中学校・高等学校の共用綜合理科準備室としての要求を満足させるためには、多数の備品類を能率的に分類整理できるような格納戸棚が必要であり、小型でしかも高度の精密実験にも活用できる種々の装置を合理的に配置しなければならない。(第12図参照)

さて、以上の構想に従って各室の設計にとりかかったのであるが、その設計上の特色並びに留意点、問題点について順次説明しよう。

### 3. 本校理科教室の設計上の特色及び内部設備

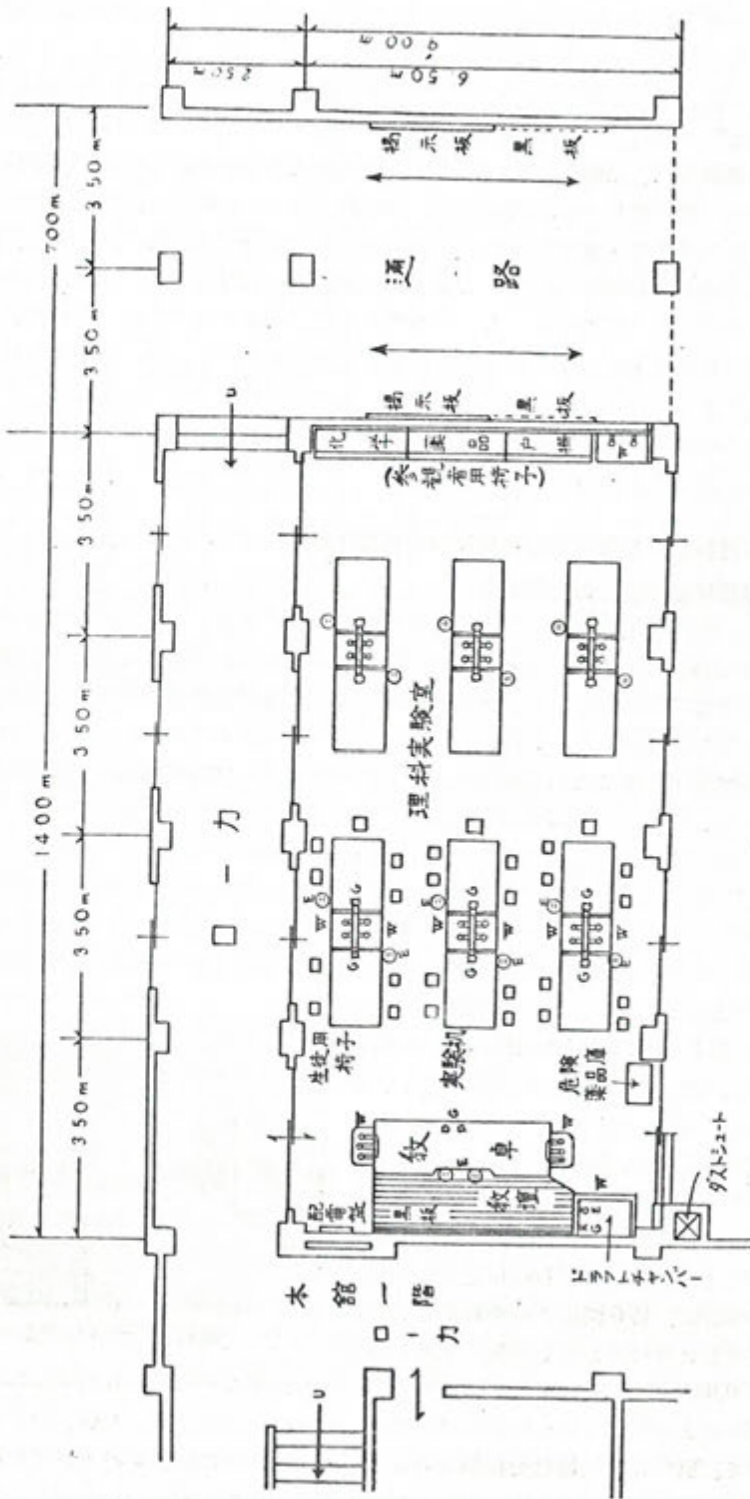
#### (1) 一階理科室の設計と内部設備

第5図の一階理科実験室平面図を見て先ず気の付くことは、実験機の配置や流しの位置その他に文部省案による理科教室の形式が多く採用されていることであるが、この形式は流しの数が少なくすむし、水道・ガス・電気が一まとめにできて管理に便利であり、また各グループの実験操作が縦に見通せて指導し易い特徴があるので、できるだけこの形式を基本にして設計することにした。ただ、文部省案に比べて本校の場合は横幅が狭いため(6.5m)、壁ぎわの施設が困難であり、また実験機の規格及び配置には特別の工夫が必要であった。また、教育実習生の研究授業等の参観授業を考慮して教室後部の空間を特に広くし、三十名内外の参観者が入れるようにした。ことに、この一階理科実験室には準備室が附属していないので、実験用の器具・器械類や薬品類等の備品を格納管理することは困難であるため、教室後部の空間を利用して器具・薬品を整理分類して格納する戸棚を設置することにした。この戸棚は現在製作中であるが、高さ2.7m、幅4.5m三段式梯子付の大型のもので、教室後部全面の壁面に固定し、最上段は予備用ガラス器具類、中段は生徒実験用薬品及び予備薬品類、最下段には水槽・鉄製スタンド・ロート台等の大型器具類を班別に整理分類して格納させる予定である。

つぎに生徒用実験機と流しの構造及び配置について述べると、第6図によってわかるように水道・ガスをとりつけた流しを挟んでその両側に1.6m×0.9m、高さ0.75mの実験機を12脚配置し、4人またはは5人ずつのグループに分け定員54名とした。実験機の天板はデコラ張とし、両面に抽出し8個、開き戸棚2個をとりつけて、簡単な実験器具を格納するようにし、机の下に電源をパイプで配線した。デコラ張りは光沢があって美しく、耐酸、耐アルカリで堅牢であるが、多少熱に弱い欠点が

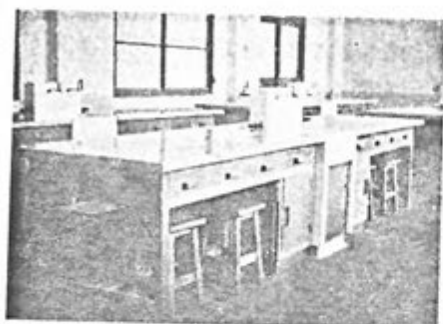


第4図 一階理科実験室



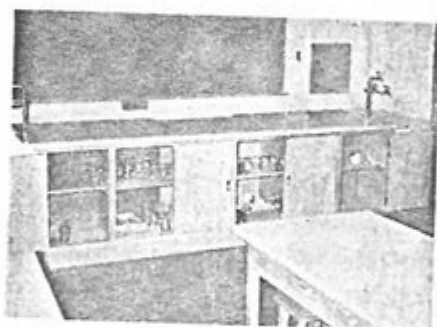
第5圖 一階理科實驗室平面圖

あるので、各机にパーナー台用の板を備えつけた。生徒用椅子は角型（27cm平方）、高さ42cmで、丸型椅子に比べて坐り易く、安定感があり、整頓に便利で、工作用の台にも使用出来るように横にすると天板が床に垂直になるようにした。（第6・8図参照）

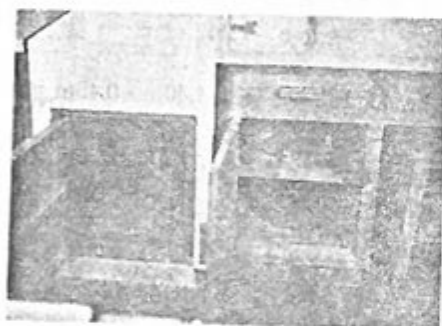


第6図 生徒用実験机1号

教卓は実験観察台になるように大型にし、上面3.2m×1.0m、高さ95cmで、前面及び背面に戸棚、抽出しをつけ、両側に水道3基と流し、正面裏に電源、また教卓上部中央にガス管2基を埋込式に装置した。なお、教卓天板はカシュー塗り仕上げである。（第7図参照）



第7図 教卓全面



第8図 実験机及び流しの戸棚

ドラフトチャンバーは第9図のように、教室前面黑板横に設置し、内部は総タイル貼りでガス・水道を備え、その下部は戸棚になっている。また、前面床下に危険薬品庫を設け鉄板の蓋をかぶせている。なお、黑板左隅がドラフトチャンバーの蔭になって暗いので黑板照明用蛍光灯2基をとりつけた。電源管理用上の配電盤は黑板左横、消火器2個を教室前部及び後部に常備している。



第9図 ドラフトチャンバー

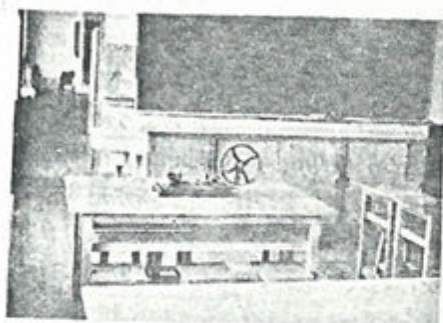
## (2) 二階理科教室の設計と内部設備

二階理科教室は前述の通り普通標準教室大の6.5m×10.5mであるから、講義実験室として使用するには適当な広さであるが、生徒集団実験室として使用するには固定式実験机を配置することが困難であるから、第10図に見られるような移動式実験机を配置することにした。すなわち、3人用長机を3列に6脚ずつ配置し、講義実験室として使用する時は1脚ずつ単独に使用し、集団実験室として使用する時は第11図のように前後の2脚を移動して組み合わせ、9脚の実験机として使用できるように特に考慮したのである。また、水道と流しは教卓両側以外に、窓ぎわと教室後部に3個所、電源・ガスは教卓以外に周囲の壁面や柱に4個所

設置したが、できるだけ平素は講義実験室として活用し、水やガスをあまり使用しない物理的な実験や生物・地学の実験に支障がない程度にして、一階の理科実験室との合理的な運営を図ることとした。



第10図 二階理科教室



第11図 生徒実験机2号

生徒用長机は、上面  $1.40\text{m} \times 0.45\text{m}$  で、高さ  $75\text{cm}$  の四本足であるが、移動式であるため構造はできるだけ簡単にし、天板は乾燥十分な檜材を使用してくるいのないようにし、下に棚を一枚入れた。生徒用椅子は、一階理科実験室のものと全く同一にした。

また、講義実験室として使用する際の事を考慮して、教卓は実験観察台として使用できるように、 $3.5\text{m} \times 1.0\text{m}$  の特に大型のものにし、その前面及び背面に戸棚・抽出しをつけて、実験用器具や小物類を整理分類するようにした。また、教卓は高さ  $95\text{cm}$  で教卓を設け、その前面と側面に埋込みの階段式踏台を設置して、教師実験の集団観察にも支障のないようにした。

さらに、この教室は暗室実験や幻燈・映画の映写ができるように暗幕装置と映写幕を装備することにした。

### (3) 二階理科準備室の設計と内部設備

理科準備室が理科の学習活動やその運営に当ってもつ意義には、およそつぎのような観点が挙げられる。

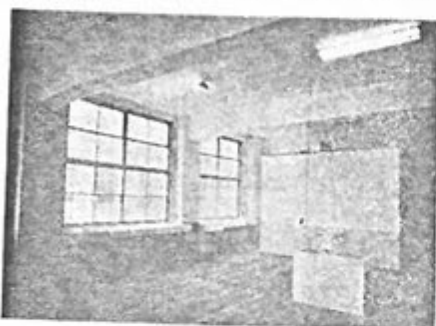
- ① 理科の学習指導におけるすべての実験に必要な器具や器械や薬品、その他種々の材料を保管し、その運営に支障のないようにする。
- ② 理科における学習活動の諸準備をする。すなわち、生徒実験のための準備や教師実験のための予備実験並びに研究実験や準備、その他実験観察に必要な器具や材料の整備等の準備に活用する。
- ③ 教師が教材研究や学習指導法の研究、その他一般の研究活動を行う研究室である。ことに、本校では教育実習生の研究活動が十分に行われるように、備品類や施設を常に整備し、充実しておかなければならない。

以上のように、備品類及び施設の管理・運営や学習指導の準備、研究活動の場所として理科準備室を活用する場合に、能率的にしかも合理的に活動することができるように、準備室内における行動による動線を検討し、また種々の戸棚類や実験机及び準備机、事務机種々の器械器具類、暗室等の構造とその配置を十分に考慮した。特に本校の場合、一階の



理科実験室には準備室が附属していないので、一・二階理科教室兼用の準備室として両教室の教育活動に支障のないように、原則的に化学実験機や薬品戸棚、暗室設備はできるだけ階段に近い入口付近に配置し、講義実験観察用の器具や模型、掛図類は隣接の理科教室との仕切扉の付近に配置するようにした。

第13図は、完成直後のまだ戸棚類や実験機、事務机を配置する前の理科準備室の内部構造を示す写真である。中央やや右の出っぱった白壁は写真用暗室である。



第13図 完成直後の準備室内部

室内の設備としては、器具格納用大型戸棚2本、薬品戸棚2本、生物用標本及び実験器具用戸棚2本、小物整理分類用戸棚2本、図書及び書類用戸棚2本、化学実験機2脚、物理実験台1脚、事務机2脚、重要備品用ロッカー2本、水道栓8個、流し3個、ガス栓8個、電源用コンセント10個、窓下実験観察台2個、化学天秤用コンクリート台1個、掛図かけ1台、インターホーン1台、電気冷蔵庫1台、工作台1脚、ガラス器具乾燥棚1脚等である。

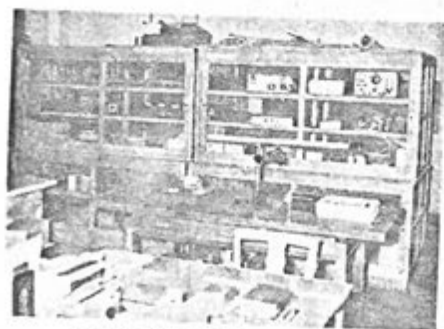
実験機は、一階実験室の生徒用実験機と同様デコラ張りで、流しの両側に化学用実験機その横に物理用実験機を配置し、小抽出し、戸棚をとりつけ、化学実験機の後に薬品戸棚及び化学用実験器具戸棚を置いて研究実験を能率的にするようにした。



第14図 理科準備室内の全景



第15図 化学用実験機と薬品戸棚



第16図 物理実験機と器具戸棚



第17図 図書・書類戸棚



第16図は、物理実験機と物理用器具戸棚を示すものであるが、戸棚は両面ガラスで奥行1.2m 上下二段式、棚板は自由に取りはずすことができる。なお、将来は上部に小型の標本用戸棚をとりつけ、三段式にする予定である。

第17図は、図書用戸棚であるが、暗室壁面に固定し、高さ 2.2m で、生徒用参考図書・教材研究図書及び資料、教育実習生用理科教育用図書、その他種々の書類を格納保管し、事務机はその前面に配置した。

第18図は、隣接理科教室との仕切扉横に設置した小型実験器具用整理分類戸棚で幻燈用フィルム、顕微鏡プレパラート、項目別生徒実験用器具、教授用資料並びに材料等を整理分類するために、抽出し式の三段戸棚を上下に重ねた。この整理戸棚は極めて能率的で重宝なものである。なお、写真の奥にも見える戸棚は、第15図に見られる薬品戸棚と同型のもので、生物地学用実験器具の格納に使用しているものであるが、次年度にはこの上に標本用小型戸棚を設置する予定である。



第18図 整理分類用戸棚

以上理科準備室内の設備の概要を説明したが、今後さらに工夫を重ね、施設を拡充して、小型ながらも能率的合理的な使い易い便利な準備室として活用する予定である。

紙面が許せば、設計図は細部の写真や使用例について詳細に紹介したかったのであるが、限られた頁数のため多数省略してその概要のみに終始したことを御了承願いたい。(昭和32年9月30日)

## 変声期の中学生の音楽教育の一端

～指導記録より～

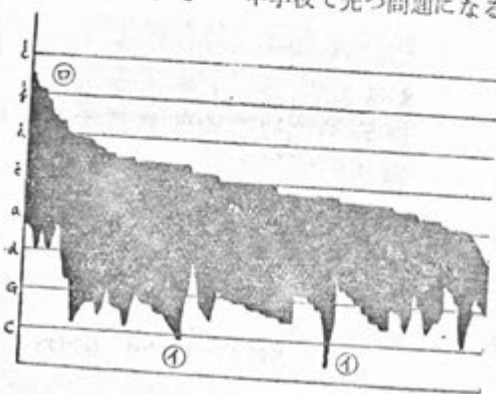
久米てる子

a) はじめに 研究発表というよりも、むしろ多くの疑問にぶつかりながら、たどたどしく歩いて来た跡をふり返って反省をしてみたいと思う。そこで私の学習指導日記の中からいくつかの実践記録や問題点を取り出して色々と考えて行こう。戦後10年の月日が過ぎた今日、凡ての教育が一応その足跡を反省してみる時期であると思われる。

～〇月〇日～ 子供の世界から大人の世界へと成長して行く過程にある中学生は、非常にもろく感じやすく、環境に支配されやすい。指導の如何によって、どのようにでも変わる時代であるから、この期の指導はむつかしい。特に音楽教育には、力を入れなければならぬと思う。美しい音楽を鑑賞し、又演奏し、絵を画き、詩を味わうという風に、芸術によって子供たちの情緒を真直に豊かに育てて行くことを忘れてはならない。音楽をきき演奏し歌いながら子供たちは全身でそれを感じている。喜びの音楽は全身で喜び、悲しみの音楽は全身で悲しみ、又憎しみの場合は全身で憎む。この細やかな感情を充分身につけて音楽に共鳴し得る子供を育て、音楽によって心に栄養を与えて子供たちの美に対する憧れ欲求を充ててやりたいものだ。感情をリズムに表現し、メロディーにのせるということが人間の本能なれば音楽教育によって人間として大切なものをさとらせ、真実なるものこそでないものをわきまえる力を養うことは大切である。健全な音楽が社会に普及したならば、人の心は和ぎ調和を保つことが出来、悪は追放され、人生にプラスすることが多いだろう。こんな所に自分の理想をかまけて日々歩んでいるのだが、その成果は誠に微々たるもので、常に悩みは大きい。元気な発育盛りの子は、ともすると、粗暴になりやすい。然し、やたらに高尚な音楽とか、お行儀をよくなどと言って、生徒を窮屈にしすぎてはいけない。のびのびと、充分に好きなようにさせておいて、しかも、自然に子供たちが生活と結びつけて音楽を楽しみ、喜ぶようにしむけてやるのが大切である。

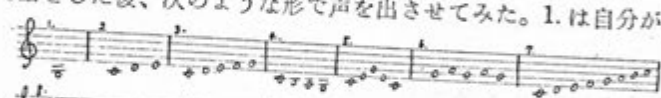
b) 変声について 中学校で先づ問題になるのは変声ということであるから、学年の始め、或は学期の始めには声の状態を調べておかなければならない。声域、音色、変声の状態、その他特殊なケース等。

～〇月〇日～ 今週は各学年にわたって声域調査を行った。次に示すのは中3の男生徒の声域表である。これで見ると高音部の方は最も出る者が2点aまで、最も出ない者でeまでとなっている。その差は2オクターヴにもなる。低音部の方は最もよく出る者が下1点Aまで、最



も出ない者でgまでである。又個々に見ると最も声域の広い者で1点bよりEsまで2オクターヴと5度となっており、最も狭い者でeよりGまで僅か6度である。このように声の高さは非常にまちまちである。グラフ中の④等は大体変声も終りに近く低音部へ伸びて来て居り、声に次第に幅が出て来て男声の特徴を具えて来ている。⑥等はずつと高音部へ伸びて、テナーらしい声になっている。②③等は最も出にくい時期であり、いつもこのような状態が1人2人居る。この場合、はっきりとその間の音が出せるならばいいのだが、それもはっきりしない場合がある。そうかといって音痴ではないのだ。というのはメロディーとしては歌えないが、或る音を抜き出して、様々な方法で他の音からその音へ結びつけて行くようにすれば、その音を出す事が出来るからである。喉の状態が非常に危険だから歌唱はさけた方がよい。こんな時期は出来るだけ、器楽とか他の方法で音楽から遠ざけないようにすると共に、適切な指導を加えて、出来るだけ早く楽な状態にしてやるようにしてはならない。こんな生徒を忘れてしまっはいけない。

～○月○日～ この日は先にのべた特殊なケースの生徒を家に呼んで1日通した。午前中、指定してあった時刻に訪ねて来た。気持のいい明るい子で、声の出ないことをさほど苦にもしていないし、その為に音楽を嫌うようでもないらしい。暫くテープの音楽をきいて話をした後、次のような形で声を出させてみた。1.は自分が出せる最低の音である。2.

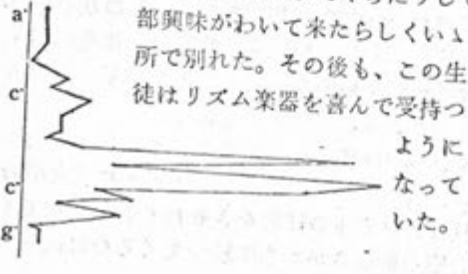


3.はよく出来た。4.のa音が不安定。5.6.はあまりよくない。7.はむらがある。8.は2点cがすばらしく美しい音で出たのではめて上げた。しかし下降の時に、だんだん音程が下り気味

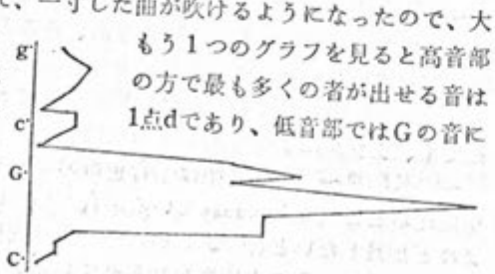


だった。次に音階の各音を出るだけ永く持続させて出す練習をしてみた。Laの音がうまく出せなかった。それでSo→Laと続けてみると3回目正しい音が出て来た。高い方のDoは上ずる時もあり、下る時もあったので之も又、Si→Do或

はSo→Doと続けて練習してみると、大体音がとれて来た。10分位歌って、1時間位休憩し又5分位歌うといった具合に、出来るだけ疲れないようにして正しい音を覚えさせた。休憩の後もう1度音階を歌わせる、1音毎に範唱をしてやると、大体出来るのだが、ピアノに合わせて続けると、音程が不安定になってくる。又下降の時は、始めの2点cがうまく出せる時と、そうでない時とあり、他の音は下り気味である。上降ではSi、Doで出しにくくなり下降では、1点cよりDo、Si、La、まではよくSoまで行くと、無理だった。結局声域は1オクターヴ程である。休憩の間は話しをしたり、ラジオをきいたり、食事をしたり、遊んだりして過す。スベリオパイプをやらせてみるとこの方は幾分面白そうだった。一緒に笛を吹いたり、伴奏を入れてやったりして、一寸した曲が吹けるようになったので、大



部興味がわいて来たらしくいゝ所で別れた。その後も、この生徒はリズム楽器を喜んで受持つようになっていた。



もう1つのグラフを見ると高音部の方で最も多くの者が出せる音は1点dであり、低音部ではGの音に

なっている。彼等が1年の頃には2点d位から下はb位までが平均であったから、女生徒とあまり変わって来なかった。2年では最もこのグラフの凸凹が多く、3年の2学期頃には大部なめらかになってくる。そして高校に入ると殆どの者がG位に下って来て居り、最低は下1点A位まで出るようになる。又高音部は1点a位から1点c位までになり、高音部も低音部もなだらかな線を表している。故に3年の2学期頃混声合唱(混声3部から入る)がぼつぼつ出来る。

～○月○日～ 生徒自身が自分の声の状態について感じている所をきいてみると、1年生104名の中で、楽に声が出るという者僅か2名、非常に声が出にくい者20名、2年生110名の中で楽に声の出る者1名、非常に出にくい者15名程である。残りは非常に出にくいことはないが楽に出る方でもないという者である。これで見ても、1、2年には是非、器楽教育が必要だ。

～○月○日～ 声の質は1年では子供の声あり、変声中のがさがさした声あり、半分大人になつた感じの声あり、丸く軟らかな声もあれば地声があり、何となく全体に荒く固い感じであり、2年になると急にヴォリュームがなくなり、無理をして大きな声を出すと割れてしまい、全く危険だ。3年も1学期では、まだまだ不揃いだが、2学期になるとずっと声に巾が出て来て男声の魅力がぼつぼつと出かけてくる。それに比べて女子の変声は、そんなにはっきり分らないのに、大部遅くまで高校に入っても、まだ線が細く、声に艶が出るまでは時を要する。こんなことが我が校の現状である。

c) 歌唱指導について 歌う時には足を少し開き、軽く後に手をくんだ姿勢をとらせているが、発声の時には、時々横隔膜の所をおさえて息を深く吸いこんだり、息をとめたり静かにはく練習をしたりする。口の開け方は図を見たり、私のを真似させながら又は鏡を見ながら研究させる。口の形に標準はあるが、人によって多少は異なるものだ。要するに美しく正しい発音が出来ればいいわけである。頭声とか胸声とか、むつかしいことは言わずにとにかく無理のない、快い声を出すように努力させる。体をらくにして出来るだけ軟かくとか、地声でどならず呼吸を整えて静かに出すようにとか、分りやすい言葉で説明してやる。共鳴のついた声と、つかない声の区別も実際に何度もきかせてやってその違いを体得させるよう努力している。

～○月○日～ 教材はいつも声域に合うものを選びなくてはならない。又1年生では部分2部とか、輪唱などは比較的楽しく歌えるものである。部分二部では、声域の狭い疲れやすい生徒には、その部分の低音部だけを受持たせばよいし、前の方をききながら待っていることも練習になり、又合唱の面白さも僅か数小節で味あえるわけだ。斉唱の曲であれば最も歌いやすい調に移調して歌わせている。

～○月○日～ 生徒が興味を持つ曲はどんなものか知っておく事は大切だ。過去1ケ年に習った歌の中から、自分の好きな曲、さほどでもないもの、非常に嫌いなものなどに分けて調べて見た。その表は次の通りである。生徒がどんな曲を好んで歌うか、指導の結果がどのように現われているかは、常に知っておくのがよかる。同じことを同じように教えても、クラスによつて大部異つた数を示して居り、又、男女の差もある。

～○月○日～ よい合唱は④音色のバランス、⑤ヴォリュームのバランス、⑥出と終りを揃えることなどと言われているが我が校では、男生徒が⑤を占めているために、④⑤はよほど加減しないとむつかしい。⑥の方は交代で、タクトの練習をさせたりして、何度も反復する中に、その大切さを知らせている。合唱の面白さが本当に解つてくるのは高校へ

入つてからのようだ。しかも高校2年位になると相当充実した合唱が出来てくる。やはり中学では器楽に重点をおき、高校に入ってから合唱に力を入れた方がよさそうだ。又、発表の機会を作ってやるのが大切で、学期に一度はクラス音楽会を、年に一度は全校の音楽会を持つことにしている。そういう発表会の後には、めきめきと進歩の跡が感じられるから。◎は特に好きな曲、○は好きな曲、△は普通、×は嫌いなものである。教科書は教芸のもの。紙面の関係で2年生の分だけを示す。(現在は教育図書を使用している。)

	曲名	男子◎				女子◎			
		○	△	×	○	△	×		
		A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C
1	美しき	0 1 0	13 12 14	15 10 17	4 3 2	2 0 0	14 8 13	5 11 7	1 2 1
2	サンタルチア	0 0 1	27 17 14	5 7 13	2 2 6	0 0 0	10 11 14	9 6 5	3 3 1
3	白鳥の歌	0 0 0	14 17 18	9 5 12	7 4 1	0 1 2	13 13 15	7 5 2	1 1 1
4	春の日	0 0 0	9 12 14	14 10 10	10 4 8	0 0 0	8 4 6	13 11 9	1 5 5
5	こちょう	1 0 0	21 5 3	6 11 15	5 10 10	0 1 0	5 6 9	10 6 7	7 7 4
6	希望	0 0 0	10 7 5	17 13 17	6 7 11	0 0 0	7 7 5	10 11 9	5 2 6
7	アロハオエ	1 2 0	25 19 7	3 5 14	5 0 12	1 1 0	16 15 14	5 4 6	0 0 0
8	旅泊	4 0 3	19 7 17	8 12 8	1 7 5	1 2 1	10 13 17	8 3 2	2 2 0
9	夕べの鐘	0 0 6	8 2 20	17 14 3	8 10 4	0 0 0	3 8 8	10 9 9	7 3 3
10	ほととぎす	1 4 0	22 15 8	7 4 12	4 3 13	3 1 2	15 17 17	3 2 1	0 0 0
11	菊	0 0 3	15 18 14	14 5 9	4 3 7	1 2 0	11 19 16	8 7 3	2 2 1
12	のばら	0 0 2	24 18 14	6 6 9	5 2 8	0 2 0	17 18 15	6 4 5	0 1 0
13	砂山	3 0 2	21 7 12	5 10 8	5 9 1	2 1 4	16 15 13	4 3 3	0 0 0
14	モーツアルトの子守唄	0 2 5	19 15 16	10 8 6	4 2 6	0 3 2	14 9 11	8 5 6	1 3 1
15	運動会	0 0 0	9 7 16	8 8 9	16 11 7	1 1 0	7 4 6	11 11 8	3 4 6
16	楽しき農夫	1 0 0	24 17 5	5 7 18	3 2 10	1 1 0	11 11 11	9 5 9	2 2 2
17	そりの歌	1 0 1	16 7 18	10 12 12	6 7 3	0 0 0	13 10 10	8 9 9	1 1 1
18	この道	1 1 0	24 15 14	5 6 13	3 4 7	1 0 2	16 11 15	3 7 3	3 2 0
19	輪舞	0 0 0	17 12 15	9 7 11	7 7 8	1 1 0	15 14 15	4 4 4	2 1 2
20	希望のささやき	1 1 0	19 10 9	8 7 11	5 9 13	2 2 0	16 12 13	4 5 7	0 1 1
21	モーツアルトのセレナーデ	0 2 2	22 8 6	6 8 19	5 8 7	0 1 0	14 13 13	6 4 7	3 1 0
22	老松	6 0 2	18 18 11	8 7 13	1 1 7	0 1 1	19 15 19	4 4 1	0 0 1
23	叱られて	2 0 0	16 17 19	8 8 8	7 7 5	0 0 1	13 16 15	8 3 3	1 0 1
24	花	3 6 3	25 15 14	5 2 13	1 5 6	3 1 3	17 18 15	1 0 2	1 1 0
25	螢の光	0 1 2	26 8 23	4 9 7	2 7 0	1 0 0	15 13 18	7 6 2	0 1 1
26	追憶	4 2 0	24 18 4	4 2 21	2 4 7	0 1 2	18 18 18	4 1 1	0 0 0

d) 器楽指導について 子供達に最も直接的で喜ばれるのは何と云っても器楽である。特に変声期中で思うように歌えない者にとって、器楽はこの上ないよき友達である。教室でも合奏の時間が一番活気があって嬉しそうだ。今までハーモニカと木琴を持たせた時代もあったが一斉授業としては、やはり統一させた方がいいので全員に笛を持たせることにした。スベリオパイプとスベリオファイブのどちらかということにして、これなら音も比較的正確だし半音も出せるので便利である。又和音合唱の代りに利用しても適当である。ただし1点c音より下が出せないで残念で、アルトの笛でも併用させれば、これを補えるのだが現在では合奏の時に他の楽器によって低音を受持つて、安定感、充実感を味わせようとしている。現在我が校での合奏編成は大体次のような状態である。

笛、ハーモニカ、が最も多く、アコーディオン、マリンバ、木琴、鉄琴、打楽器、オルガン、ピアノ等がそれに加わり、その他、個人持ちのヴァイオリンが入ったり、曲によってビコロ、クラリネット、トランペット、トロンボーン等を加える。しかし、鉄琴は卓上のもので、マリンバも始めに出た頃のもので音も悪く、その他の楽器も1~2位の数では全く簡易合奏の域を脱していない。ブラスバンドやオーケストラは前からの夢だが1本の楽器を数人が交代で使っている有様、オルガンやピアノは1台で全校生が使うのだから、まだ中々むづかしい。然し、子供達の楽器に対する熱はすばらしいもので、暇があれば音楽室に走って行って、弾いているし、笛を手に入れている。特にトランペットなど、何とか音が出るようになった時の顔の輝きは、中々得がたいものである。彼等に充分時間と楽器を与えて、才能の芽生えを伸してやりたいのが念願である。

~○月○日~ 笛の基本練習。先ず姿勢、持ち方、口のあて方、息の出し方、次にC音の調整、音階練習、指は出来るだけ正確に穴を押えられるようにする。ロングトーンで音階が出来るようになったら、タンギングの練習でリズムを加える。1方ハーモニーの勉強のために、三つのグループに分れて、三和音の終止形を吹かせてみたり、二部に分れて簡単な二部合唱の曲を吹いたりする。簡単なメロディ、リズムが出来るようになると、教科書の既習教材を、だんだん覚えるようにして行くのであるが、子供達は覚えが早い。そして時々合奏するのを楽しみにしている。

~○月○日~ そうしている中に、横笛を吹いている者は、ビコロやフルートを吹きたくなり、たて笛を吹いている者はクラリネットを習ってみたくなる。又男子はトランペットや、トロンボーン等と威勢のいいのをやつてみたくなる。こんな生徒のために、どうしても将来楽器を増して、ブラスバンドやオーケストラを編成してやりたいものだ。又全般的には、何と云っても、けんばん指導は欠かせないものだから、せいぜい10人に1台位のオルガンが欲しいものだ。現在紙けんばんを使っているが、どうも進歩が遅くて困る。いづれにしても、莫大な費用がかかるので、大変だがじっくり腰をすえて、物の不足を熱意によつて、少しでも補いつつ長期計画で行かねばなるまい。乏しい楽器で、僅かの時間で、如何に最大の効果をあげるかということになってくるが、誠に涙ぐましい有様だ。何でもいから楽器を1つ習得し、表現の喜びを見出すと共に、実際自分の出す音を通して、音楽をより理解し、疑問を解決し、更に友達との合奏を楽しむことによつて、健全な余暇の利用が出来、又、物事を完成させる力を養うことが出来るのである。又、器楽指導に当つては、たえず楽器の取扱について、注意しているが、これは楽器の練習と同じように大切なことで、楽器を粗末にする者は進歩しないと教えている。又本当に音楽の解らない人



## 家庭科教育における男女共学の成果

上 村 佐 智 子

### 一、わが校の家庭科教育

わが校の家庭科は、すでに、昭和29年度から、各学年とも男女共学で学習している。しかし、家庭科教育の内容は、非常に広範囲であり、またその上に、他の教科と異なり、男女各々の興味差、及び能力差をとくに考慮して指導しなければならないなど、非常に困難とするところが多い。

そもそも、家庭科教育において、もっともたいせつなことは、民主的な楽しい家庭とはどのような家庭であり、そのような望ましい家庭をつくりあげるには、家族の各々が、どのような態度でのぞむべきかを教えることにある。そのため、家庭生活においては、どのような仕事があり、その仕事をどのような方法で処理していくのかを知らなければならない。その場合、男子と女子がいっしょに学ぶことによって、お互に啓発しあい、より合理的な方法をみつけだすことができるとともに、お互の性格や能力の差があるために、かえってお互を深く理解し、協力することができるのではなからうか。また、本校の生徒の家庭環境は、ほとんど都会であり、非常に機械化されているので、家庭における仕事は、一段と単純化されつつある。そこで、いままでのような衣食住に関する高度の技術を必要としなくなったので、男女共学で学習しても、男女の能力差による学習指導の困難点は、さほど認められない。

しかし、時間の余裕があれば、女子には、もっと深く衣食住その他について学習させたいが、わずかの家庭科の時間に、男女別々に学習して得たものよりも、男女共学で学習して得たものの方が、より大きいのではないかと考える。すでに、衣生活指導については、わが校の研究紀要6（昭和28年度版）及び研究紀要7（昭和30年度版）にのべたので、つぎに、食生活の指導の実態と、その成果についてのべる。

### 二、調理実習の指導について

わが校の職業家庭科は、週三時間であるが、一学年は、三時間とも家庭科を、二・三学年は、それぞれ週一時間だけ家庭科を学習している。食生活については、主として二学期に学習することとし、一学年では、栄養と基礎調理、二学年では、季節の調理と食卓作法、三学年では、食生活の改善について学習している。いままでに、調理実習にとりあげた料理は、つぎのようなものである。

- 一学年——ごはん、炊き込み飯、すまし汁、みそ汁、煮物（魚と野菜）、焼物（塩焼、厚焼卵）、おひたし、あえもの（ごまあえ）、酢のもの（なます）
- 二学年——カレーライス、いりごはん、いためそば、かき卵汁、ムニエル、天ぷら、ドーナツ、ビスケット



三学年——ちらしずし、サンドイッチ、茶碗むし、自由献立

実習の際は、調理台が七つあるので、七班とし、班員は七人乃至八人である。グループが、男女いっしょの場合は、とかく、男子が女子に頼りがちになる。とくに、後始末は、女子の仕事に残されることが多いので、はじめは、男女別々の班編成とし、相当実習を経験してから、男女いっしょの班に組みかえるようにしている。二・三学年は、一時間で調理実習をするので、その場合、綿密な準備と計画を必要とする。

### 三、男女共学の成果

調理実習は、男子も女子も非常に興味をもっており、料理の出来ばえも、男子と女子の差はあまり認められない。つぎにあげたのは、三学年が、男女いっしょのグループで、カレーライスをつくった時の感想の一部である。

(1) 普通の授業の時など、こんなものは、習ったって実際には役にたたないものだと思ってたことがらがたくさんありました。しかし、実習をやってみて、日常、ノートの上では、あまり重要でないものでも、それがたいせつであるということがよくわかりました。  
(女子)

(2) 何よりも強く感じたことは、どんなことでも、実際にやってみて、はじめてその方法がわかるということである。(男子)

(3) 必修科目であるにもかかわらず、家庭科は、どうしてもなじめなかった。職業科にくっついてやってはいるものの、女のことなど勉強するなんて、と思っていた。しかし、卒業式も間近いこのごろになって、この常識的な、なんでもない当りまえのことを勉強して、実生活に直接結びつけるものこそ、ほんとうの勉強ではないかと考えるようになった。習ったことはすぐ役に立つ。これほど生活に関連の深い学習を軽視し、いたずらに、高等教育を求めていた自分を哀れに思うようになった。(男子)

(4) 皆の指で、あかをつけまわしてつくったものが、いかに下手くそでも、かみしめるその底から、いつわりのない友だちの気持が、しみとおるような気がする。(男子)

(5) 水は、手がしびれるほど冷たかった。皆、食べるものをつくるときは、冷たくても水をさわるが、後始末などのとき、水をさわらないのは、やはり、人間のずるいところであろう。女子が、手際よくものごとをするのを見ると、女子だなあノと感心させられた。(男子)

(6) 調理は、やっぱり不器用であったけれども、僕にできないことは少なかった。それで、人というものは、やれることをどんどんやってみれば、いままで、不可能と思っていたことでもできるのではないかと思った。(男子)

(7) 他のことでも、経験することであるが、班員の一致協力の精神のたいせつなことである。もうひとつは、日頃こういう経験をしていない僕たちにとって、その料理法を知るのみでなく、同時に、融通のきく豊かな人間が養われるのではないかと思った。(男子)

(8) 料理をつくるということは、たいへん手間のかかることだ。だから、もつと料理について、栄養的、経済的によいものが研究されれば、いまの女の人たちは、いくらかでも楽になるのではなからうか。(男子)

(9) 男子と女子は、別々の買い物をしたが、やはり、男の人たちは下手だと思った。第一、安く買おうと思えば、大衆向きの市場が、いちばん買いやすいし、値切ることもできる。私たちの班は35円値切った。それに比べて、男子は、百貨店でたくさんのからしを買

ってきた。昔からの習慣のせいで、男子は、何も考えないでお金を使うが、やはり、女子は、第一に経済面を考えるのに、あらためてびっくりした。(女子)

10 台所の仕事というものは、やはり女子の仕事である。それだけに、男子は、台所の仕事というと、どうしてもひっこみがちになる。だから、こんな場合、女子が男子にさそいかけて、仕事をいっしょにしようという気分を持たせることがたいせつだと思った。これから、男女が共同で仕事をする場合、男子に向く仕事であれば、男子は女子をリードし、女子に向く仕事であれば、女子は男子をリードして、はじめてうまくいくものだなあとしみじみ考えた。(女子)

11 私たちは、小学生時代は、家庭科というものは、女子のみがするものであると決められていました。けれども、中学校に入ってから、家庭科は、女子だけのものではないということに自覚するようになりました。しかし、私は、男子に調理とか、つくりものをして欲しいというのではなく、もっと、男子の家庭の主婦の仕事に対する関心が欲しいのです。どれだけ女子が、毎日、家庭の仕事に追われているかということに自覚して欲しいと思います。そして、台所改善へも関心を向け協力して欲しいと思います。(女子)

12 僕は、家庭科なんてものは、なぜ習うのかはじめは全然わからなかったが、将来、結婚して家庭人になったとき、よりよく家庭生活について理解できると思う。だから、家庭科は、より家庭的な雰囲気の中で、家庭とは、社会生活にいかに関わる重要な地位を占めているかがわかるように勉強できたらなおよいと思った。僕は、今後、家庭科をおそわる機会はないと思うが、将来、「あのときああいうものをおそわった。」と思い出し、家庭を円満に営んでいくことができるかもしれない。(男子)

13 男子が、女子のする仕事を習っても、あまり性格にあわないのでうまくいかない。それよりも、男子は男子の性格にあうものを習って、それぞれ、自分の得意の仕事をしていく方が合理的だと思う。(男子)

14 どうしても、男女いっしょに実習すると、女子が仕事の大半をし、男子はその間じっと見ているというようなことになりがちである。だから、男子同志で協力して、実習を身につけたらよいと思う。しかし、理想は、あくまで男女協力するのがよいと思う。(女子)

以上のように、男女いっしょに実習することによって、生徒はいろいろのことを体験している。もし、男女別々に実習していたならば、このように多くのものを修得することはできなかったであろう。なかには、13、14のように、男女別々に実習した方がよいという感想もみられるが、このような感想を抱いているものは、非常に少なく、50人のうち2人ぐらいである。

私たち指導者は、とかく、多くのことを生徒に教えようとする。しかし、一通りいろいろのことを習ったが、そのうちの何ひとつも自信がないというよりも、たとえ、ごはんたきだけでもよい、ほんとに身につけておけば、そのことによって、すればできるのだという自信をもつとともに、仕事をより合理的に処理していく態度と習慣が養われる。かくして、家庭生活について、よりよく理解し、また、男女各々の協力の必要性を知ることが、真に家庭科教育の目標を達成することになるのではなからうか。

## 中学生の写生に於ける線描について

木 村 茂

### 1. 絵画表現に於ける線の位置

幼児が描画に興味を持ち出すのは生後二年半余りかと思う。クレヨンなり鉛筆をもって任意な線を引く、しかしその線は唯引かれているだけで実は運動の軌跡のようなものに過ぎない。それが三年頃になれば簡単、粗略ながら人物なり、電車なり、ものの形を伝えようとした絵らしきものが表現せられる。しかもそれは必ず線條によって手と眼の運動感を基礎として表現される。この幼児の絵に似た表現形式をもっているものに原始民族の絵画表現がある。中河内郡高井田村の古墳に残る陰刻の壁画はその線感情、表現形式共に幼児画に共通したものを多分に持っている。

このような事実から形態を表現するのに最も原始的な手法は線による表現ではなからうかということである。

次に在来の日本画を考えて見よう。日本画は水墨、又は顔料を水にといて筆を用いる。この筆は線を引くのに甚だ都合よく出来ている点もあるが先づ表現しようと思う形を線で描く、即ちいわゆる白描が第一歩の仕事となる。又絵の練習法も線による表現が中心となっている。事実絵に対する力量は線の引き方一つで解ると言えるほどである。

又面で表現するのが中心の西洋絵画に於いても輪郭や面と面との境界を先づ線で描くことが第一歩の仕事である。線で決定的な形を把握せずして面表現をすることもある(東洋絵画に於いても没骨法。刷払法といった面的表現を始めからする方法もある)しかしこの場合作者の頭の中には線を引いたと同じだけの計画と形態把握がなくては出来ぬことで唯具體的な線が画面に引かれなかったというに過ぎない。

このように線は形態把握の基本となるもの、形態表現の根幹であるということが言える。第三に現在流行している非具象表現においても勿論、抽象絵画においても線を引くこと以外にして絵画表現が成立しない。というのは、画面を分割し、構成するためには線を用いずしてその根底をなす骨組を考えると出来ないからである。又具象表現の絵画に於いても構図を定めるときは具象的なものの輪郭線と別に、構成のための線を考えずに構図を考へることはできない。即ち絵画の構成、即ち絵の組立てを考へるには線を抜いては出来ないということで、線は画面構成上からも基礎となっているものである。

そこで今回とり上げて考えてみたいのは画面構成上の線ではなしに形態描写上の線についてである。即ち形態描写を線で行う場合「どのような線を用いるか」その「理由はどんな点であろうか」又線描写を行う上から「どんな線が最もよいか」といった事を考えてみたいと思う。尚形態描写が進むにつれて面的な表現によって奥行とか立体感を出そうとするようになるがこの場合「どんな方法を取るのが自然であろうか」といったことをも考へ

て行きたいと思う。というのは自分が今これらのことを考えるために取り上げたのは中学生である。その理由は自分が中学生を直接教えていること、第二に中学生は図画が必須科目であらゆる性格の者がはいつていること。(高校、大学では選択となるため少くも図画を他の芸能より好むものが多くなって来る)。第三には中学生は大人と子供の中間に位するため、心理的に複雑な段階にある。それが画面の上では、主観より客観へ、平面描写から立体描写へ移行しようとする段階にあるようである。そんな意味から特に中学生の写生の線描を対象としたのである。

## 2. 実施方法

こゝに知りたいことの第一は、最も自然に近い状態ではどのような線が出来るかという問題である。しかしここに注意せねばならないことは、西日本、特に大阪を中心として、生徒の描画態度をよくする目的で、俗にいう「一本線描法」といわれる描法を奨励している。この描法や事態の良し悪しは別として、一つの描法が教えられることによって生徒の描線方向が一つの方向にむけられては、自然な姿を見ることが出来ないかもしれない。そのためいまだ一度も一本線描法の行われていないクラスに放任に近い状態で人物描写をしてもらった。しかし一つの中学校へは数校の小学生が集まるため、あるいはそのクラスの中に少数は一本線描法を過去において習ったことがある生徒がいることは一応頭においておく必要がある。

さて本文を作るために御願したのは大阪市大淀区の豊崎中学校一年生二クラスで、これら二組を自習に近い状態において人物描写をさせた。勿論鉛筆で線描きするようには命じた。しかし線の種類や描方については何も言わない。描画がはじまったらなるべく教官は教室から去るようにした。

## 3. 一応の結果

作品は109点。しかしその中には真面目に描こうという意志の全然認められない作品、又途中から描写態度が非常に崩れた作品は考察の対象から除外した。除外された数は16点であった。故に考察対象は93点であった。

## 4. 線描の四形態

第一グループ……輪郭線が相当長い一本の線で描かれて、しかもその線に強弱、遅速の変化なきものでその数は34点

第二グループ……輪郭線が短い線の繰返し、又は連続で出来ているもので48点

第三グループ……線描を命ぜられているため線で描こうとはしているが、無意識のうちに対象を面として表現しようとする意志が相当にうかゞえるもの3点

第四グループ……以上の分類に簡単にされることの出来ない作品で、途中甚だしく描画態度が変わって描法が混用されているものなどでその数は8点。

となったこれらを便宜上名付けて第一グループを「無変化線」第二グループを「集合線」第三グループを「面傾向描」第四グループを「混合線」となづけることにする。

## 5. 無変化線の分類

無変化線はその性質の上から二種に大別するのが便利なように考えられる。即ち非写実線と写実線である。この非写実線というのは勿論これの作品は写生を命じて描かせたものであるから当然写実的な線になるべきであるが、写生であって、目前に対象物があるにもかかわらず、自分の頭の中にある一定の形態、又は一定の描画方式にのみ依存して、「見

る働き」の全然欠けているものを指す。このような作品の線は見る働きの加わった写実線と、はっきり区別出来る。この分類に於いて写実線は25点、非写実線は11点となる。しかもこの非写実的線も又二種類に区別出来る。その一つは精神年齢が低い為か、或は過去に於ける描画訓練の不足に起因するかによって未だに幼児的特質から余りにも抜け切らない作品で幼稚園級の単純な作品の線をさす。

今一つは、「絵本」の描法や形態、又は「塗り絵」の描法やその形態、或は長上の人から教わった表現方法や表現形式を覚え込んで、それらの既成の形態及び手法から抜けられず、そのため眼前にあるモデルもその形態とその方式に入れて表現せざるを得ない絵を描く生徒の線形態である。この二種の線の名を仮りに、「幼児線」(A図)と「概念線」(B図)ということにする。かくして幼児線は3点、概念線は8点を数えた。

写実的な線のグループに選入った作品も又二種に大別するのが便利である。その一つは鉛筆が紙を圧する力が弱く、そして速力の比較的、速かな軽い線で描かれているものと、今一つは鉛筆が紙を圧する力が強くしかも速力の遅い重い線である。前者を「軽線」(C図)後者(D図)を「重線」と仮名することにする。軽線の数は9点、重線の数は14点であった。

A 図

B 図

C 図

D 図



幼児線

概念線

軽線

重線

## 6. 集合線の分類

次に集合線の作品は、無変化線と異なり、多かれ少なかれ対象に似さそうという意志の表われが結果として集合線を作らすのであるから、非写実的な線は見あたらないわけである。しかし、この線も一応四種に分類することが出来る。

その一つは、案外無神経に鉛筆を走らせながら輪郭を描いて行くのであるが、間違っただ線や気に入らない線が出来た時はその横に又線を入れて輪郭を作り直しながら大胆に描いて行くもので、速力は速く、重圧も強い。これを「反復線」(E図)となづける。14点

第二は鉛筆の這入口に力がこもって進むに従って漸次力を抜いて流すか、跳ねるようにして鉛筆を紙から離すもので丁度、釘の頭に鼠の尾をつけたような線の集合によって対象を描くものである(F図)これを「運動線」と名づける。9点

第三のものは、再現的に正確を期して形の間違うことを極度に恐れ、おそるおそる物を見ながら見た分だけずつ短い線をつぎたして描いているもので、線の速力は普通で、紙を圧する力ははじめやゝ強く、漸次弱くなって鉛筆を紙より離す。あたかも運動線を小さく且つ、臆病にして特に輪郭にこだわりつく描いた感じのものでこれは12点数えられた。

(G図)これを「遅疑線」と名付けておく。

第四は、線で描いているというより点をつなぎ合せて形を写すといった方がよいような描法で輪郭上のポイント、ポイントをごく短距離に定めてつなぎ合わせて行く。線は甚だ

短かく圧力は弱く、速力は遅く写形に極力気を配っている。線そのものは前二者のように圧力の変化や速力の変化はなく無変化の線が極く短かく、軽く弱いものが集合して出来ているものでその数は13点であった。(H図)「留滞線」と名付けることにする。

#### 7. 「面傾向描」と「混合線」についての見解

「面傾向描」はそれ自体線描から離れていることを意味する。そのためこの描法について後々取上げねばならなくなるであろうが、線そのものの考察から一応除外することにする。又「混合線」もはっきり線描形が把握出来ないために集められたグループであるのでこれも線の形態研究から除外することにする。

E 図



反復線

F 図



運動線

G 図



遲疑線

H 図



留滞線

こゝで一応線の分類が終ったので解りやすく表にして見ると次の如くなる。

線形態		実数	男	女	百分比	
無変化線	1 軽線	9	3	6	9.6	24.7
	2 重線	14	—	—	15.1	
	3 幼児線	3	3	0	3.2	11.8
	4 概念線	8	1	7	8.6	
集合線	5 反復線	14	12	2	15.1	51.6
	6 運動線	9	3	6	9.6	
	7 遲疑線	12	3	9	12.9	
	8 留滞線	13	3	10	14.0	63.8
	9 面傾向描	3	3	0	3.2	
	10 混合線	8	3	5	8.6	
除外作品		16	—	—		

#### 8. 各種の線の持つ感情

表の順に線の感情を概略述べることは次の問題解決の上から便利であると思われるので、参考図を見ながら読んでもらえば幸である。

(1) 軽線…前にも述べたように圧力が少く、速度は早く描かれた線であるから一見、軽快な感じがする。そして抵抗が非常に弱い。というのは描き易い線である。その為特徴は方向の変化は自由であるが軽く早いという処から惰勢に流され厳格な形を迫る上からは誤り易いこと。又速力の早いために目で見ると先にも筆が走るという欠点も出てくる。その反面線が軽快で方向が自由なため見て感じのよ

いところがある。そして線自体の美しさが対象とは別に感ぜられるということである。

(2) 重線……この線は圧力が甚だ大きいこと、速力が遅いことが特徴であるから、線感情は当然、堅実、重厚、甚だ強い抵抗が感じられる。そして大きい圧力のために方向の自由性は制限されているような感じを受ける。しかしその反面、線が対象と遊離せず、ものそのものとなり切るため質感が出易い。又速度がおそく圧力が大で手に対する抵抗が大きいので見てかく上からは甚だ都合がよい。特に圧力の大きいことはその方に力を集中する必要があるので描くことに専念出来る特徴がある。

(3) 幼児線……多く、速力は早く圧力は中程度か又は重い。そして何の屈たくもなく伸び伸びしている。そして何か親しみ易い暖か味がある。けれど形態はおよそ対象と遠くはなれ省略され、単純化され、無責任な形態把握になっている。

(4) 概念線……一般に上手な絵を描く子供と思われているものに多い。自分がよいと思った絵を覚え込んでその絵のように描こうと非常な努力をしている。そのため線は多く圧力は強く、速力は遅い。そんな点は重線に近い感じを受けるが線がこりかたまって弾力なく、堅く冷い感じがする。即ち絵画的な線というより幾何学的な線のように生命を感じない。というのはこのような絵を描く子供は見たものから受けた感動よりも過去に見た絵にしようとしている点で、子供がよいと思う絵（多くはその両親も上手と思っている絵）はいかにも絵らしくまとまっていること。プロポーションの正しいことなど形式的な点にある。しかしほんとうに子供にとって大切なことは、自分が見て感じたことを自分の力で表現する子供自身の自主性と、感覚の養成にあるのであるから子供がこのような描法におち入らぬよう特に注意すると共に早く自分の力で物を見、表現するようにしてやる必要があるわけである。

(5) 反復線……圧力も割合強く、速力も早い線が交叉し合って形を作っていくので、どうしても騒がしさが目立ち、神経の太い感じを受ける。しかし多く線が重ねられるところは形態がむつかしく簡単に正確な線が引けない場所である。又長い線を用いない理由は、見ておぼえられる範囲はごくわずかの距離でしかない。その為、長い線を引くことが出来ぬ点に起因している場合が多い。そんなわけであるから例え神経は太くとも見て描いていることはたしかである。それにしても正確度、即ち見方の厳格さからはおおよそそのところへ線を引く無責任さはまぬがれない。

(6) 運動線……前にも述べたように、鉛筆の這入口に圧力が強くあとは力を抜いて流すように圧力が少なくなって行く。そして速力が早い。ということは対象を見て自信のあるところ、それが釘の頭のようになったところである。そのあとはこの方向と思う方向に手を走らすのであるからこの線は決して対象を忠実に追う線とはならない。それだけに形に対する自信がないために圧力も抜けてくるわけであるがその反面、線が線のみとして運動感のあるものとなる。又こちらの方だと感じて手を走らすだけにどこか作者の感情の動きが線の上へあらわれて個性的な感覚も出る長所もある。

(7) 遅疑線……前に述べた運動線を臆病に且つ、小さくしたものと考えられる。そこで感情的に極めて弱々しいものを感じる。しかしどこまでも対象に忠実になろうとする気持ちをもっていること。又そのためあまり見方が部分的に過ぎ全体に目が行きわたらぬこと。ましがわぬようにしようと思過ぎるため自由な気分が働かぬ欠点が考えられる。しかし一面小さいとは言いつゝも筆を流すところに何か無責任な一面が考えられる。

(8) 留滞線……これも臆病なところは遅疑線に通ずる。しかしおとなしくポイント、ポイントをおさえて行くだけ、流してごまかす所が少ないだけに真面目さは優る。しかしどこまでも弱々しい感情が支配している。

これら集合線に通ずるものは決定的な線を引くことをおそれ、それに近い線で大体から対象をつかもうという所で、そこに自信のなさが感ぜられるところである。

## 9. 表について感ぜられることども

写生を命ぜられ、自らも写生をしようと思しながら写生出来ない子供が93人中11ある。

(幼児線3人、概念線8人)即ち中学生の内10%は写生態度が全然出来ていないことを意味している。尚不真面目な作品であった為に研究対策から除外された16点は作画態度の出来ていない生徒である。これらもふくめると109人中27人、25%の生徒が写生態度を失なっていることになる。しかも幼児線は男子のみ、又表に出さなかったが除外作品も男である。概念線は女子が絶対多数であることは、男子生徒の中には絵に対して無関心な者が多いことを示す。又女子生徒は上手に描こうという意識が多すぎたり、又長上の作品にとらわれ、それによつて、自らの手で見ることを恐れ、又はそのような自主性に欠ける者が多いことを示しているようである。

次に無変化線を用いる者のうち写実的無変化線を用いた者の数は23名、25%である。それに対し、集合線を用いた者は48名、52%である。しかしここで考えられることは、一応除外した混合線も集合線の一つであり、又面傾向描法の絵も集合線によって面的な感じを表現しているものであるから、これらも一応集合線の分類へ入れても少しも不都合でないと考えられる。そう考えると集合線を用いる生徒数は59名、64%となる。このことから絵描写生には集合線使用が絶対多数という結果が生れる。ということは線描写生に於いては集合線を用いるのが描き易いということを示しているようである。

その理由を考えてみると、目はよく見るときどうしても一点に止まる。しかし長い線を引くには対象の輪郭を長く見てその形を覚えなくてはならない。それが至難の技である。そのようなことから正しい形を写そうと思えばどうしても短い線の集合で形を造るようになる。その最たるものが「留滞線」であると思われる。(但しこれは中学生より小さい年齢を附記としてのことである)

これで、第一の「どんな線を用いるか」その「理由はどんな点か」という問題にある程度の答が出来たように思われる。

10. 次の問題は「どんな線描が最も線描写に適当か」という問題である。それは前に述べた線の性質を考えることによつて一応の答が出ると思う。

先づ「幼児線」と「概念線」は非写実線であるためこの問題から除外される。

次に「面傾向描」は線描の話からやはり除外される。更に「混合線」は多数の傾向線が雑居しているためにこれも研究対象からははずす方が便利と思える。このように考えてくると無変化線では「重線」と「軽線」、集合線では「反復線」「運動線」「遅疑線」「留滞線」の六者について考えればよいことになる。そこでこれらについて考えたいと思うが前の線の感情のところと重複するところが多いかも知れないが一応話をすゝめる。

A 反復線—何らこだわるところもなく自由に線を生んで行くところは積極的な働きを見ることが出来て気持はよいが、問題は「どれほどたしかに対象を見ているか」という点に疑問が残る。即ち見る働きより、描く働きが先走っているところに見足らぬところが出来てくる。しかも見たらぬまゝに描き進めてそこに何らものたりなきを感じなくなる点も又おそろしいところである。というのは強い線が画面に多く生れ一応絵としてまとまってしまうからで、下手をすると「見て描く」ことより「作る」方に心が働く結果を生じる。この不十分な見方が不十分と感じなくなることは人間として粗雑なげやりの仕事で終わってしまう性格を形造ることになりはしないか。このような意味から先走った反復線は確信をもって積極的に仕事をする態度を養う上からは全幅の賛成はしかねるのである。

B 運動線—この線も反復線同様非常な積極性を感じる。この描画態度は甚だ結構であるしかし、ある一点をきめて強く打込んでそのあとは流して行くのであるから線について始めから終りまで責任を以て引いていない。即ち形を十分見極めずして勢に流して線を



作る一面がある。この流し方は反復線とは異なるところがあるけれども無責任な線であるという点では同一のように思える。そのような意味からやはり全ぶくの賛成はしかねるのである。しかし反面自分の気分によって線が作られるために描いた人の感情や性格が出るため線が生々として絵としておもしろい結果が生れる。それが又中学生の描写としておもしろいところでもある。即ち実力以上の線が生れ、いつか自分の見る働きや描く働きを実力以上にごまかされる点である。

遅疑線＝形の正確さを期するところから、見るポイントを運動線より多くしていて時には見る点が重複するような線であるから、形の確認については、前二者に優る点があるように思われる。しかし問題となることは積極性のないところにある。あやふやな心で線を引きしていることである。これは自信の不足をあらわしている。このような点、ずぼらな見方であり、主観的な描線であったが、反復線、運動線には一つの自信があったこの自信が絵に積極的な描画態度が伺われていたがこの大切な自信の不足。即ち自主的な働きかけの不足がこの描線のあきたりないものとなつてのこる。次に問題となる点は小さなポイント、ポイントで区切って形を見ることは大きな動き、全体の勢動を失う原因にもなる。

留滞線＝遅疑線と言ったことはそのまま留滞線にあてはまってくる。唯、留滞線は打込んで流す部分が全然なく、おずおずと引かれた無変化の線が非常に或は極端に「短い」

ことにある。その点、引いた線、そのものは無責任な処は少しもない線であるかも知れない。しかし結局は自信の不足と全体の把握に問題が残るということになる。そして全体の動勢のつかみやすい長い線を見ると無変化線が問題の中にはいつてくる。

軽線＝以上の点からなるべく長い線を用いる軽線は圧力が少なく、速力が速いので実に運動が自由である。そのような上から線描写生にはうってつけのように考えられるが問題は見る働きに十分な修練のない中学生であることである。即ち見る働きより描く働きが先走ることが的確なる形を把握する邪魔となることはあたかも反復線と同様であるそして確信ある形を作る前に絵が出来上るところに内容の空虚さが出来る。

重線＝軽線の見る働きの不十分を補うためにはどうしても筆の速力をおそくしなくてはならない。見たところだけを描いて行くために描く働きが見る働きのあとになるようにせねばならない。次に確信をもって描くためには力強い線を引かす必要があるので強く紙を圧するようにする。この力を入れておさえることは今言ったこと以外に非常に大切なことがある。それは体の中の力が鉛筆の先に集中する。この生理的な集中は自然と精神の集中を来す。おそらく写生的線描に於いて対象を確実に見極めることは、描く者がその見る働きを通して対象になりきることであり、その見る働きだけ集中的に表現することは表現と対象が一つになることである。この力を入れることの中に表現の上から最も大切な精神の集中が出来るところにこの描線の最大の良点がある。しかしこの描法は生徒に取っては最も苦しい方法かも知れない。力が入る。厳格に見なければならぬ。描かれる線は強く濃く描きなほしがきかない。しかも少しもごまかしが出来ない。

そして味が出ない。自分の実力がそのまま表われてくる。しかしそこがこの描法をもって人格形成に最もよいと思われる点である。しかしそのような心配があつてはよい絵は出来ないように思うかも知れないが実際思い切ってこの描法をもって描くときは必ず立派な作品が出来上る。その理由は生徒達が背水陣においやられるからである。描く働きがせっぱつまって心が集中されるからである。而してこの方法が絵を作る上からも人間

を作る上から最もよいものであることは、大阪地方を中心とした図画教育にあらわれて来ている。そしてこれを通して効果を上げた学校は実に沢山ある。この点理論付けより実績をもって証明出来ることでもある。

## 11. 美術史上にあらわれた線との関係

以上によって線描写生に於いて重線を最良のものときめたことは美術史上にも言えることである。

最も幼稚であると考えられる「幼児線」に相当する線は、大阪府下高井田古墳内の壁に陰刻によって描かれた壁画に見ることが出来る。図は船にのりて岸に近づき、錨を下して上陸する様子がかゝれているが、その人物の顔の表情、その服装、又船、錨、櫂など何のこだわりもない天真らんまんな線で、形の伝達を意に解しない非写実的線描である。ある意味では、象徴的な取扱いにすぎない。歴史的に、又は純真な絵としては値はあるが果して写実ということを中心とすればおよそかけはなれた存在である。

次に「概念線」にあった描法は「エトルリヤ」に残る墓の壁画である。この壁画は高井田のものとは異なり堂々たる写実的壁画である。しかし、くわしく見ると人物の頭と肩のつながり、馬のひずめのデッサンに十分な内容をつかまず、形だけをまねた空虚な線が見られる。これはエトルリヤ人が文化的に十分な力のないうちに、ギリシヤ人の高い文化をうけ、その外形だけをまねたところから出て来たいわゆる概念線である。そこには写実にてっした実がないため、空虚な幾何学的な冷い線になりおわってしまっている。このような線は高い美術に接した文化の低い民族によくあらわれる。

第三に軽線である。一般に中国に於いてはこのような線を「高古遊系描」と名づけている。そしてこの代表的人物は東晋の顧愷之である。勿論顧愷之の作品は神品であって、とやかくわれわれの言うべきものではない。しかし一般から見て、遊系描が線として最も基本であり又、古いものと考えられている故に「高古」と名付けられるところである。顧愷之がいかに物を見、それに対する修行の深かったことは当然で走る線でも物の本体を把握したことはわかる、そしてこの描線は後世の常軌となった。しかし顧愷之をもって写実に終始した人とは言えない。その点唐をへて宋に至る頃、写実に徹底した作家が出た、それは韓幹である。彼の馬の絵は写実に徹していた。そして自らもそれを自負した人である。その韓幹が用いた筆法は一般に「鉄線描」といわれるものである。圧力強く筆速おそいもので線の太い細いのないものであつた。これを思うに写実にはこの鉄線描が最も適していることは、美術の歴史の上からも証明されるように思う。

しかしこの様な無変化に対し圧力の大小、速力の遅速を加えた集合線的描法もあった。これは呉道玄が祖といわれている。呉道玄のねらいの一つは写形にあつたであろう。しかし彼はそれ以上に精神面を重んじ、写意的なものを望んでいた。そしてその描法が発達して宋元時代にはいよいよ写意面の高揚となり、集会的な線で描かれるようになる。その代表は院体の絵画である。馬遠、或は夏珪、榮楷がその代表である。しかしそのような時代となっても写形に重点をおく作家は鉄線描を用いた。舜銭挙はその代表であろう。この様に考えてみると、こと写実に関しては無変化重線が最も妥当な線であることは知られると思う。

## 12. 東洋画の練習方法

又東洋画の練習の第一歩は、やはり形を正しく線描する。そしてそれに色を塗って行く

方法が初歩となる。一般に拘勒法という。その時に用いる線はどこまでも形の正確さを追う、ゆっくりした太い細いのない、よく紙を圧した線を用いる。決して没骨法的な方法や、抑揚のある線を用いることは禁ぜられる。あたかも字を練習するのに楷書から遣いのようなものである。それと中学生の描写とは同日に論ずることは出来ないまでも形の正確さと確信ある筆法、態度を作る上から相い似た処があることがわかる。この基本態度と練習を重ねて来た上で自由な写意的な描法に進むことは個人の自由であらうけれど、基本的人格養成の中学校図画の描写態度としてはここに重点をおいて進めるべきではなからうか。

### 13. 立体的表現とのつながり

過去に於いて立体的表現を教えるには先ず明暗陰影を描くことを教えた。しかも形を確実にあらわすためには、その明暗を面として見ることを教えていたわけである。しかし、線描写的な見方の強い日本のこどもが果して無理なく、この面的な見方に入ることが出来るであろうかという問題である。これが十分理解されていないことは調子のはずれた、色のよごれた、時としては黒のみを用いてつけている影の描法が明確に物語っているようである。そんな疑問に対して何かの示唆がほしいので線描ときめられながら面的表現をしかけている作品をさがして見た。勿論、はじめに「面傾向描」として三枚の作品を区別したが、ていねいに見て行くと線描的な表現をしていながら面として、又は立体感を出そうとした働きが見られる作品がある。それでその作品の数をしらべてみた。

そうすると次の様な結果を得た。

軽線使用作品中に	1点	重線使用作品中に	3点
反復線使用作品中に	3点	運動線使用作品中に	3点
遅疑線使用作品中に	1点	留滞線使用作品中に	3点

でその他に面傾向描が3点で、計17点は立体感表現に心が働いていることを知る。

次にこれらの作品はいかなる方法で立体感を出そうとしているか、その方法とその方法を使用した数をしらべると

- A 陰影に類するものを用いて、陰をくらくぬりつぶすようにして立体を説明せんとするもので、その数は8点に認められた。
- B 面のひろがりを表はそうとして影とは余り関係をもたぬまゝに面のひろがりをおらわそうとして頬などに斜線を入れたりするもので、その数は2点。
- C 線の繰り返えして、その部分が凹んでいることを表現しようとするもので、口元の凹み鼻の凹みなどに線の繰返しを加えて、そこが凹んでいることを表現するもので、本図Eの運動線の絵に見える左の頭のところに入れられた数本の線のくりかえしは、頭とあごとの奥行の差を出そうとしたもので、この方法を用いる絵は11点あった。

この合計は21点となり、17点より多いがそれは同一の絵の中に異った方法が取り入れられているからである。

さて以上のことから奥行を自然にあらわす方法は、Cの方法が最も近いように思われる。しかしそうすることは、前に述べた重線の描画態度と大いに異なるのでどのように連絡を取るかその他多くの問題が残る。そうすると改めて今迄の面的方法を押しつけるかのような点については未解決な部分が多いが、それは今後の問題にゆずって今度は筆をおくことにする。

# 本校生徒の悩みに対する一考察

新 堂 庄 二

重 松 卓 未

## 1. 悩みについて

青年期の本質的な特徴は、自我の発見である。今までの関心は外にばかりむけられ、その好奇心は、下界のすみずみまでも究めつくそうとしたが、それが内に向けられることによって、新しく自己内界の価値を発見しようとする。こゝに一つの価値転換が行われる。今までは成人から与えられるものは、すなおに受けいれられ、成人の価値判断は、なんの疑いもなしに承認されてきたが、それらによって権威づけられていた価値に対し、疑惑を抱き、判断をするようになる。そこで青年は反抗する。反抗することによつて、親・教師への依存的な存在から脱却しようとする。ここに青年は一個の独立な人格として誕生する。誕生には又危険も多分に含まれている。青年の不良化や自殺などの機会がひそんでいる。我々は青年たちに、この危機をのりこえて進む勇気と努力と知性を期待し、彼等の発展のためにも、社会の向上のためにも情熱を注ぎ得るよう希望を持たせねばならぬ。

この反抗と、それにとまらざる苦悩とを理解することは、我々にとって極めて重要なことといえる。

さて悩みといっても、勉学の悩み、家庭の悩み、身体上の悩み、将来の悩み等々さまざまな悩みがある。しかし悩みというのは自分で考えるこゝろありたい姿、こゝろしたいという行為と、今現在にある実際の姿・行為との間の距離に気付くことである。そして悩むことはその距離を何とかして埋めて、こゝろありたい姿・行為にすこしでも近づこうとする努力である。我々人間は自分独りが生活して行くのではなく、社会の一員として生活して行く。だから我々の欲求がすべて思うままに満足されて行くということはない。人間である以上だれでも悩みが生れてくる。悩むが故に人間であるともいえるだろう。

我々は生徒の悩みを知り、それを克服しようと努力するところに生活の意義を発見するものである。こゝにささやかで不完全ではあるが本校生徒の悩みの実態を考察し、明日のよりよい学園創造の一助としたいものである。

## 2. 本校と生徒の概況及び調査方法

### 調査の時期

7月上旬の火曜日で、期末テストを一週間後に控えて、勉学にも比較的是げみだしてきた時期である。

### 調査の対象

第2学年 第1学年男女合計 175名 (全校生徒)

第2学年 男女54名 女子28名

第1学年 男子59名 女子34名

## 地域及び学校の特徴

大阪市の南部繁華街天王寺の近くにあるが、生徒の住居は2年生は大阪市内一円、1年生は大阪市内を中心に府下南部、和歌山県、奈良県に散在している。保護者は会社員、医者、公務員など比較的社会経済的環境の高い者が多い。生徒は附属中学よりの進学者が多く(2年は9割、1年は8割を占めている)高校進学の時もはげしい選抜試験を経てきており、全員が大学への進学を希望している。但し2年は1年よりやや質的に劣るものがある。男女共学ではあるが男女の比は上記の通りである。各学年2学級編成で、全日制・普通課程である。

## 調査に対する生徒の反応

調査については前の週末に予告し、ホームルームにおいて行い、教育実習生各クラス3人の監督により実施し、生徒は無記名でもあり気軽に考えたものと思われる。

## 実施方法上の反省

- ・調査の予告をした方がよかった。
- ・ホームルームにおいて実施するのがよかった。
- ・高1、高2、高3と揃っている方がよりよい。(本校は最高学年は高2)
- ・男、女の数及び7分野における各項目数は同じ数にした方がよい。

## 項目の理解

- ・実施した項目についての質問はなかった。

## 項目の検討

- ・応答数の多い項目

ひん数の多いもののベストテンは次のようになる。

順位	ひん数	項目番号	項 目	領 域
1	103	IV 3	希望する大学へ入学する事が出来るかどうか不安である	将来、進学
2	97	I 6	不得意学科があつて困っている	勉強上、得意不得意
3	94	III 7	人生に目的がないので悩んでいる	生活態度
4	93	I 7	ある科目の基礎が出来てないので困っている	勉強上、学習態度
5	90	I 14	予定通りに勉強が進まないで困る	勉強上、勉強方法
6	85	I 3	効果的な勉強の仕方が分からないので困る	"、"
7	80	I 10	勉強に身が入らないので困っている	"、興味意欲
8	70	V 1	何事でも相談しやすい信頼できる教師が少ないので困っている	学校及び教師
9	68	VII 31	だれも自分を理解してくれないと思つて悩んでいる	自分の問題
10	63	V 3	学校側は生徒の要求にあまり無関心なので困っている	学校及び教師

勉強上の問題が多く半数を占める。しかしトップは何とんでも「大学入試に対する不安」である。

不得意学科の所では数学、英語、物理、国語の順になっている

人生についての悩みが多いのも注目すべき点である

2年生と1年生を比較して、特に差異が大きくみられるもの

- 2年「試験が不公平なので困っている」 }  
 "「ある教師はあまりにも厳格なので困っている」 } 学校及び教師に関する問題  
 "「あまりに規約や規則が多すぎるので困っている」 }  
 "「実力が伴わないのに進級するので悩んでいる」 } 勉強上の問題  
 "「ある科目の基礎ができていないので困っている」 }  
 "「人生に目的がなくて悩んでいる」 } 生活態度の問題  
 "「教養をもっと高めたいが出来ないので困っている」 }  
 "「だれも自分を理解してくれないと思って悩んでいる」 } 自分の問題  
 "「希望する大学へ入学出来るかどうか不安である。」 } 将来の問題
- 1年「教生の先生の授業があるので困っている」 }  
 "「現在のクラス分けに悩んでいる」 } 学校及び教師に関する問題

・応答数の少ない項目

ひん数の少ない項目をあげると次のようになる。

順位	ひん数	項目番号	項 目	領 域
1	1	II 18	家族に目をかけてもらえないので困っている	家 庭 上
1	1	VII 29	体臭に悩んでいる	自分の問題
3	2	II 12	必要な本が買えなくて困る	家 庭 上
3	2	II 19	家業が社会的に低いので恥しい	"
5	3	II 8	両親又は片親がなくて困る	"
5	3	II 16	家庭が不和なので困る	"
5	3	IV 4	いやな家業につかねばならないので困っている	将 来
8	4	VI 3	異性との交際に家族の理解がなくて困っている	交 友
8	4	VI 6	友人から嫌われて困っている	"
8	4	II 4	兄弟に愛情がないので悩んでいる	家 庭 上

家庭上の問題が殆んど見られない。それから交友関係についての悩みも少ないということ、家庭的に恵まれていて、交友関係もよいという事になる。自分の問題でも身体的なものの中で生理的なものには欠陥がないものと見受けられる。

### 3. 調査結果とその考察

別表の用紙により実施した。各項目に対する応答数は次の通りであった。

#### ① 全校項目番号応答数

I	1年計	2年	9	18	34	16	2	19	35	16	11	3	7	4	20	17	39	22	8	3	9	6	
1	23	60	37	10	37	80	43	3	3	7	4	12	1	2	1	III			9	12	26	14	
2	5	16	11	11	25	14	4	1	4	3	13	6	9	3	1	23	48	25	10	8	29	21	
3	39	85	46	12	25	57	32	5	1	9	8	14	13	17	4	2	16	35	19	11	17	39	22
4	25	47	22	13	28	55	27	6	4	13	9	15	11	19	8	3	4	12	8	12	9	26	17
5	6	18	12	14	47	90	43	7	4	10	6	16	2	3	1	4	21	47	26	13	19	32	13
6	50	97	47	15	10	31	21	8	3	3	17	3	8	5	5	24	52	28	14	10	22	12	
7	37	93	56	II				9	7	14	7	18	1	1	6	14	24	10	15	9	20	11	
8	22	45	23	1	3	13	10	10	2	6	4	49	2	2	7	10	94	84	16	8	17	9	

III	つき	5	4	15	11	19	2	28	8	2	9	14	5	16	20	43	23	30	12	18	6				
17	20	45	25	6	22	38	16	VI		3	9	19	10	17	5	11	6	31	12	68	56				
IV		7	2	10	8	1	6	6	0	4	12	19	17	18	8	16	8	32	5	68	8				
1	7	14	7	8	18	47	27	2	3	7	4	5	6	17	11	19	4	10	6	33	16	38	22		
2	6	12	6	9	22	53	13	3	3	4	1	6	14	29	15	20	13	25	12	34	8	15	7		
3	42	103	61	10	10	30	20	4	12	26	14	7	12	27	15	21	24	41	17	35	14	29	15		
4	1	3	2	11	18	42	24	5	8	16	8	8	35	62	27	22	8	23	15	36	1	6	5		
5	25	43	18	12	16	38	22	6	2	4	2	9	8	15	7	23	6	14	8	37	11	22	11		
6	4	5	1	13	2	18	16	7	4	6	2	10	22	32	10	24	6	12	6	38	3	9	6		
V		14	3	19	16	8	19	37	18	8	19	37	18	11	10	25	15	25	8	19	11	39	6	12	6
1	32	70	33	15	10	19	9	9	6	17	11	12	5	10	5	26	7	20	13	40	12	20	8		
2	7	44	37	16	10	7	27	10	9	15	6	13	8	15	7	27	7	31	14	41	8	16	8		
3	30	63	33	17	15	42	27	VII				14	27	45	18	28	6	9	3	42	9	18	9		
4	20	50	30	18	7	28	21	1	12	19	7	15	12	19	7	29	0	1	1	43	6	6	0		

これを領域別にみると、次の様になり（小数で示したものは割合を表わす数値）グラフ

領 域	◎	○	計
1 勉 強 上	113 7.53	720 41.33	833 48.86
2 家 庭 上	18 0.9	203 10.15	221 11.05
3 生 活 態 度	51 3	476 28	527 31
4 将 来	14 2.33	163 27.16	177 29.49
5 学 校 及 び 教 師	140 7	559 27.95	599 34.95
6 交 友 関 係	16 1.6	125 12.5	141 14.1
7 自 分 の 事	57 13.57	810 19.28	867 32.86

で示すと図1の様になった。この変化を見て図2と比較すると次の様に考えられる。

本校ではトップは勉強上の問題である。これは学校の歴史が新しいので、全員がその様な事に日夜悩んでいるからであろう。他校の傾向をみると自分の問題を第一に考えている様で、本校とはやゝ異なるが、本校のそれと比較するとやゝ似た点も見られる。即ち他高では3年生のみを対象としており、次第に自己を内省して悩む様になったと考えられる。

又、家庭上、交友関係の問題については

特に少ないというのは、附属高校の一つの特色でこの点恵まれている。

学 年 別 (2年全)

(1年全)

領 域	◎	○	計	◎	○	計
1 勉 強 上	54 4.6	396 26.4	450 31	59 3.93	324 21.6	483 25.53
2 家 庭 上	5 0.25	116 6.8	121 6.05	13 0.65	87 4.35	100 5.00
3 生 活 態 度	16 0.94	284 16.7	300 17.64	35 2.05	192 11.3	227 13.35
4 将 来	10 1.66	85 14.16	95 15.82	4 0.66	78 18	82 18.66
5 学 校 及 び 教 師	96 4.8	356 17.8	452 22.6	44 2.2	203 10.15	247 12.35

6 文友関係	12 1.2	60 6	72 7.2	4 0.4	65 6.5	69 6.9
7 自分の事	31 0.74	390 8.29	421 10.02	26 0.62	420 10	446 10.62

これをグラフで見ると図3、図4のとおりである。トップは勿論勉強上の問題であるが2年生は次が学校と教師の問題であり、1年生は将来の問題になっている。2年生は入学が他の公立高校にくらべておくれた事を大変気にしており、創立当時の専任4教官が附属中学から移動した事に対して、親しみはさる事ながら、相当気にしているらしい。勿論、大学教官などの講師も多数あるので一概には云えないが、他高校へ行くと全然知らない教官ばかりで、講義になれるまでは時間もかかるが、とにかく上級へきたという感じがするらしい。しかし1年生はその点あまり気にしていないので、将来はこの様な悩みは少なくなることだろう。1年生には将来をめざして通学に1時間半以上もかかる和歌山県から数名もきており、大阪府下のすべてから、しかも近畿の各府県は勿論、東京や九州などからも受験生がある位で、特に将来の問題がクローズアップされてくるものだろう。

③ 男女別 (男子) (女子)

領域	◎	○	計	◎	○	計
1 勉強上	42 39 平均 5.4	193 293 32.4	235 332 37.8	17 15 2.13	131 103 15.6	148 118 17.73
2 家庭上	12 3 平均 0.75	49 103 7.6	61 106 8.35	1 2 0.15	38 13 2.55	39 33 2.7
3 生活態度	21 12 平均 1.94	111 227 19.88	132 239 21.82	14 4 1.06	81 57 8.11	95 61 9.17
4 将来	2 10 平均 2	52 60 18.66	54 70 20.66	2 0 0.33	26 25 8.5	28 25 8.83
5 学校及び教師	23 89 平均 6.22	122 252 20.77	145 341 26.99	21 7 1.55	81 104 10.27	102 111 11.82
6 文友関係	4 11 平均 1.5	46 53 9.9	50 64 11.4	0 1 0.1	19 7 1.6	19 8 1.7
7 自分の事	14 21 平均 0.83	251 303 13.43	265 324 14.26	12 10 0.52	169 87 5.95	181 97 6.62

図5、図6をみると、男子・女子とは人数にかなり差があるから、正確な事は分りにくいですが、大体同じ割合になっているようである。しかし就中、男子では特に学校教師に対する問題を重視し、女子ではかなり自分の問題が重要であるらしい。

図7、図8でも示されている如く附高第1期生(2年生)は特に学校・教師の問題で悩んでいるようで、これは創立初期の誕生及び発展に到るまでの学校の悩みでもあり、教師自身の悩みであるともいえる。

猶、この調査後夏期には修学旅行・補習・大学講師の特別講演・大学生(東大・京大・



阪大・神大)などの直接の勉強上の問題をきき、今までの学校・教師に対する悩みにもなにか解決の糸口がみえた様で、現在第2学期の学習に相当の真剣さがみられ、今までになく活潑な真面目な学習がなされつつあるようである。

今後できるだけこの様な調査をつづけ、自分自身の反省とし、日々の学校生活に生かして行きたいと思っている。

#### 参考文献

青年心理学	望月 衛 著	光 文 社
青年期の発達の課題	岡本 重雄 著	青年心理・第六巻第二号
青年の心理	依田 新 著	培 風 館
女子青年心理学	津 留 宏 著	
青年心理学	教師養成研究会	学 芸 図 書
青年心理学講座	牛島義友・桂広介・依田新編集	金子書房
青年期の探究	特別教育活動研究会編	大阪教育図書株式会社
生活指導	研究資料 1	文 部 省
Adolescence and Youth		Paul H. Landis

## 悩 み の 調 査

注意 これはテストではなくあなた方が当面しているいろいろな問題——例えば学習、交友関係、家庭生活、健康や性格などに関するもの——がどのようなものであるかの実態をみるための調査です。

やり方はこの調査の各項目に目を通し、あなたが現在悩んでいる問題を選び出し、次に述べる記入要領にしたがって書きこめばよいのです。

#### 記入要領

- (1) 調査の各項目をよく読み、自分が現在悩んでいる問題があればその番号に○をつけなさい。
- (2) 次にもう一度○をつけた各項目を読み返し、その中で特に悩まされている項目に◎をつけなさい。
- (3) これが終わったら、最後の質問に答え、あたえられた項目以外に悩んでいる問題があったら書きなさい。

#### I

1. 成績が悪くて困っている。
2. 教科書がむずかしいので困っている。
3. 効果的な勉強の仕方が分からなくて困っている。
4. 勉強以外のことばかりに気をとられて困っている。
5. 読書に興味がなくて困っている。
6. 不得意学科があって困っている。(科目名 )
7. ある科目の基礎ができていないので困っている。

8. 試験が気がかりで困っている。
9. クラスなどのディスカッションにしゃべることが出来なくて困っている。
10. 勉強に身が入らないので困っている。
11. 勉強の時間が足りなくて困っている。
12. 好きな書物を読む機会が少なくて困っている。
13. 自分自身をうまくことばで言い表わせなくて困っている。
14. 予定通りに勉強が進まないで困っている。
15. 課題が多くて困っている。

## II

1. 両親が自分のために犠牲になりすぎるので悩んでいる。
2. 親があまりにも自分に期待しすぎるので悩んでいる。
3. 両親の学歴が低いので恥ずかしい。
4. 兄弟に愛情がないので悩んでいる。
5. 家の収入が一定しないので不安である。
6. 近所の風紀が悪くて困っている。
7. 母親の理解がなくて困っている。
8. 両親または片親がなくて困っている。
9. 親になんでも隠さずに話せないで困っている。
10. 友人たちを家で快く迎えないで悩んでいる。
11. 自分の部屋がなくて困っている。
12. 必要な本が買えなくて困っている。
13. 父親の理解がなくて困っている。
14. 親との間に意見の衝突があって悩んでいる。
15. 家で子供扱いにされるので困っている。
16. 家庭が不和なので悩んでいる。
17. 一人っ子であるので困っている。
18. 家族に目をかけてもらえないで困っている。
19. 家業が社会的に低いので恥ずかしい。
20. 附近の騒音に悩まされて困っている。

## III

1. 世の中に矛盾が多すぎるので悩んでいる。
2. 現在の政治が不満でたまらない。
3. 信ぜられる宗教がなくて悩んでいる。
4. 余暇を上手に使えないで困っている。
5. 自分のやりたい事が多すぎるので困っている。
6. 自殺したいと思うことがある。
7. 人生に目的がないので悩んでいる。
8. 戦争が心配でたまらない。
9. これからの世の中が不安である。
10. 教養をもっと高めたいができないで困っている。

11. 自然に親しむ機会が少なすぎるので困っている。
12. 時々生れてこなければよかったと思うことがある。
13. 人間とはなんであるか分からなくなつて悩んでいる。
14. 思想問題に悩んでいる。
15. 既成道徳に不満をもっている。
16. 運動に加わる機会が少なすぎるので困っている。
17. 趣味に身を入れる機会がないので困っている。

#### IV

1. 進学のコースについて自分の希望と両親の意見が合わなくて困っている。
2. 進学か就職か迷っている。
3. 希望する大学へ入学することが出来るかどうか不安である。
4. いやな家業につかなければならぬので困っている。
5. どの方面に進学したらよいか分からなくて困っている。
6. 進学したくないのに周囲の人が進めて困っている。

#### V

1. 何事でも相談しやすい信頼できる教師が少ないので困っている。
2. ある教師はあまりにも厳格なので困っている。
3. 学校側は生徒の要求にあまりにも無関心なので困っている。
4. 学校の施設が不十分なので困っている。
5. 学校が進学準備を充分やってくれないので困っている。
6. 教師の講義がむずかしいので困っている。
7. 教師が勉強の努力をみとめてくれないので困っている。
8. 教師の講義が形式的で親しみにくいので困っている。
9. 教師と話合う機会が充分にないので困っている。
10. 指導力のある教師が少ないので困っている。
11. 教師が生徒の気持をくんでくれないので困っている。
12. クラスがつまらないので困っている。
13. あまりに規約や規則が多すぎるので困っている。
14. 試験が不公平なので困っている。
15. 学業と生徒会活動が両立しないので苦しんでいる。
16. テストが多くて困っている。
17. 成績の発表があるので困っている。
18. 実力が伴わないのに進級しているので悩んでいる。
19. 現在のクラス分けに対し悩んでいる。
20. 教生の先生の授業があるので困っている。

#### VI

1. 人にもてなくて困っている。
2. 悪友に誘われるので困っている。
3. 異性との交際に家族の理解がなくて困っている。
4. 異性に気を引かれて悩んでいる。(年下、同年、年上)

5. 同性の友達のことので悩んでいる。
6. 友人から嫌われて困っている。
7. 異性との交際を許してくれないので困っている。
8. 社交性がなくて困っている。
9. 親しい友達が出来なくて困っている。
10. 異性の友が得られないので悩んでいる。

次の質問に答えてください。

1. この調査項目以外にあなたが悩んでいる問題があったら、それを書いて下さい。
- 2 現在あなたが悩んでいる問題でなくともつけ加えた方がよいと思う項目があったらそれを書いて下さい。

## VII

1. やせすぎているので悩んでいる。
2. スタイルのよくない事で悩んでいる。
3. 身体的欠陥があるので困っている。
4. 時々気が遠くなりそうになったりめまいがすることがあって困っている。
5. 体が弱くて困っている。
6. 運動神経がにぶく運動が不得手なので困っている。
7. 他人にうわさされているようで気がかりである。
8. 意志が弱くて困っている。
9. 他人から理窟っぽくみられているので困っている。
10. 自分の悩みを人にうち明けられないで困っている。
11. 神経質でくよくよするので困っている。
12. いつも不愉快であるので困っている。
13. いつも運の悪い目に合うので悩んでいる。
14. 不注意なので困っている。

15. 物事を余り真剣に考えないので困っている。
16. 物事に自信がもてなくて困っている。
17. 勝気なので困っている。
18. 他人より身体の劣っているのが気がかりで悩んでいる。
19. 乗物に弱いので困っている。
20. いつも疲労感があるで困っている。
21. 憶病で恥ずかしがりやなので困っている。
22. 強情、頑固であるので困っている。
23. 自己中心すぎるので困っている。
24. 物事をあまり重大に考えすぎるので困っている。
25. 白昼夢にふけるので困っている。
26. ある不快な経験が忘れられなくて困っている。
27. 非常に涙もろいので困っている。
28. ひねくれているので困っている。
29. 体臭に悩んでいる。
30. 劣等感が強くて悩んでいる。
31. あまりに他人をうらやんだりねたましく思いすぎるので悩んでいる。
32. だれも自分を理解してくれないと思って悩んでいる。
33. うぬぼれが強くて困っている。
34. すぐに興奮するので困っている。
35. 物事をおおげさに言うくせがあるので困っている。
36. 依頼心が強いので困っている。
37. 他人と一緒にいると気が落ちないので困っている。
38. 指導者としての能力がなくて悩んでいる。
39. おてんばなので困っている。
40. ひとりぼっちだと強く感じて悩んでいる。
41. すぐに気分を傷つけられやすいので困っている。
42. 人の感情を害しやすいため困っている。
43. 他人のいいなりになりすぎるので困っている。



図1 全校生徒

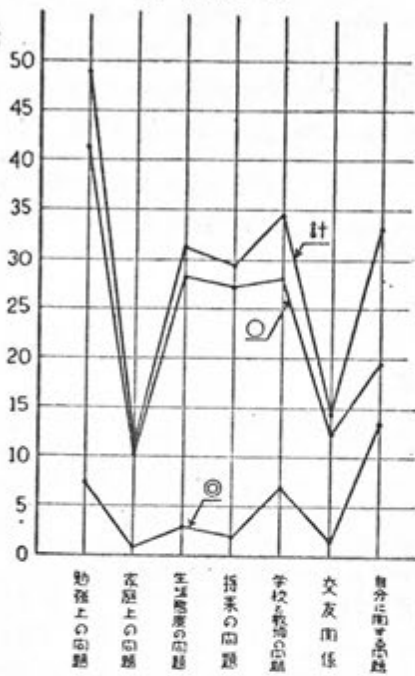


図2 他3校平均領域別1人平均応答数

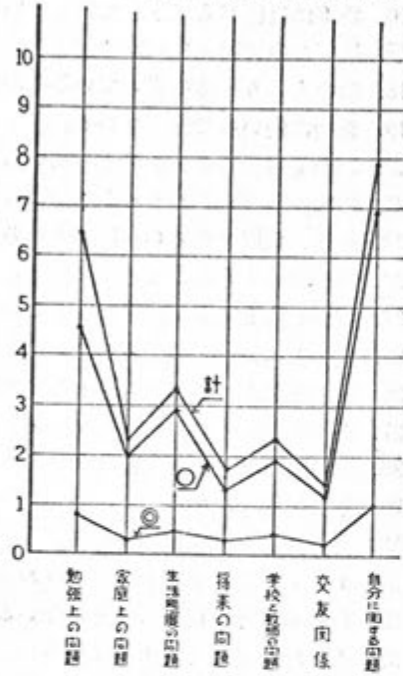


図3 二年生

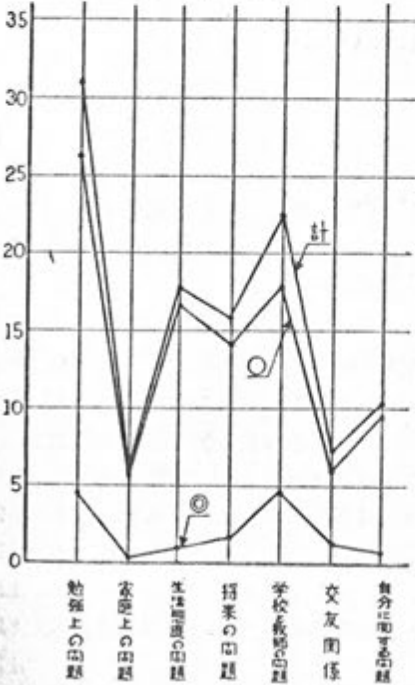


図4 一年生

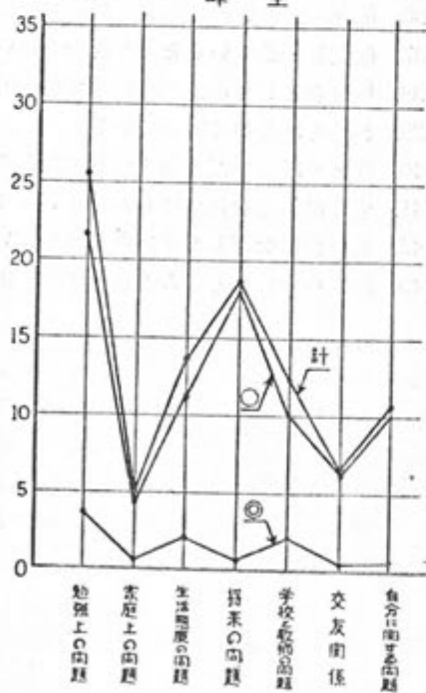


図5 (全男子)

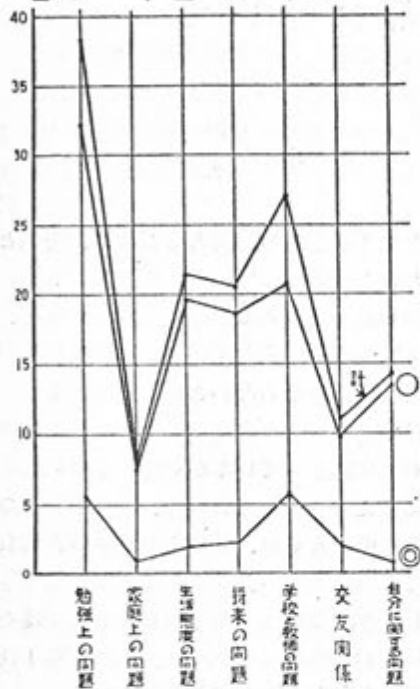


図6 (全女子)

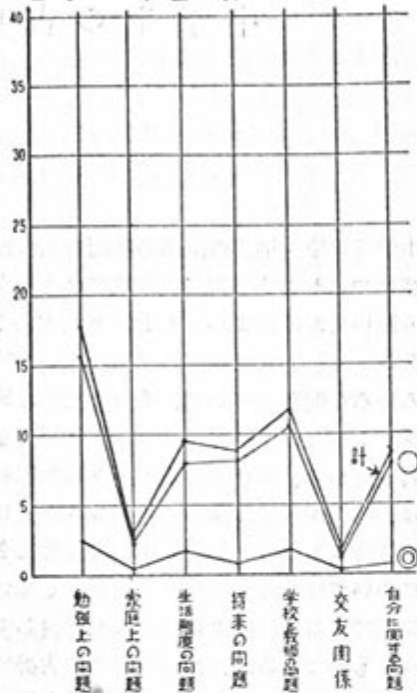


図7 (一・二年男子)

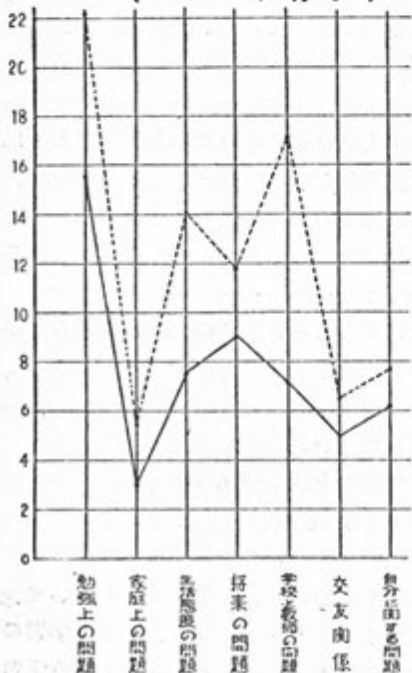
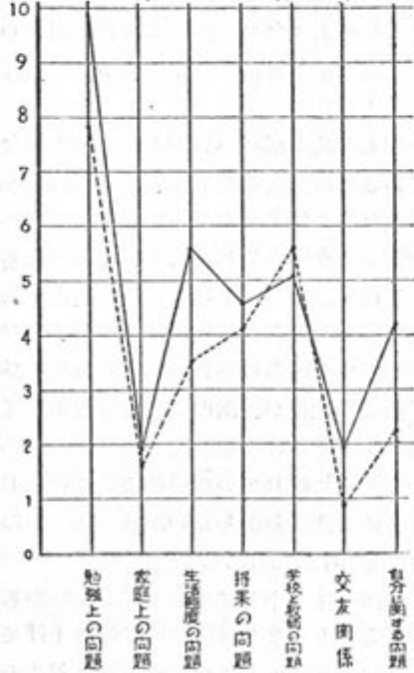


図8 (一・二年女子)



## 中学生の古典指導について

中 邑 元 子

中学三年生一年間の国語の時間を共に過ごしてきた卒業生から、折あるごとに、先生と一緒にやった古典学習が、高校では大変役に立ったとか、先生の国語の時間、もっとしっかり聞いておけばよかったとかと、本人や親たちから聞かされると、私はうれしい反面、自分として徹底した指導のできなかった後悔が強く胸をうつ。そして中学生の古典指導のいろいろな問題について、もっと真剣な研究をやらなければならないと思うのである。

フランスでは学生が古典の学習に努力を傾け、又多くの時間が古典学習に配されている教育制度から、フランス人がいかに自国のことばを大切に思っているかを感じさせられるとは、フランスで学ぶ日本の学生達が異口同音にとなえている所であって、現在の日本の国語教育のあり方と比較して、深く考えさせられるものがあるが、果して中学生の古典教育については、現在のあり方に満足していいものであるかどうか、まことに漠とした大きな問題であるが、種々の方面より検討してみたいと思う。本稿はその予告篇として一端をのべるものであるが、先ず中学生の古典に対する一般的な態度については、その指導上決して看過し得ない重要な要素であると思われるので、その点をのべてみたいと思う。

中学生が古典に対して最初に抱く考は、唯難解な、学習に困難を伴うものとのみの觀念がつよく、冷淡なかまえて、之に対して居ったように思われる。これは中学生だけでなく恐らく一般の大人たちも同じことだと考えられる。古典について書かれた吉田精一氏の文に、次のようなことばが引用してあった。「週刊朝日」(昭和三十一年一月一日号)に、浦松佐美太郎氏が

「どんな本を読んだらいいかと聞かれた場合には必ず古典をおよみなさいと答えることになっているという人がある。古典が楽によみなせ、それをたのしいと思える人ならば、このような答も結構だろう。だがそうでない人が、日本の古典、中国の古典、ギリシヤの古典を買ってきて、それをよまなければならないと思った時の気持はどんなだろう。恐らく「螢の光、窓の雪」の苦しみが再現せられるのではないか。……………」

と居られると、現代の代表的良識者の一人である人でさえ、このように考えられるのに、中学生が古典の学習に大きな抵抗を感じるのも当然である。古典学習の困難点としては、殆どの生徒が、次のような点をあげている。

1. 日常語とかけはなれたことばであるから理解しにくい。
2. 文語文に馴れていないので文章になじめず、内容の全体をつかみにくい。
3. 文語文法がわからないから一語一語の解釈ができない。
4. 漢字がむずかしい。

殊に「文語文法を十分に理解していないから、口語訳をよんだり、先生の講義をきいて、なるほどと思う程度で、文法的に掘り下げて、文の構造、語の用い方など、英語の学習のように、行かないから、全く他の文に対する応用力がついていない。」といっている学習



者の意見は、この困難点を解決してやった時の彼等のよろこび、古典への理解力の伸展を  
思わせるものを十分に感じさせられる。

しかしこのような中学生の古典に対する抵抗は、戦前の同年輩の生徒の学力とは到底、  
同列に論ずることはできない程の大きさである。一例をあげるならば、漢字の読みについ  
ても、弥生、読経、寝覚、恩顧、眷属、など古典をひもとけば、つねに目にふれる熟語で  
さえも、たやすく覚えられない。テストをしても五十人中半数以上は誤読する。

弥生(やしょう まんせみ みせい やよ やせい なむ あみだ あしょう)  
読経(どっきょう どっけい どくきょう どくけい どっきょ どうきょう)  
寝覚(しんかく ねおぼえ ねかく ねぼう しんしょう)  
恩顧(しこ おんけい おんがん おんじゃく)  
眷属(しゅんそく はいぞく せきぞく れいぞく めぞく もくぞく せんぞく  
ふぞく しゅうぞく はんぞく えいぞく)

(以上 誤読)

簡単な語釈にしても、古語としては最も常識的な、「況や」「やんごとなき人」「夜のふ  
すま」「ことわりなり」等のものでさえも、印象に残らないらしく、ことばへの無関心さ  
が目立つ。「野菊の如き君なりき」と映画でなじむことばでは「き」の解釈も当然の如く  
「君であった」と解釈できるのに、助動詞の「き、し、しか」の変化は何度くりかえして  
も、のみこめず、「反語法」などは、出てくるたびに、くりかえし、説明しても、正確な  
解釈のできるものは、五十人中十五人程度、「……だろうか」までしか解釈しないもの  
が十五人程度、あとは全然できないという状態である。殊に面白いのは、反語法であるこ  
とを理解していながら全然正反対の口語訳をこころみていることである。例えば「またや  
見む交野の春の桜がり……」の解釈の時、「もう一度見ることがあるだろうかいや見る」  
という調子、「政治を聞き召す」などは「政治をお聞きになる」という解釈ならば、何の  
不自然さも感じないのである。勿論そこには指導の問題点も考えられるが、もっと大きな  
原因は、生徒達に欠けている一語一語に対する鋭敏で、しかも細かな感覚の点にあると思  
う。伝統のことばに対する無関心さが、こうした古典学習を一層困難にしていると考えら  
れる。文部省の「学習指導要領国語科編」の二十二年度試案には

中学校の国語教育は、古典の教育から解放されなければならない。又特殊な趣味  
養成としての文学教育に終ってもいけない(二十二年度九七ページ)

と示され、その線に沿って、小学校時代を送って来た現在の中学生は、完全に、国家の示  
す国語教育の方向に向ってあゆんでいる。だから二十六年度の改訂版で(二十六年度改訂  
三ページ)

けれども古典の学習を捨ててはならない。多くの立派な価値ある作品が過去に於  
て書かれてきており、それを読解する力がつけば、その読書はたのしいものであ  
るばかりでなく、われわれの祖先の生活や精神が理解される。古典の学習が不要  
なのではなくて、国語教育を古典に限ることが狭いというのである。

と述べられ、中学校、高等学校の国語学習指導の目標の中、古典に関するものとして、

やさしい文語文や漢文体の文章をよむことができる (中学校)

文語文や漢文がある程度までよめる (高等学校)

と、あげられて、再び国語教育の中に、古典が登場することになっても、たのしい読書にするための古典読解力をつける国語の学習指導には、大きな困難が横たわっていることを感ずるのは前述の通りである。

ところが、このような現在の中学生を、一方古典に対する認識や、古人の物の見方、感じ方、考え方などに対する批判的な態度から考えると、その精神内容の成長には全く驚かされる。男子も女子も、概念的にしる、あるいは書物によって導かれた考え方であるにしる、古典とは、長い年月にわたって多くの人々に、その価値をみとめられてきた本であると、その意義を正しく把握してその価値をみとめ、又進んで

1. 古人のものの見方、感じ方、考え方、生き方を批判し、自己の生き方のよりどころとしようとする考え
2. 新しい文化を発展させ、築きあげて行く時の土台となるものであるとの考え
3. 昔の人のことばを、われわれは知る必要があるとする考え
4. 国語の読解力を養うのに大切であるという見方
5. 日本人である以上、祖先の物の考え方、感じ方を知るのはいかに必要であるとする考え方

によって、古典学習に意義を見出している所、指導の方法をあやまらなければ、立派に人間形成のよりどころとなり、日本のことばについての理解、言語生活の改善に役立たせることができ、民族としての自覚を持たせる指導の可能な素質を充分に感じとることができるのである。中には「始めはむつかしくてわからなかったが、理解ができてくると、なるほど深く心をうつもののあることがわかるので、もつと小さい時から口語訳などで、多くの古典にふれてきたかった」とか、「やはり長い年月を経てきただけあって、一時的な人気でよまれる本などは、根本的に違うと思う。私は古典というものが、最初おっくうに思われた。それは現代との時代の差によることばのちがいをおそれていたからだ。しかし読んでいて、なかなか口調が流暢で気持のよいものだとわかり、少し古典と親しくなったように思う。古典は何度よんでもあきのこない尊いものだとわかり、これから大いに古典を愛読しようと思う」などと、古典への積極的な接近の芽生えさえ感じとることが出来る意見もある。一がい、一部の識者のいうごとく、

「現代に生きる我々はなにも千年も前からの本をよむ必要がない。今日の本からよみはじめて行けばよいのだ。いつかは古典にたどりつく日もあるだろうし、その時は、たのしく古典がよみこなせるかもしれない。それまでは「古典」を、おあずけにしておくことである」

というような、極端な説に、純真な生徒の魂を、くもらせてはならないと思う。又各作品の受取り方も、生徒なりに素直な感じ方で、並はずれた見当違いも感じられないようである。すでに生徒達は現代人としての堂々たる買録をもって古典に対してしている。未熟ではあるが、それぞれに鋭い率直な批判ができることは到底戦前の同年輩の生徒には見られないところである。

戦後の中学校新教育から古典が一時すっかり影をひそめた原因は「古典が戦争犯罪者と同様に見られ、また扱われてきたことは事実である。それは戦争中、古典が国民精神昂揚のために総動員され、戦争遂行のための一翼を荷なったこと、そして敗北を招いたことに

して責任あるものと考えられたことにあるのである。日本が民主的な国家として更生するためには、古典的思想を断絶することが、まずもって必要であると考えられた。」と時博士が国語と国文学昭和三十一年四月号一頁にその見解をのべて居られるが、今日の生徒達の古典に接する態度には、上のような当局の危惧は不必要と考えられるのみならず、前記の同博士の「古典教育の意義とその問題点」と題する論文に於て、古典に対する我々の態度として次のようにのべて居られるのと全く同じである。

第一に古典とは「過去の長い年月にわたって多くの人々に尊重され、愛好されて来た文献であると期待したい。多くの人に尊重され、愛好されて来たのであるから何か人間性の根本に訴えるものに違いないのであるが、それが必ずしも今日の人々の興味と関心の対象になるとは限らない。しかしそれにもかゝらずかつて、多くの人の興味と関心の対象となったという理由で、我々はこれを古典とよぶことができるのである。そのような古典が何故に今日において教育の内容とならなければならないかの理由は、それが現在及び将来に対して、規範としての意味をもつためではない。古典は今日の自己が形成された所以を明かにするために必要なものとして教育されねばならないのである。古典は善くも悪くも、それが民族の精神的形成を物語るものとして教育される必要がある。

自叙伝が今日の個人を明かにする上に重要であるように、古典は民族の自叙伝である。自叙伝には栄誉と懺悔とが盛りこまれてあるように、古典はある場合には、民族の栄光であると同時に、ある場合には民族の懺悔である。古典をよむことは、民族が自己の過去を反省するという意味において重要なのである。以上のような古典をよむ態度は、古典によって自己を感化しようという感化主義の立場を放棄して、古典をよむことによって自己を批判するという態度をとらなければならない。(同五ページ)

と。  
現代にはぐくまれてきた生徒は、自らこの現代の大衆者の態度をもって古典に対して驚異を感じないわけには行かない。ある女生徒の意見に、「時代によって考え方のものは変わってくるものだ。現代に生きる私達は、現代の考え方しか持つ事が出来ない。昔の考え方が良いにせよ、悪いにせよ、それを知ることは必要だと思う。知れば知るほど考え方の範囲は広くなる。そこに反省も生まれ、進歩も生まれる。そういった昔の思想を知るための良い資料は古典であり、その意味においても、古典は価値の高いものだと思う。」とあったのは、まことに新しい古典の見方を純真にとらえているものといわなければならない。

個々の教材に対して、男子の生徒が万葉集の率直な魂をよるこぶ心や、金槐集、新古今集、山家集にも心ひかれている理解力は、繊細な感受性の祖先の血が流れていることを尊く感ずると共に、その芽をつむことなく伸ばしてやることが人間形成への大きな役割の一つであると思える。参考までにその感思の一例をあげると、ある男子の生徒は、新古今集について、

薄い桃色の紗のきれでつつまれたような、やわらかく美しい歌だ、口調よく歌っている内容が素晴らしくうっとりさせられる。美しい夢のような歌だが、少々哀愁の思いがはいりすぎている。しかし僕は万葉集と同じ位、いやそれよりも好きだ。

万葉集に対しては

のびのびと自由で素朴で率直に歌っているので心をひかれる。中にはごつごつした固いものもあるが、みんな草の匂や、波の音がきこえてくる自然の歌だ（教材は自然に関するものが多かった）作者も読者も一しょになって感激する。とりすましたところがなくて好きだ。力強い、読者の感激の大きい歌ばかりだ。

芭蕉の俳句に対しては

しっとりとしめった落ち着いた深い感じ。色でいえば深緑（苔むしたような色）。そしてしみじみとした感じがある。旅人芭蕉がただ俳句一すじに生きて作った歌だ。非常に語句が簡潔で美しい。心の中に余韻がのこる。

などといっている。女子の多くが方丈記の俗世間からはなれた静かな生活にあこがれるのも興味があり、反対に男子が最も多く方丈記の作者の態度を非難しているのも面白く、宇治拾遺物語の中の「絵仏師良秀家の焼くるを見て悦ぶ事」の良秀の芸術に生きる徹底した態度をほめるかと思えば、女子の多くが人間味のない良秀を嫌ひ、はては芸術より家庭が大切だと子供らしい未熟さをさらけ出している事などは決して中学生から古典を遠ざけてはならないどころか、積極的な古典学習の指導によって、日本人的なものの見方、考え方、生き方を知り、古典を通して又文学鑑賞の力をのばして行かねばならないことを痛感する。

以上述べて来た中学生の古典に対する態度は、殆ど門前をかけ足で通りすぎたような学習であったにもかかわらず、最後に調査して判明したものである。私は古典についての今後の指導研究に於ては、この点を重要な土台として積み重ねて行きたいと思って、あえて予告編として詳述した。即ち中学生の古典学習が、現在あまり必要を感じられていないにもかかわらず、一度び彼らに古典を与えることによって反響してきた響の大きさの中に完成教育として、又高校への準備教育として中学生の古典指導の重要点を見出して行きたいと思う。

ではこれに関して、どのような問題が考えられるであろうか。効果的な古典の学習指導については、今後つぎのような研究を続けて行きたい。

1. 教材の与え方（明治古典の取扱もふくめて）
2. 文法学習の問題（古典学習に関するもの）
3. 古典学習と語い習得力の問題

などの個々の研究から、(A)現在の中学生のたまかな理解力と、一語一語に対する感受性と  
の大きな距離を如何にしようとするか、(B)一部に行われているように、古典を与えるならば口語訳のものを与えるだけでよいという意見の検討、(C)古典学習によって国語に対する意識が、どの程度高められるか等の事について未熟ながら考えて行きたいと思う。

## 高校生の読書実態の調査にあたって

高 岡 輝 夫

久 島 惟 行

### ○読書調査の意義

読書調査は、その目的や対象によってそれぞれの意義をもつものであるが、われわれは読書調査とは、読書指導の出発点であるとともに、指導の効果を判定するバロメーターであると考え、調査によってわれわれは生徒の読書実態を知り、個人個人の読書特性をあきらかにすることができる。これにもとづいて指導が加えられるが、指導が適切であったかどうかは調査によって判明し、われわれの反省材料となる。

学校図書館が整備し充実するにつれて、図書館運営や技術の研究と並んで、読書指導が大きく取り上げられてきた。しかし、この方面の研究の今までの歩みは、学習指導や生活指導の場における読書の問題に限られていたようである。今一步深めて人間形成の基礎となる読書の研究といった本質的な問題が今後の課題となっている。さらに、その指導の根柢をなす読書調査についても十分に活用されているとはいえない。

高等学校の段階は、生徒の人間形成にとって極めて重要な時期であり、しかも、それが住々にして速成と速効を競う受動的学習に終始しやすい現状にあって、生徒の読書生活における適格な調査と適格な指導とは是非必要な事である。われわれが、あえてこの課題と取り組んだ所以もここにある。

### ○本校における読書調査

中学校・高等学校の六カ年間の継続的研究を標榜する本校としては、読書指導にあっては、中学校との関連を重視しながら青年期の読書人格の形成をめざしている。その第一歩として現在、読書実態の把握に努めているが、以下その際の留意点をあげ、詳細は実践報告にゆずりたい。

#### イ、多角的な調査方法

質問紙法に限定せず、観察、面接、記録、作文その他によって必要な資料を得る。

#### ロ、従来の質問紙法の欠陥是正

- a 最小限に項目をしぼること。
- b 記入、処理が簡単なこと。
- c 数的な処理だけに終らず、用紙を保存して個人指導や集団指導に役立たせる。

#### ハ、継続的、発展的な調査

必要な項目は今後継続的に調査を行うことによってその傾向を探る。中学生の読書実態と比較する。調査結果によっては第二次、第三次と原因追究的に調査を進める。

#### ニ、個人の読書特性の把握

個人別に資料を累積整理し、読書人格の形成の過程をあきらかにする。生徒の大半は附属中学出身者であり、六カ年にわたる読書歴が累積される。

# Paradox と Puzzle

福原公雄

終戦後隆盛を極めた生活単元による数学の学習指導も、最近においてはだんだん取上げられなくなり、より数学的な教材を、より論理的に扱われるようになった。その結果、学習そのものが、やゝ無味乾燥なものとなり、且つ単調に進んでゆくために、理解が深まる機会が少く、特に横の連関が薄れつつあるように思われる。そこで一度つまづいた生徒はそのまま取残され易い状態になりつつある。

そこで、数学に興味を感じさせ、より巾広い理解を得させて、少しでもその状態を緩和させるために、種々の工夫がなされなければならない。その一方法として教材の中に、パラドックス並びにパズルを取り入れてみてはと考えている。

パラドックスは、

- ① 定義・公式・規約その他の誰もが侵し易い誤った理解。
- ② 単位を伴った式の取扱い。
- ③ 開平をした時の符号の処置。
- ④ 不等式を負数で割った時、等式を0で割った時の処置。
- ⑤ 粗雑な作図に伴う誤り。
- ⑥ 仮定の取り方、極限に関する考え方

等々、規約上の盲点とか思考過程における盲点を巧妙にとらえている。即ち、生徒の誤り易い点をついているわけだから、数学学習指導上において非常に効果的であるといえる。またパズルは、数・代数・図形・順列・組合せ等全般に亘って、いろんな問題を総合的に取扱い、解答を得るためには、分析能力と緻密な推理力とが結びつかなければならない。故に現在論理思考の指導を、ユークリッド幾何に殆んど頼っているが、それにパズルを導入すれば、問題はやゝ具体的に、しかも巾広い範囲を扱う事になり、転移の問題についてもよりよい結果を得ると思う。

以上のような理由で数学学習指導への導入を考えてみた。しかし、少くとも数学教育をするためのもので、単に興味を満足させるだけのものであってはならない。そこで問題となるのは、どのような場面で、どの様な指導の順序で、どの範囲までを教材として指導すれば、最も効果をあげ得るかということである。

目下その指導計画を立案中で、次回において発表出来れば幸いであると考えている。

## 中学生と睡眠についての調査

辻 江 正 夫

人間の1日の生活の構成のうちで睡眠は、その約1/3をしめている。然も、食物をとらなくても人間はかなり長く、生命を維持することが出来るが、睡眠を一週間とらなければ、死んでしまうといわれている程、重要なものである。又、最もよい疲労回復の手段は睡眠であるし、中学生の頃の発育の旺盛な年齢に於ては、適度の睡眠は身体の成長発育に極めて大きな発育を与えるものである。諺に「寝る子は育つ」という言葉のある位で、適度の睡眠を取っている生徒は健康に於ても、学業成績に於ても、よい結果を得ているようである。

然るに、この大切な睡眠も、日常生活のうち、夜になれば、自然におこる現象として、我々は特に注意することもなく、経過しているのであるが、睡眠時間の長短、睡眠の深さ、睡眠時の姿勢、疲労の回復程度、冬期暖をとらなければ睡眠しにくいとか、明るい所では睡眠しにくいとか等、睡眠にはいろいろ個人差があつて、日常生活の一つとしていろいろな型に習慣化されているようである。この個人によつて、いろいろの型に習慣づけられている睡眠を、よりよい睡眠の型に改善していくことは、心身ともに急激な、成長、発育をとげる中学生の健康管理や、学業成績向上のために、大切なことであろうと考えるのである。

そこで、中学生の睡眠の現状は、どんなものであるかを、具体的に調査して、睡眠が、中学生の健康や学業成績に、どのような影響を与えているかを調べ、個々の生徒の指導の手がかりとしたいと思うのである。

調査する問題としては次のようなものである。

1. イ 睡眠時間の長短が栄養（比体重）に及ぼす関係
- ロ 睡眠時間の長短と健康状況との関係
- ハ       "       と睡眠中の姿勢との関係
- ニ       "       と学業成績との関係
- ホ       "       とクラブ活動（運動）実施の関係
- ヘ       "       とテスト（定期学業テスト）の関係

2. イ 睡眠中の姿勢（上向き、左側下、右側下、下向き、不定等）と健康状態との関係
- ロ 睡眠中の姿勢と夢の関係
3. イ 就寝時刻と健康との関係
- ロ       "       と学業成績との関係

以上の他、中学生を対象にいろいろの調査してみたいと考えている。

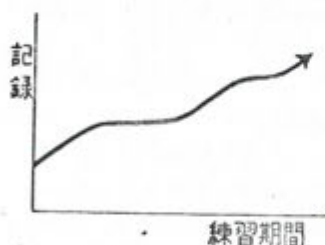
## 走力と練習効果

保 田 喬

「一定の距離をどれだけ早く走りきれるか」ということを走力と呼ぶならば、走力は内臓（特に心臓・肺臓）の機能、筋力、運動神経の働き等の総合されたものであると考えられる。然し、いくらその人の内臓がよく発達し、筋力が強く、運動神経が発達していても、本当に「走る」という事を練習しなかったならば、その人の最大の走力というものは出し得ないであろう。（例えば早く走り得る体力をもちながら、運動場をあちこちとあまり走りまわらないような柔道等の練習だけでは決して持っているその能力を十分に発揮出来ないであろう。）即ち走力を養うには、やはり走るに必要な各種の能力を「走る」という総合練習によつて最大限に発揮出来るようになるものと思う。（「最大限に発揮する」という事は、現在その人の持っている基礎体力に於ての問題であつて、「より早く走る」という問題になればやはり基礎体力の一層の養成とさらに総合練習というものが相まって行われなければならない。）

さて、こゝで取り上げて見たいのは、「より速く走る」といった発展的な問題は一応おいて、まず「現在の体力に於て、その走る能力を最大限に発揮させるには」といった問題である。そして、その上で「より早く走る能力を身につけるには、どのような基礎運動が必要であるか。又効果的であるか。」という問題と取りくんで見たいと思っている。

走力の進歩には一般に次の図のような型が見られる。即ち、少し走る練習をする



は向上し始める。然し一定の記録にまでくると、その練習を少々繰返しているだけでは、一向にそれ以上向上しなくなる。これが一つの山である。これ以上記録を向上させようとするればやはり、ただ走るといった練習だけではなく強い補助運動（より強い体力の養成）と、より強い走る練習とが必要となる。このような事から、この山が現在の体力に於ける最大の走る能力であると一応考え

られないだろうか。私は少くとも生徒をこの山まで記録を向上させてやるべきであると思う。そして次にこの山をのり越えて、次の段階に入っていく、これが真の体育のねらいと思うのである。（現在の自分の身体を充分にこなし得る能力を身につけ、さらにその上により立派な体力、より立派な能力の持主へと努力すべきものであると考えるからである。）

そこで私は現在、研究の手はじめとして取りくんでいる問題は、「生徒を第一の山にまで到達するには、どのように指導すればよいか」といったことである。これは研究対象たる生徒の人数が附中に於て少ないために長年月を要するが、次の事から始めている。

### ① 一定の距離を全力で走らせる。

中学校過程に於ては単なる競走という事については、特別の生徒を除いては一般にあまり興味をもたないものである。従つてその走力の養成についても単に「走る練習」で



は一向に生徒はついて来ない。そこに色々と指導法の工夫が必要となるわけである。然し、単にバスケットボールや、ハンドボール、サッカー等でボールを追って走り廻っているだけでは、相当の期間をかけるか、相当の量を課せない限り、一つの山にまでたどりつけないと考えている。この考え方は如何がなものだろうか。私は今この考えの良否をたしかめるために、単なる上述の運動のみで終わった時と、それ以外に毎授業時間中に少しづつでも何等かの形で、「ある一定距離を全力で走る練習」をした時との相違について比較検討している。

② 走る練習を反復することである。

単に走るという指導は陸上競技を教材として取りあつかっている時だけしか指導されない傾向がある。然も陸上競技を教材とし取り扱う時間は教材の関係上、一年間10~15時間位で、その内「走」ということになるのはほんの一年に3~4時間となる。その3~4時間も、走法の指導、スタート法の指導等で、本当に走るというのはほんの少ししかない。そこで、その走力の養成となると、やはり他の教材を取り扱っている時にも、何等かの形で走をとり上げなければ不十分となる。私はこの為に毎時間約5分の時間を取って、その取扱っている教材との関係に於てか、又はリレー等の方法により一定距離を全力で走らせることを試みている。この良否については、①の結果より出て来る。②の研究のねらいは、どれだけの走る練習が、どの程度の期間、行った場合に、どんな結果になるか。という事にある。

③ 以上の練習を各学級毎に季節別に重点を変えて練習する。

どの年令位の時に、又どの季節に練習をするのが一番走力の養成に能率を上げるか。を知るのがねらいである。

以上の結果については、まだ充分な資料が出そろっていないので、発表は差し控えておくことにしたい。たゞ「夏休みで運動はやっているが、あまり走りまわらない」といったような時には記録は低下している事だけは記しておきたい。

尚、最後に「走る練習」による内臓諸器管、その他への効果については、今のところ一応考えに入れず、走る能力という事についてのみ考えて見ているということをおことわりしておきたい。

## 日本語「が」「は」について

野村英太郎

1. 例えば A big cake was brought in. という英文がある。これを中学二年生に与えて日本語になおさせると

1) 一つの大きな菓子は持ちこまれた。

2) 一つの大きな菓子が持ちこまれた。

の二様の答が出て来た。しかも1)の方が人数が多かったので、2)の方がよいと言った所、何故ですか、と質問を受けた。

There was once a man. He had a hen. The hen gave him an egg every day.  
(Revised Jack and Betty, II, P. 17)

これにあたる日本語「むかし一人の男がありました。その人は一羽のめんどりを持っていました。この鳥は毎日一つずつ卵を生むのでした。」

不定冠詞 a(n) は初出の語に、定冠詞 the は既出の語に用いられると言われる。日本語では初出に「が」を、既出に「は」を用いられると言われる。上例の英文の続きは次のようになっている。

One day the man said, "It is good to get a gold egg every day. ...."

「或る日この人は「……」と言いました」

此の場合 the は動かないけれども「この人は」は「この人が」としてもよいだろう。そうすると、初出に「が」既出に「は」を使うということはすべての場合には通用しないということがわかる。

わが心に言聞かせるやうにお志乃はひとり言をいひ誰か来るやうなので、座敷ざかひの竹の垣のところを見た。／と、大きな犬が、垣の間からこちらへ入ってくるのだ。／「あつ獅子。おいで、ここへ」／呼んで手招きをした。犬は億却さうに…(略)。馬が首を出してゐる下に、獅子は長々と臥そべつて、もう眠つてゐた。／「有難う」と吾平。／「いゝえ」とお志乃は、わが家の方へ行きかけて立止まつた。獅子がむつくり起きて門の方へ行く……。 (土師清二)

2. "When the sticks are tied together, they are very strong" (Revised Jack and Betty, II, P. 65) は「棒切れは、たばねられると大へん強い。」に当るが、この日本文の「棒ぎれは」は「たばねられる」へではなく「強い」へ連なる。「棒ぎれがたばねられると、(それらは)大へん強くなる。」と言えは「たばねられる」へ連なる。

それは、彼が、トムスンが『四季』に於て時折示してゐるやうな浮誇体や虚辞空文、また『オシアン』に見られる「欺瞞的修辭法」等に対し大なる批難を加へて居る事によつて窺はれる。(矢野峰人)

3. 「が」も「は」もともに使われ得るような文法的位置において、この二語がどのような差違を持っているか、同じような文法的位置において、一方しか使えないようなことがあるか、などについて、実例を集めつつ、まとめて見たい。

## ミス・スペリングとその指導

田 村 啓

教室で英語を指導する場合、発音や文型にどうしても重点を置き勝ちで個々の単語のスペリングの指導は非常におろそかになってしまう。生徒は明日のテストに備えてやっとなを暗誦したかと思うと次に単語の書取りに可成りの時間をそまがねばならない。特に英語のスペリングに馴れないうちは大きな時間の負担となっている現状である。私のさゝやかな研究は生徒へのこのような障害を未然に緩和してやると共に、共通なミス・スペリングの傾向を未然にふせぐ為平素の書取りテストから個々の単語について生徒の共通な誤り易い傾向にあるものを調査し、その誤りの所在を整理すると共に、その原因をさぐり、それに対する指導方法を研究したい。

### 実態調査

平素の単語テストや文の書取りでは、よく注意して整理してみると個々の単語について共通なミス・スペリングを引き出すことが出来る。例へば frog (蛙) を flog, b:rd (鳥) を bard, river (川) を rever, disappoint (落胆させる) を disapoint 等教學にいとまないと思う。

### 資料収集

家庭作業もせずその結果全然スペリングになっていないのは問題外としても、生徒が一生涯懸命に努力し、しかも実態調査のような結果が出たとすれば事前に何らかの適切、強力な指導があれば生徒の方もスペリング作業に具体的な手がかりを得た障害も少くなると思う。以上のような見地から誤りに成程とうなずかれる点があれば資料として色々の角度からその原因を究明したい。

### 原因調査

入門期が過ぎて書取りを実施してみると has を hes, her を har, what を whato, とするような傾向が見られる。二年生頃では gone を gon, friend を frend, 等、以上の誤りに対する原因を想像してみると色々の事が考えられる。①発音指導の不徹底 ②ローマ字の影響 ③書記方法の不理解……等色々と考えられる。一方面接してきいてみるとあれこれと原因が分るものである。

### 指導方法の研究

大変結論が早いようであるが、much を mach とする傾向には a でなく u であることを強調するとか monkey を monky ではとくに板書に際して e の個所を色チヨークで注意してみるといったように、実際にそくして一語一語についての方法を研究したい。英語学習に於て色々と困難な問題が存在するが、スペリングの問題も大きなその一つである。いうまでもなく英語のスペリングと発音は不規則な面があり、これをどのようにすれば指導上最も効果的であるか発音とスペリングの関係を深く究明し、実際にそくした指導方法を考えたいと思う。

家屋構造一覽

【川上村】

昭和28. 家屋課税台帳、昭和10. 家屋台帳による

造	入之渡		大迫		上谷		神之谷		柏木		上多古		北和田		つぎ尾		中典		瀬戸		白川渡		下多古		井光		井戸		人知		白屋		迫		高原		西河			
	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10	28	10		
皮平	52	57	18	23	20	24	27	25	61	75	74	67	75	85	40	41	34	34	29	27	39	43	60	73	69	70	52	46	49	51	83	94	51	61	112	120	80	90		
皮2	7	7	1	1	3	2			18	17	24	17	9	11	3	3	4	3	1	1	8	7	6	6	3	5	9	10	3	6	7	5	15	13	11	10	2	4		
亜平	8	3	2	0	2	2	2	0	28	11	4	3	8	6	2	0	1	0			13	2	11	3	8	4	2	2	5	5	6	1	6	2	26	11	9	4		
瓦平	2	0							21	12	7	5									3	1	2	0	1	0			1	1	2	1	1	3	1	1	1	2	2	
瓦2									4	0			1	0	3	2	4	0			1	2	2	0			1	4	2	2	9	0	13	10	7	1	26	17		
瓦3													1	0	1	0	1	0			1	1	2	2			1	0	1	0	3	2	4	4	1	0	6	6		
レート平																																								
草平																																								
土蔵造																																								
平.2																																								
下付平									6	1																														
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								
下付2																																								
下付平																																								

